
怪盗キッドVS手錠VS工藤新一

ピアノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗キッドVS手錠VS工藤新一

【Nコード】

N9164K

【作者名】

ピアノ

【あらすじ】

題名、変えさせて頂きました！長編にするつもりです。以下は、あらすじです

キッドのお目当ては、「希望の（＝呪いの）ダイヤモンド」。今度の作戦も上手くいく……と思いきや、キッドのミスで大変な事態に離れたくても離れられない状況に陥ってしまったキッドと新一の運命は・・・黒の組織や、FBIも関わってきて、ラストには、蘭と新一の恋が急展開！？偶然から始まった幼なじみの恋に探偵と怪盗の

コラボ。本当に偶然なのか組織の罠か、？？そしてバーボンの
正体は…。蘭たちの考えた計画は、新一の思惑をぶちこわす結果に
おわるのか…。私の考えたコナン最終回です！！

兆し

始まりは、薄暗い部屋だった。雑音、ノイズが静かに響く中、一人の男がパソコンの光を覆うようにして何か調べているようだった。パソコンに映っているのはなんの変哲もないダイヤモンド——少し大きめで、有名になるほど珍しいわけでもない宝石店に必ずおいてありそうなものだ。5カラットで、他のものより値段がだいぶ高いこともあり買おうと思うものはない。しかし、その男は買おうとしてはいない。

——あの宝石を早く捨てなければ——あの事件の証拠となってしまう重大で、危険な代物を……

彼のごちゃごちゃと散らかった机の上には、朝の新聞や得体の知れない資料の山、飲みかけのコーヒーなどが置いてあった。新聞をざっと読んで彼はほくそ笑んだ。そこには、キッドの事件や、被害総額そして、予告状が載っていた。

キッドの正体が分かったぞ。まさか会ったことがある奴とはな——父親の敵のつもりか？

机の上の資料にはキッドの少年時代の素顔が映っている。予告状には具体的に何を盗むとは書いていないでも彼には予測出来た。

さて、彼の名前は黒崎秀十。黒の組織の一員、そして事もあるうちにキッドの父親を殺害した張本人。組織の上層部に助けを求めようとしたが、ふと思いついてやめた。証拠が残っていたと分かればこっちの命も危ない。失敗したらと考えて冷や汗をかいたが、すぐに立ち上がり新聞を取り上げた。「キッド」の部分を取り取る。数分後、脅迫状が出来上がった。

キッドの正体 が分かった。ばら されたく なければ、予告を取り消せ。

挑戦

怪盗キッド——こと快斗は、ある建物の前に来ていた。

豪華な外見なのに入ってみるとみすばらしい。

それは、国枝楓が、経営する宝石店。

そう、快斗はいま下見に来ているところだ。

中にはいると、十七歳の快斗をとがめるように見た。

快斗は誰から見てもただ冷やかに来ただけのように見えたからだ。
まあ実際、買わないんだけどさ——

奥のダイヤモンドを見に行くと、レッテルには金色の文字で、「希望のダイヤモンド」と書いてあった。

ところが、実物を見て快斗は驚いてしまった。ダイヤは半分しかなかったのだ。——まさか、オレより先に誰かが盗んだんじゃ……でも、何で半分？

少しすると、オーナーが満足そうに出てきて、

「ああ、それ、宝石店を開業してからずっとここに展示していて、みなさん驚きますけど、元から半分なんです。半分しかないからネットではよく似た別のものを販売するんです。たしか、これと対になるものが、ハイドデパートにありましたけど……私の密かな自慢なんですよ。」

と、嬉しそうにいった。

「へえ、希望のダイヤモンドねえ？」

快斗は店内を見回した。

儲かっているようには見えない。

前日に調べてきたことを考えると、希望と言っ言葉がなおさら白々しく聞こえる。

外見を見ると、宝石店を建てたときにはお金持ちだったらしい。内装がみずばらく経営が苦しくなったのは、たてたあとからか——しばらく考え込んでいると、見覚えのある二人が入ってきた。

「やあ、快斗くんやっぱりここにいたんですね。」

「よお、白馬。……白馬！？それに青子！何でここにいるんだ？」
「かろうじて、ポーカーフェイスを保ちながらいった。」

「白馬くんが快斗が絶対ここに来るって来てみたら、大当たりなのよ——すごいでしょ？ところで、何でここにいるの？」（青）

白馬が！？もう、平静を保つのが難しくなってきた。

「これ、見てみるよ、ホープダイヤモンドだぜ。これを見に来たんだ。」（快）

「何がおもしろいのよ。欠陥品の割れたダイヤじゃない。でも、あんな硬いダイヤどうやって割ったんだろ。」

「そんなのオレに聞かれたって知らねえよ。先人の知恵ってやつ

じゃねえの？」

快斗が、ひそひそと言った。

「縁起悪いから、このオーナーには秘密だけどさ、この宝石、呪いの宝石なんだぜ。」

青子は震え上がった。（そんなん、嘘よね？うそうそ！嘘に決まってるわ。）

「ルイ14世も持ってたことがあるらしい。持ち主のロシアの王子が暗殺されたりフランスの農民は自殺したり…希望のダイヤって言っけどな、みんなが希望しすぎて欲しがって、不幸になるダイヤなんだ。」

「へえ。快斗も、そんな迷信とか信じるんだー。マジックには種があるっていったのあなたじゃない。」

青子が気丈を装っていった。だが、内心は泣きそうで、今日の夢に出てきそうな気がしている。

「割れた、もう一つの方もあるらしいから今度見に行くか？」

快斗は成りゆきで普通にいったつもりだった。ところが…

「快斗のバカッ!!」

「どうしたんだよ、いきなり。」

快斗は、白馬をにらみつける。まったく、何で青子を持ってきたんだよ…

…さりげなく話を変えた。

「で？どうしてここだと思ったんだ？」（快）

「快斗くんがいる場所には必ずキッドが来るようなので見張ってたんです。笑」（白）

「え？怪盗キッドこんななのほしいの？趣味悪ーこんな怖いもの、盗ませておけばいいじゃん」（青）

白馬の奴……それに青子も…趣味悪いだど？快斗も負けずに言い返す。

「あ、ああ。ここには、来るだろうな。」（快）

「は？」白馬は思わず聞き返した。

オレが、認めたと勘違いしたんだろ、だけど甘い！誰が認めるか！

「言葉を返すようだけどさ、白馬の来るところにだって、よくキッドが来るじゃん。もしかして、本物のキッドはおまえだったりして…」

「そんな分けないじゃないですか！？」へへへ、向こうのポーカ―フェイスもめちゃくちゃだ。

「ほらほら、うちで喧嘩はやめてくれないかい？ただでさえ、お客が少なくて大変なんだから。」

オーナーが慌てて駆け寄ってきて、追い出そうとした。

お客が少ないって宝石店、この辺りにはここしかないんじゃないのか？快斗が不思議に思いながらも、店を出た。

もしかして、あの宝石が買われないように父さんを手にかけた奴らが、客を阻止しているとか？

災難ばかり起こしてるのを見ると本当に呪いのダイヤらしいな…

「そういえば、キッドの予告状何を盗むか、よく分からなかったね。だって、赤いブルーダイヤを頂くって、赤か青かどっちかにしてよね？」（青）

「それならわかってる、あの宝石のことだよ。ホーブダイヤは青いダイヤだけど赤い燐光を放つんだ。ホームズの本にも「青い紅玉」っていう、題名のが有るぜ。おまえの親父にいつとけよ。」（快）

「う、うん！ありがとう快斗！」（青）

青子が急いで帰っていった。

それを複雑な気持ちで見る快斗。
喜んでいいのか、悲しんでいいのか。アイツが、嫌ってるのもオレで、感謝してるのもオレなんだよね…

「よく知ってるんですね」

じとつとした声が聞こえ、快斗もギクツツとなった。こいつがまだいたんだった。

「だって、どこいったのか、わかんないダイヤがあつたら見に来るだろう?」（快）

「どうして、わかつたんでしょうね? オーナーも知らないのに」

「そ、それはマジシャンの勘だよ!」

「…まあ、それは良いですけど、紅子さんから伝言がありましたよ。」「いつもより丈夫で大きな羽にしておきなさい」って。なんのことは分かりませんけど。」

「羽?」

「心当たりないんですか・・・快斗くん呪われように気を付けて下さいね。」

——ハンドグライダーの羽のことか? でも、なんで……それに呪われるなんてオレは信じてねえよ? 脅迫状のことが脳裏をかすめたが、

快斗はその場をこまかして、準備をする為帰っていった。その助言が後になって役に立つことになるとは知らずに――

挑戦（後書き）

ホーブダイヤモンド…実際に存在します！

内容は少し変えましたが興味のある方は調べられます。

次の話は蘭と園子が登場します。

展開が進むのが遅くなりそうですが、気長に読んで下さい。

宝石の招いた運？

金曜日の夕方5時。部活帰りの二人は、バスで家に帰るところだった。バスの中はいつもよりも空いていて、数人の高校生しかいない。

「ねえ、明日本当に行くの？」（園）

「行くよ。コナンくんが絶対行くって言い張って、きかなくて」。

何処に行くのかと言えば、もちろんキッドの予告状の場所だ。この2日前、予告状が届いた。

「明日から明々後日の連休の間、魔法がかかる瞬間に、赤いブルーダイヤモンドを頂きに参上する。」

怪盗キッド

「

明日は土曜日で、土、日、月と連休になっているのだ。
昨日やっと目的の宝石が分かったばかりで、場所はそれよりずっと前にコナンくんが見破っている。

なんとそのお陰もあって、警部たちのおごりで三日間、捜査に加えてもらえるのだ！

場所は、博物館の中のホールで開演する米花劇団の舞台。

そこでは、「ハリーポッター」の劇をしていて、劇のメンバーには手品師もいて、魔法とマジックが両方見られる！と評判の劇だった。中には、鳩を出したり、煙で辺りが真っ白になったりキッドの得意なマジックもいくらかある。

「だって、その方が安上がりだもんねー。おごりなら、お腹一杯食べられるし！」

「園子ったら……でも、楽しみー。今、一番人気の劇をキッド捜索の口実で一番前で見られるのよ。」

「キッド様もぴったりの劇を選んだものよね？魔法と手品だって！キッド様、劇の団員に紛れ込んでると思わない？」

「まさか！笑そう言えば、大阪にも予告状届いたらしいわよ？キッドが狙う宝って事で、値段が一気に跳ね上がって、今はその博物館に寄贈してあるんだって。」

「聞いた、聞いた！オーナーが宝石を守れたら、初めに捕まえた人が企業にその値段の半分を揚げるって言うから日本中から警備員が集まって来ちゃったって！大丈夫かな？？」

「さあ、キッドにしか分からないよ。」

しばらく、そんな話をしていると蘭はふと前の席の女の子が目止まった。何だか見たことがあるような、ところ、誰だか分かった瞬間目を落として会話をやめてしまった。

「どうしたの、蘭？」（園）

「あの前の席の子、見える？あの子前に新一に告白した子だよ。」

水樹玲香っていうの。」（蘭）

少し沈んだ声で言う。

玲香は、髪が長く可愛い女の子で、端正な顔立ちをした美人だった。元、サッカー部のマネージャーで、いつも活躍している新一に一目惚れしてしまったらしい。背の高さもほぼ蘭と互角だ。

「そうなの！？」

「うん。新一は断ったけど、噂ではまだ片思い中……」

園子が、ホツと胸をなでおろした。なんだ、びっくりした。

「でも、それじゃ好きじゃないって事じゃないの。旦那は裏切ったりしないわよ！」

いつもなら真っ赤になって反論するはずの蘭が、今日は憂鬱そうに下を向いてしまった。

「ごめん。なんか悪いこと言った？」（園）

「……新一も本当にそう思ってるのかなって。だって、こんなに帰ってこないんだよ？いつ待ってる待ってるって。だって、もう半年もたってるのに！ゴメン。園子に言ってもしょうがないよね」

我慢していたがさすがに寂しくなってしまうた——そんな感じだった。

気まぎれな何もしないでいると、大声ではしゃいでいた最初の部分が聞こえたらしく、玲香が振り返った。

「あ！蘭ちゃん。久しぶりー。マジックショーにいくの？私マジ

ツク大好きなんだけど行ってもいい？」（玲）

思わず二人の表情がこわばった。このタイミングで？最悪だ。

彼女の表情にはキッドが来るならきつとあの名探偵も——と言う
期待がそっくり表れていた。

「じゃ、決まりね！明日、うちまで行くから！」

彼女はさっさと言い捨てて、急いでバスから降りてしまった。ちょっと！まだokなんて言っていないじゃない！図々しい奴。蘭とは大違いね。

「蘭！あんな奴に負けちゃダメよ！ああいうのは気に入らないけど、あれくらいじゃないと勝てないんだから！！！！」園子が激怒して気炎を吹いた。

「う、うん。園子は京極さんとは上手くいってるの？」（蘭）

途端に園子は申し訳なさそうな顔に戻って言いづらそうに言った。

「ごめん。蘭！昨日京極さんから告白されて……付き合うことになっちゃったんだけど……」

「ええー!？」

「言おうと思ったんだけど、言い出せなかったのよ。ゴメン蘭！」

確かにこの雰囲気では言えなかっただろう。それでも、蘭は寂しさが増したような気がした。

「別に良いよ、そんなこと。良かったじゃん。」

そっか。蘭は突然思い当たった。

そう言えば昨日から園子携帯ばかりいじってあまり私と話してくれなかったけ？

話しかけても上の空で……

詳しく聞いてみると園子は、堰を切ったように話し始めた。

聞かなければ良かった。園子が益々遠くなる気がする。友達の成功こんなには喜べないなんて、私は最低の人間だ。

喜べないのは蘭の中に僅かにでも「嫉妬心」というものが宿ってしまったからかもしれない。

新一がそんな風にいつてきてくれたら……私が言えたのなら――

そんなことを考えても仕方がない！園子の話に相づちを打ちながら思った。もし、新一が来るんだったら絶対あんな奴に負けないわ。さあ、明日は服部くん達も来るんだし、部屋の片づけも、洗い物も……とにかく頑張らなくちゃ！

蘭は気を取り直してバスを降りていった。内心新一が来るような予感はしていた。

ところが、後になって新一に好意を持つ蘭、灰原、玲香が来ることになったのは宝石の作った運命の巡り合わせかもしれないと、思うことになる。

彼女の誰か一人でも欠けていたら、こんな大変な事件は起こらなかったのだから……

宝石の招いた運？（後書き）

ピアノです

明日は、服部平次が来ます！コナンはまだ戻ってないみたいですが
……新一くんはもう少し後の方で出てきます

大阪&東京

探偵事務所はいつもより騒がしかった。今日は3連休の一日目。コナン達は、今すぐにでも出発しようと焦っているが、大人数なため準備もあってか、だいぶ予定時間に遅れていた。

「早くしないとキッド来ちゃうよ?」(歩)

「ちょっと待って!三日も止まるんだから着替えとか、お金とか色々大変なんだから……ねえ、まだ玲香ちゃんこないの?!?」

(蘭)

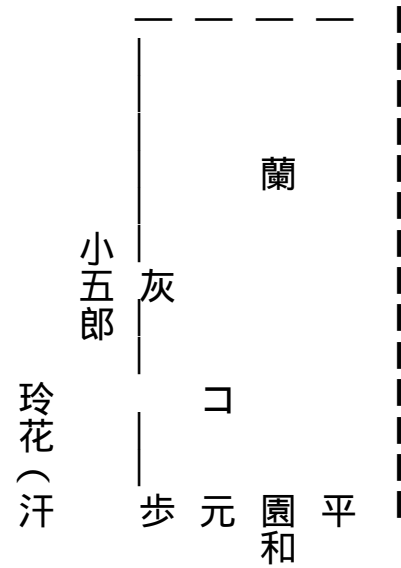
蘭が少しヒステリックに聞いた。強引に約束しておいて遅刻とは……いい度胸ね?

蘭の目がギラギラ光って、拳も強く握りしめていた。

その怒りの大きさはすさまじく、読書に没頭していたコナンでさえ殺気を感じて、慌てて蘭から離れた。他のみんなも、同じものを感じたらしい。蘭の半径一メートル以内には誰も人が寄りつかず端っこに並ぶように立っている。コナンは思わず苦笑してしまった。

「服部、和葉さんに、元太、光彦、歩美！何壁に整列してるんだよ？体育の授業じゃねえんだから。」（コ）

部屋の中の図



「シート！蘭ちゃん機嫌悪いみたいやから、逆らわん方が良い！コナンくんまだ小学生やで、分からんかもしれんけど、「触らぬ神にたたりなし」やで。」（和）

などと、勝手なことを言っている。

なるほどね……危険なのはオレが一番分かってるんだけど。こういう時の蘭は悪気がなくてもものを壊してしまうところが怖い。

「それじゃあ、暇な間に怪盗キッドの暗号のクイズを出してやるよ。」
「（コ）」

「クイズ？アガサ博士のじゃねクイズのパクリですか？」（光）
「キッドの暗号のクイズって、答え分かってるの？」（歩）

コナンは軽く頷いて口を開いた。
「じゃ、問題。キッドの予告状に魔法がかかるときってあったけど、それはいつたいどの時間帯でしょう？」

一、今日の午後

二、明日の深夜零時

三、明々後日の午後

「うーん。でも、「魔法がかかるとき」位しかヒントないんやろ

？」（和）

「ヒントは自分で探すもんだよ。僕、調べてきたんだ！。この時間帯は、劇がやっている時間で、三日間とも、違う種類の手品を劇の中で披露するんだ。内容は見てからのお楽しみって教えてくれなかったけど、キッドの性格を考えればこれだけで分かるよね？」（コ）

「キッドの性格？？そんなのおまえしか知らねえじゃんか！？」（元）

「わかった！キッドは正直言っただけ目立ちたがり屋なところがありますよね？だから、一番最後のショーで、一番すごいマジックをやつて、驚かすんですよ。だから、三です！」

「正解。よくわかったな！一日目とか、二日目で何か騒ぎを起したりもすると思うけど、宝石を盗むのは二日目だと思うぜ？」

「まあ、わざわざ大阪にまで予告を送ってくるんだから、よっぽ

ど目立ちたがり屋何やな？」（平）

ピンポン

問題を解いているうちに、事務所のインターフォンがなった。イライラしている様子の蘭を園子がしっかりと押さえて、和葉が出迎えに行った。

「遅くなつてゴメン！事務所に来る前に調べることがあったの。

」（玲）

「蘭ちゃんめっちゃ怒ってるで？」（和）

「あ、玲香ちゃん、おそよう」（お早う 遅よう）」（蘭）

こわっ！全員が抜き足、差し足、忍び足で、蘭の横を通り過ぎ、車に乗った。

「で、調べるって何を調べてたの？」（蘭）

「怪盗キッドの事よ？工藤くんのお父さんってすごいよね。初代怪盗キッドと対決したことあるのよね。工藤くんも来ると良いのに。」（玲）

コナンがびつくりした表情をした。この人、誰だったか……思い出した！なんで、ここにいるんだよ！？どおりで蘭がイライラしているわけだ。

「ちょっと！嫌み？工藤くんは蘭のことが好きなんだからね？」
(園)

え？？なんでそうなるんだよ！間違っているわけでもないけど……だめだ、意味わかんねえ。

「そんなじゃないって！」(蘭コ)

「そうなの！？」(玲)

玲子が驚愕する。どうやら本当に知らなかったようだ。女同士の地味な戦いはこの後も数分間続き、服部はおまへのせいだとばかりにコナンを睨んでいたし、和葉は、真ん中に割ってはいって止めるのに精一杯。非常に先の思いやられる展開となった。

そして、やっと車は駐車場に到着した。服部、小五郎、コナンは天国に到着したような気分で地面を踏みしめた。

すかさず、服部が言う。

「じゃ、今日のショーが始まるまで別行動！早く行こうか。コナくん？」

ダッシュで、二人は逃げていった。時間は午後二時。ショーまでは二時間ある。

蘭たちもやつと玲香と離れ、それぞれ宝石や劇の準備などを見に行った。

キッド登場まであと54時間。

大阪&東京（後書き）

ピアノです

まだ新一くんが出てくるのは先ですが……この状況でやってきたら、
どうなるかが怖いですね……

アガサ博士の新しい発明品！（一日目）

少年探偵団も、車から降り蘭たちと一緒に米花劇団の劇の準備を見に行っていた。劇の内容が、手品も含んでるせいもあって、仕掛けを見破ろうとたくさんの人が偵察に来ていた。

「僕たちは、キッド搜索班って言うことで中に入れるんですよね？」
（光）

「少年探偵団だって、有名だもんね」（歩）

「他にも、たくさんの探偵が来ているんですよ？服部さんに、白馬探さん、もちろん中森警部に……高木警部も！」

光彦が高木警部の名前だけ辺りに響くような大声で叫んだので、歩美も元太、蘭たちも飛び上がった。

もう一人飛び上がった人がいる。背広にサングラスという、観客としてはふさわしくない格好をした男だった。

「高木刑事みつけ！飛び上がるからすぐ分かりましたよ」（光）

「光彦頭いいなあ」(元)

「高木警部来てたんですね？てっきり不審者かと思って警戒してたんです。」(蘭)

「はあー。僕もまだまだですね…」

落ち込む高木を蘭たちが励ましていると、灰原がどこかへ歩き出した。

「どこ行くんだよ！抜け駆けするなよ？抜け駆けコナンのだけで十分だぜ。一人だけ大阪の兄ちゃんと手がかり探しに行くなんてずるいじゃねえか！」(元)

「ちょっと電話をかけるだけよ。」

そう言つて灰原は電話ボックスに入った。疑問に思っていることがあったのだ。

「もしもし。アガサ博士？灰原よ。」(灰)

「哀くんか。博物館の方はどうじゃ？」(博)

「こっちは大変よ。工藤くんに片思いの人が一緒に来ちゃって、喧嘩ばかりで耳が痛かったわ。これで本当に工藤くんが出てきたらどうなるか、想像するだけで怖いわよ。まあ、ここにはパイカルも他のお酒もいっさいないから大丈夫だと思うけど。」

「それは大変だったのう。それで何で電話してきたんじゃ？」（博）

「一昨日言ってた新しい発明品のことよ。あれって工藤くんの服のこと？特殊な素材でできてるらしいけど。」

「その通り！あの素材は伸縮自在で、工藤くんの体の大きさにまで伸びるようにできているんじゃ。外出先で戻ったりしたら、大変じゃろ？」（博）

「そうなの。便利ね。でも、今日は元に戻らない事を祈ってるわ。」（灰）

そして、電話を切った。電話ボックスの外を見ると、もう探偵団は

中に入っていて、高木刑事もいなかった。反対方向を見ると、公園の前をコナンと服部が通り過ぎるところだった。

今から探すのも大変だし、あの二人と話して時間をつぶそうかしら。あの子達、また抜け駆けだって怒るかもしれないわね……

灰原のリュックサックには、何か丸いものが光っていた。

* * * * *
* * * * *

「米花劇場内」

おもしろいこと聞いちゃったぜ！あいつ、パイカルって言う酒でもとに戻るんだな。しかも、片思いの女の子との喧嘩、すごかった（汗

快斗は盗聴器で話を全てきいていた。ここで、元に戻ったらコナンびっくりするだろうな。

アイツ、予告時間書いてないのに当てやがった。でも、その予告時間はオレが皆さんの前に現れる時間……盗むのはそれより前だぜ。

快斗はにやつと笑った。そして、隣の人物に話しかける。

「中森警部ー。僕今思いついたことがあるんですけど。」（快）

「なんだ。言うておくが、採用するとは限らんぞ。」（中）

「ショーの前に、劇団員をキッドに変装させて登場させるんですよ。挨拶の間だけでも良いですから。」（快）

「何でそんなことをしなくちゃいかんのだ！」（中）
大のキッド嫌いの中森警部は、憤慨した。

「何言ってるんですか。キッドを挑発するんですよ。そしたら、焦ってミスをするかもしれないじゃないですか!?!」

快斗も言葉たくみに、警部を言いくるめた。実際には、警備する側にとって、それが本当のキッドか分からなくなり混乱するものだ。

「それもそうだな……あの忌々しいキッドをわざわざ舞台に登場させるなんて気分が悪いが、逮捕出来るなら構わん!」

さんざん目の前で自分の悪口を言われて、冷めた声で言う。

「じゃ、これを使って下さい。キッドのほとんど同じ構造に作っ

「である銃です。引き金を引くと、白い煙が出てきます。このために用意しておいたんです。あと、きちんと偽キッドに、僕は本物ではなくこれはただの余興です。って言えって忠告しておいて下さいね。」

「君は、秀才だと聞くが勉強もきちんとしなくちゃだめだぞ。まあいい、後で劇団員の人に渡しておいてくれ。」（中）

「分かりました。」（快）

向こうでは、子供の三人組が遊んでいる。勝手に忍び込んだんだな、まったく。

騒ぐ声が聞こえてきた。

「元太くん、この博物館って例の宝石だけじゃなくて、高価な絵画や、色んな宝石がありますよね。キッドは他の宝石は盗まないんでしょうか。」（光）

快斗は、おっ？と耳を澄ました。

「興味がねえんじゃないの？」（元）

そう言つて、絵画に手をつく。その途端、絵画が壁の中に引っ込んで隣のランプが赤く光り、音を立てて回り始めた。

「君達、遊んじゃダメだ！警備は万全にしてあるんだから、いつさい触らないでくれ！」

すかさず、中森警部が飛んでいく。ランプの下のボタンを押すと音が止まった。

「ごめんなさい。」（元）

「あつ、おまえコナンの友達だろ？」（快）

「何で知ってるの？」（歩）

失言だったな……

「知ってるもんは知ってるんだよ！」（快）

「あれ？お兄さん誰かに似てるよ？」（歩）

「ホントだ。誰でしたっけ？」（光）

快斗は、子供でも一緒に話しているのは危険だ、と思つてぎくつとした。似てるつてたぶん工藤新一のことだ。そうか、もし新一が元

に戻ったら、アイツに化けられなくなるんだ。

「オレは、会ったことはないよ。ほら、もうすぐショーが始まるから。」

快斗は、中森警部と探偵団から離れた。

床に銃をおき、預かっていた警部のカバンを開ける。

「あった。あった。中森警部こっそり酒をもってきてやがる。思った通りだ。居眠り防止のために酒は禁止なのに――」

ワインのラベルを見ると……なんとハピカルだった。

うわぁ。すごい偶然だ。すこし眺めてから、栓を開け、銃口に二三滴垂らした。この銃は、丈夫なためこの程度では湿って、壊れることはない。

栓を「職人の技」で、元通りに締め直して、銃を拾い上げた。

さあ、ショーの始まりだ。その目にはいたずらな光が灯っていた。

アガサ博士の新しい発明品！（一日目）（後書き）

やっと進んできました！

次は、コナンと平次の話です

公園前から

公園前の道を、平次とコナンは歩いていった。公園を通りすぎると、そこには大きな湖がある。

ここは、二日目に遊びに行こうと計画している、石田湖だ。基本的には、遊泳禁止だが、明日はたくさんの客が来ると言うことで、足首までならつかれるようになってる。

「工藤、さっきの玲香ツちゅう奴だれなんや？」（平）

「オレのはいつてたサッカー部のマネージャーなんだけだよ。オレの蹴ったボールがその子に当たって、怪我したことがあったんだよ。母さんがお詫びについて送ってきたアメリカの名物を届けに行ったら、告白されちゃったって訳さ。」（コ）

「で、おまえをどうしたんや？」（平）

「もちろん断ったぜ。蘭のこともあるしな。でも、昨日の様子じゃ……まだあきらめてねえんだな。」（コ）

「あゝあ。お互いもてる男はつらいな。オレまで巻き込みよって。」（平）

服部は、大爆笑だった。

「なんじゃねえよ！しかもお互いは余分だ。」（コ）

「おまえ子供の姿で良かったな。知らんぷりできて！」（平）

「だから笑うなって。」（コ）

すると、後ろから来た灰原が話に突然割り込んできた。

「本当にね？歩美ちゃんにも、好かれてるらしいし。」

二人が、驚いて振り向くと……

「じゃ、ここにはあなたを好きな人が四人いるってのね。」（灰）

「四人？だれだよ！」（コ）

「えっと、毛利の姉ちゃん、玲香さん歩美に……」（平）

「例えば、園子さん？和葉さんかもしれないわねえ？」（灰）
灰原がからかってごまかした。

「なんやて！？ありえんわ！」（平）

四人目は私だけど…この鈍感な二人に分かるわけないかつ

「後、玲香さんなら宝石が展示しているところにいるわよ。もうそろそろ劇場に行かないと間に合わないし。」（灰）

二人は、歩き出した。

コナンも、二人の小さい兄妹を年上の兄が世話しているような情景に不満そうにしながらついて行った。

「宝石保管室」

「これが、キッドの狙う宝石、ブルーダイヤモンドね。」

ブルーダイヤモンドは、半径三メートル以内に近づけないようになっていて、周りを遠巻きに動く人影のせいで恐ろしい力を持っているように見えた。

なぜか、この宝石は玲香を不安にさせた。

宝石が悪意をもっているというか、元は大きかった宝石を研磨していった人間に恨みをもっているというか、不吉なものを感じる。

来るんじゃないかった。こんな宝石を見に来たんじゃないんだもの。

半分になった宝石は頑丈な防犯装置や警備員にかこまれ、相変わらず不気味に光り輝いていた。

「その宝石に近づかない方が良いでしょう。気分悪くなりますから。」

となりに立っていた白い服の男子が忠告する。

「あなたは、誰？」

「僕は白馬探。キッドを捕まえるために来た、探偵ですよ。ところで、君はこの人見かけませんでしたか？」（白）

白馬は、ポケットから快斗の写真を撮りだして聞いた。しかし、快斗の写真は知らない人には新一の写真にしか見えない。

「知ってます！ここにいるんですか？」（玲）

「え、いや。僕がいまませんでしたかつて聞いてるんですけど……」
（白）

「よく分かりませんが、とりあえずこれ、もらってもいいですか？」（玲）

写真をひったくり、戸口まで走っていく。

「ちょっと！それは、大事な資料で僕は仕事なんですけど！？」
（白）

「ありがとうございます！！」（玲）

「いえいえ、当然のことですよ……じゃなくて返して下さい！聞いてない。はあ、ぼくも見に行くか。」（白）

白馬は、そうつぶいやいて宝石安置所をあとにした。

「劇場」

こうして、たくさんのギャラリーの集まった、劇場は混み合って絶えず人の声がしていた。

その声の中には、もちろん警備員のひそひそ声や探偵の情報収集する声も混じっている。

前列の特等席は、四人が占領していた。

「楽しみだね。マジックショーなんて新一と新一のお母さんといったきりだよ。」（蘭）

そういえば、あの時は事件が起こったけ。あとで、お守り買ったとこ。

「劇の前にサプライズがあるらしいよ。中森警部の娘さんの幼なじみが、提案したっていう。」（高）

「中森警部に娘さんがいるんだ。意外！。」（園）

話している高木警部はいつもより元気がなかった。変装を見破られたのがそんなにショックだったのか。

「高木刑事は、課が違つのに何でキッドの搜索を手伝ってるんですか？」（園）

「この前の事件でうつかりしてて、また警部に怒られちゃってね。こっちの事件も手伝わされることになったんだよ。」（高）

「あ、それで、元気なかつたんね。でも、キッドの事件ではみんな失敗するから、失敗しても目立たないところにとばされはったんめちゃう？頑張って挽回せな。」（和）

「……そうですね。頑張ります！」（高）

あと、十分に劇が始まる。後ろでは、ざわめきが頂点に達して……ガッシャーン！バラバラ！（写真返してください！）（この人がついてくるんです！）

「ねえ、いくらなんでもうるさすぎない？」（園）

「大阪はいつもこんなかんじやで」（和）

「ここは東京だけど、気にすることはないよ。」（高）

「えらい騒ぎやな」和葉、ちよっともう二個横にずれて座ってくれ。

「（平）

コナン、平次、探偵団も合流した。

そのとき、劇の幕が開き始め、辺りは急に静まりかえった・・・

Ladies & Gentlemen!

LADIES & GENTLEMEN!

幕が上がりきったとき――そう叫ぶ声が聞こえて、会場の全員が息を呑んだ。怪盗キッドが、天井から降りてきたのだから。コナンは、自分の推理が間違っていたとおもってあわてふためき、飛び出そうとした。混乱して警備員が一人残らず動かないことを、不思議に思う余裕のあるものは少数だった。

怪盗キッドはゆっくりと周りを見渡し、灰原に腕を引っ張られ抵抗している子供に一瞬目を向けた。
たしなめるような視線を送り、一礼してから口を開いた。

「ようこそ、わがマジックショーにご来場頂きありがとうございます。」

子供がいぶかしげな表情をする。当然だ、キッドがこんな事言うはずない。

快斗はドアにもたれ、笑いをこらえながらこの混乱を眺めていた。

（警部は判断を間違えたことに気づいたかな？）

中森警部は、本物のキッドを捜すようにきよろきよろしていた。

目のまえだよ、目の前。鈍い人だなあ。

そして、偽キッドにまた視線を戻す。

「驚かせてしまったようですみません。まず、劇場の周りに警備員が巡回させて頂くことを、お詫びさせてください。聞き込みで知る限り、ご来場のお客様の中には、恐らく彼の予告状について興味を持っていらっしゃる方も、多くいらっしゃるでしょう。しかし、我々は決して彼に屈したりはしません。そして……このような格好をしたものがあれば、すぐに警察に通報を……（笑）これは、宝石をぬすむと予告した怪盗キッドへの挑戦。警部さんから是非にと頼まれた余興です。劇はこれから始まります、どうぞお楽しみ下さい。」

そう、怪盗キッドが警察にださせた挑戦状だよ。コナンが、怒ったような顔をする。まんまとダミーに引っかかって、これは自分への挑戦状だったことに気づいたらしい。でも、おもしろいのはこれか

らだぜ。

最後に怪盗キッドは、パイカル入りの銃をとりだし発砲した。銃口からいつもより多く火花が散っていた。ダミーのキッド役も、ぎよつとしてるんじゃないかなあ。いまや煙が、辺り一面に立ちこめ隣に座っている人すら見えない。

― 何かこの煙、火薬というより、妙なおいがしないか？

― それよりキッドは？

― たぶん消えたんだと思うよ

あちこちから声が上がった。コナンは何も何かの違和感を感じていた。おかしいな、ただの煙なのに。

これじゃあ、まるで……ドクン！ドクン！鼓動が早くなるのと同じ時に心臓に強い痛みを感じた。

なぜ？これは体が元に戻るときの痛みだ。まさか他に姿を元に戻す成分があるのか？

霧が晴れ、気付くとなんが心配そうに顔をのぞき込んでいる。いったいどうしたの、大丈夫？

コナンは、トイレに行ってくるつと言って急いで走り出した。服部も事情は分からないがコナンの表情から窮境を察して、追いかけて

きた。よほど急いでいたように見えたのだろう、扉につくと親切な人が扉を開けてくれた。

慌てて振り返ると、その人は……オレだった。

いや、そんなはずない。自分に変装したキッドにきまつてる。そいつがかすかに笑って、こっちに向かって気障に手を振っている。

扉がスツと、さっきまで開いていて自分と向き合っていたのは幻だったのかと思うほど、静かに、しまった。まさか、おまえの仕業か？ どうやって知って、どうやって実行した？ 服部は立て続けに起こる現象に呆然としていたが、我に返って物問いたげにこっちをみってきた。俺も、状況を思い出して、また走り出した。

数分後……さらに困惑した表情になった服部と、疲れ切った新一が出てきた。

「今日はよく工藤にあうなあ……もう訳わからん」

「オレに何も聞かないでくれよ……おめーが分かってること以上はわからねーから」

まだ信じられずに、指を動かす新一。小さい体になれている彼にとって元の体には違和感があるのだろう。

「ああ、仕掛け人はキッドってことだろう？ どうしてこうなるんだ」
度肝を抜かれて標準語をしゃべっていることに気づかない。その理

由が、マジシャン特有の単なるいたずら心だなんて、知る由もなかった。新一は、初めて標準語をしゃべった平次を面白そうに観察していた。

この時だけは、自分に起こった異変が他人事のように思えておかしかった。この時だけは。

「キッドの奴、本当ばかにしてるぜ。警察も、あの余興に意味がないことくらい気付かねーのか」

「ホンマに。アガサのじいさんが発明があつたからよかつたけど、なかつたら後一時間はトイレに籠もらないけんかつたよな。今からどうするんや？ 劇場に戻るわけにもいかんやろ」

そこまでいって、新一を見るとどんどん顔色が悪くなっていくのが分かった。

「ああ、最悪だ……」

「はあ？」

「玲香さんとか蘭のこと忘れてた……このままじゃ、かなりまずいことになるな」

怪盗キッド……理由は分からねえけど余計なことをしゃがって！ 後で本物の工藤新一と対決したかつた、だなんて言わねーだろうな？

新一は今までにないぐらい強くキッドを捕まえてやりたいと思った。ただ、怪盗キッドが盗聴器で状況を知り尽くした上で、こんな事をしていることも本人だけの秘密。服部は、哀れむような目で新一を見てから肩を叩いていった。

「まあ、ドンマイ！ 氣い落とすなや。オレは、巻き込まれんように、遠くから見守ったるで。」

「そんな薄情な… おめえも助けるよ！」

絶望したような声でいった。新一や平次には、差し当たりどんな殺人事件や誘拐よりも難解な課題だった。

「……できたらな。とりあえず今日はオレの部屋にかくまったるから、先に部屋に戻つとれ。あとは、オレが上手く考えたるから！ コナンが事務所に帰る理由は、腹痛とか熱とか適当にいうとく」

「頼む。それと、話し合わせねーと行けないしマジックのことは後で教えてくれ」

「了解。ほな！」

服部の部屋は、三階、307号室。新一は、入念にキッドを捕まえる計画を立てるため部屋に戻った。

平次が劇場に戻り、もとの席に座ると、すかさず蘭が話しかけてきた。

「コナンは？ 大丈夫だったの？」

「ああ、頭が痛いらしいから、先に帰るって。アガサ博士のところに行くって言ってたから心配いらん。」

毎度のことながら無理があるんじゃないかとひやひやする言い訳を繰り返しながら、服部は蘭の顔を窺った。

「ええ。まだ、一日目だよ？明日は、湖に遊びに行こうっていったのに。」

蘭が、不満そうにした。幸いその目に疑いの色はないが、心配そうな表情は消えなかった。

「残念やね。ご飯はどうするん？」

「あ、ああ。新一の両親がアメリカから帰ってきてるみたいやから、電話しといたで。」

適当な作り話だから、あとで辻褄が合うようにしとかなー大事やな……はあ

「ふうん。」

全員の関心が劇の方に向いた頃、灰原がひそひそと聞いた。

「工藤くん、まさか元に戻ったの？急に頭痛を訴えるときっていつも……」

「今、オレの部屋。おまえはどうなんや？」

「私はちょうど席を外してたから。会場が騒がしい原因を探しに行ってたの」

「気づかんかった。扉の傍にだれかおらへんかったか？」

「いいえ、中森警部しか見なかったわよ。誰かにあったの？」

「ああ、工藤に変装した奴見かけたんや。状況から考えてそんなことするのはキッドしかない。どうにかして工藤が元に戻る方法知ったらいいわ。」

「それはおかしいわね。まさか彼も組織のこと何か知ってるのかしら……そうでなければ何かのつながりが……」

服部が深刻に考え込む灰原を見下ろしていると、ふとカバンについてるゴミが気になった。

「なんやろ……」

光る銀色の何かをつまみ上げた。その小さな丸型の物を手で転がしてみると、何かに似てる。

「工藤の盗聴器に似てる……」

「しっ！静かに、でも、いまさら遅いわね」

灰原は無言でその丸型の物を取り上げ、子供の力で出来る限り強く踏みつぶした。

「私は、アガサ博士と薬の事を話したわ……迂闊だった、こんなに警戒心が鈍ってるなんて」

「それについては深く考えるなってよく工藤がいうとったで。幸せになって安心できるっていうのはわるいことやない。相手がキッドで幸運だったと思うべきだ」

「でも……いつもこうとは限らないわ」

また灰原の口調が深刻味を帯びてきたが、長くは続かなかった。突

然バサバサバサツつと頭の上をフクロウが飛んでいったからだ。もうとつくに劇は始まっていた。魔法界らしさを出すためのパフォーマンスだった。壁際には、全部電気がつかずキャンドルやロウソクで辺りを照らしている。舞台には薄明るい照明。フクロウがホーホー鳴くせいで、本当に夜が来たかのような雰囲気だ。照明が黄色っぽく変わった。満月の夜と言うことらしい。「幸せ、か」灰原も今は劇に意識を集中しようと考えなおしたらしい。額にしわを寄せ、足元の盗聴器を凝視するのをやめた。

第一幕はこんな感じだった。一匹の猫が塀に「座っている」。「座っている」のは、彼女が人間だからそういう表現なのだ。長身の男、アルバス　ドアが静かに歩いてきた。猫はそうするようにしつけられていて、近くの箱の中に入った。十秒くらいすると、箱からは女の人が出てきた。彼は何事もなかったようにいう。「あなたも来ていたんじやのう。マクゴナガル先生。」

その場の雰囲気に合わせて、静かな拍手が巻き起こった。

「すごいわね」

「本当に魔法みたい」

服部と灰原は、口にこそ出さなかったが冷静だった。一瞬で種を見破ったからだ。でも、この劇場の雰囲気は嫌いではない。台無しにしないために、同調した。

劇が進むと、舞台の後ろには、大きな肖像画がでてきた。その肖像画は「太ったレディ」。魔法界の動く肖像画だ。その肖像画が話し出す……という感じで劇は進行した。

服部は肖像画に防犯ブザーにも設置してあるのをみてしまった。ただ、劇の途中になるといけないので、サイレンの音は出ないのだろう。他の館のようにランプが光るようになっていて、ここもボタンを押せば止まるしくみなのもかもしれない。

厳重な警備やなあ。これに、オレと工藤、日本中からの警備員がいたら、キッドも逃げられん。

劇が終わり、それぞれが自分の部屋に戻るため、別々の道に分かれた。女子が二階、男子が三階に行った。鍵を取り出し、扉を開けたときに初めて灰原がいた。こっそり近づくの得意やな……

灰原は、無言で中に入ると疲れてうとうとしている新一に話しかけた。

「調子はどうなの？」

少し目を開けて答えた。

「やっぱり、体力消耗する。この状態いつまで保つんだろうな」

「私は、やはりキッドの銃からの煙幕が原因だったと考えてみたの。当然銃に何か仕込んであったのよ。だとしたらすごいわ、さつき計算した」

その効力が持続する時間は二週間。キッドの銃に入っていた火薬とパイカルが化学反応した結果、変質し、解毒剤としての効果が十倍になったというのだ。元の物質とは性質が異なるので耐性のついた新一にも効いた。

「二週間！？すげー、いままでで、一番長いじゃねーか」
前のはせいぜい半日から一日だった。

「それだけ不運だったとも言えるわね。」
意地悪そうな目をして、すかさず言う灰原。

「まあ、それが普段だったら嬉しいんだけどな。コナンは父さんに誘われてアメリカに長期旅行したことにすれば良かったんだし」

新一は、肩をすくめていった。ちなみにコナンの両親は、父親が作家で母親が元女優、つまり新一は天才の親持っているのだが、今は二人ともアメリカに住んでいる。コナンは、工藤家の遠い親戚ということになっているので、そういえば怪しまれることはない。

「それは残念だったわね。あたしが言いたいことはそれだけだからあとは、どうするか、自分たちで考えなさいね。」（灰）

灰原が出て行った後、服部と話すともうなんて言うかは考えてあるようだった。

服部は「絶対反対するから言いたくない」と言い張り、問いつめても何も答えなかった。

「わかったよ。何も聞かねえから。そうだ、マジックはどうだった？」（新）

彼は、マジックの一部始終を話した。

「簡単なトリックやったわ。確かに箱に穴は空いてなかったけど、猫に上からかぶせたんやから床とは接しとる。床に隠し扉みたいなものがあれば、マジックでも何でもないやろ？」

得意げに言った。

「おめえ、そんな簡単な謎解きを得意げにいうなよな。オレだってその場にいたら分かったんだから」

「マジックはともかく、劇はおもしろかったで。」
それから、いたずらっぽく笑っていった。

「それじゃ、その場にいればわかったっていう証拠を聞かせてもらおか？東の名探偵」

新一は一瞬きよんとして、答えた。

「あるわけねえだろ！」

蹴つてとばしたクッションがバン！平次の顔面にあつたつて、怒り出した。やはり、コナンの時とは訳が違う。

「なにするねや、ボケ！疲れたんならさっさと寝ろや！おまえはソファーやで！ここは自分の部屋なんやから」

どしどしと足音を立てて、寝室に向かい、新一もソファーに横たわった。あーあ、何でこうなつたんだろうな……結局答えのでないまま眠りについた。

Ladies & amp; Gentlemen! (後書き)

やっとここまで来ました! まだまだ続くので、ヨロシクお願いします。

服部平次の贈り物（二日目）

次の朝……ひとつのテーブルを囲んで食事をしていた一同だったが平次だけはソワソワして食事も喉を通らないらしかった。少し食べただけで箸を置いてしまい、周りを心配させた。

「平次？気分悪いん？キッドのことで緊張しとるの？確かにこの前の仕掛けは唐突だったからうちもびくりしたけど、あれは偽物やったから大丈夫やったやろ？」遂に和葉が声をかけた。

「別に……」返ってきた答えは案外素っ気ない。そして、ため息をつくと机に頬杖をついて、動かなくなった。もう、食べる気はないようだ。

「ねえ、平次、どうしたんやろ。」

和葉が、ひそひそと蘭と園子に聞いた。

「あ、もしかして、恋じゃない！？だって、すごい食欲なさそうだし！きつとそうよ、ねえ和葉？？」

園子が、嬉々として答えた。高校生にとって、友達の恋は一大ニュースなのだ。

「それに、昨日から劇終わったらすぐ帰っちゃったり、様子おかしかったじゃない」

「鈍感な平次に限ってありえへんてー。恋で食欲がないなんて一番似合わん人やわ」

背後で、こんな勝手な会話が交わされているとも知らずに平次は、またため息をついた。

しばらくして、平次が立ち上がるところだった。「毛利の姉ちゃん。後で、渡したいものがあるから、オレの部屋の前に来てくれるか？」

意外な質問に、蘭を始め席に着いていた二人も目を丸くした。

「なんで・・・なにがあるん？」和葉が聞くと、服部は慌てて赤くなつて答えた。

「姉ちゃん、もうすぐ誕生日じゃなかったか???は、早めの誕生日プレゼントや!」

……もしかして平次の好きな人って・・・蘭ちゃん!?

平次が出て行き、目の前に雷が落ちたような表情をした三人に、それを見て不思議そうな探偵団、涼しい顔の玲香が取り残された。

「私の誕生日って、まだずっと先なんだけど・・・?」

「蘭ちゃん、ゴメンやけど私もついて行ってもいい?」

外では一陣の冷たい風がガラス窓に当たり、寂しい音を立てた。

一方服部は、階段を軽い足取りで上がっていた。――やっと、広間から抜け出せたわ。工藤がなにか感づく前に行動せな

そういえばオレ、さっきの態度おかしく見えたかもしれないな．．．でも、彼はこれから起こる（怒る？）であろう数々の憂鬱な事について考えていただけなのだった。

それから三十分後．．．平次の部屋の前には蘭と園子、和葉、玲香が来ていた。

「あの、鈍感！！なんで、蘭なの。いつも、迷惑かけたり一緒にいるくせに」

園子は、怒り心頭だ。

「一緒にいすぎたんかもね？兄妹みたいなもんなのかも…」

「何いってんのよ！本当、服部くん自己中心的なんだから」

まあ、やっぱり悔しくないっていったら嘘になるけど、蘭ちゃんのせいじゃないし性格も良いしね。平次が好きでもおかしくないんじゃない？

「やつぱ、帰るわ。」立ち去りかけたとき、平次がドアから顔を出した。

「ほれ、誕生日プレゼントや。」

服部が、部屋から「彼」を引っ張り出した。

「新一！！」思わず声を上げるとビックリして飛び上がった。

「蘭？……ひさしぶり。」

「プレゼントってこのことだったの？」すこし赤くなっていた。

「何のことだよ、服部。」

新一が鋭くにらみつけた。

「別に、道ばたで拾ったから交番に届けただけやで。」

「だれが、迷子だよ!!」

（これがいやだったんだよ。こいつには怒鳴られるし、女子には賞賛されるし…こんな事する性格じゃあらへんのに。でも、こうでもせな、こいつがここにいるのは不自然やし）

逃げるようにして、廊下の方へいくと玲香とぶつかった。

「新一くん!! 私、覚えてる?」

「ああ。覚えてる……けど。サッカー部のマネージャーだっただろ?」

「今日は湖に行くんだよね! 世界でも有数の、きれいな湖だから楽しみなね。」

湖へ向かうまでの道のり、玲香は白馬の写真と新一を見比べていた。なんか違和感があるのよね。白馬くんとも話がかみ合わなかったし、なにか同じ人物じゃないみたいな……似てても、持つてる雰囲気为正反対なような感じ。

疑問に思った玲香は、白馬の部屋の電話番号をフロントで教えてもらい、「通話ボタン」を押した……

湖は、噂通り綺麗な場所だった。足までならつかれるということで、観光客もたくさん訪れている。

服部は、園子にこの湖のこともアンタが考えたの？や新一くん連れてくるなら教えてくれれば良かったのに、とさんざん質問攻めにあいへとへとだった。

新一は、中の魚を見る為に用意された、低い栈橋の上にいた。

「蘭、いっておいでよ。滅多に来ないんだから。」

「う、うん。」

蘭も、橋の上へ上がった。「この湖、本当に綺麗なんだな。野生のメダカが泳いでるぜ。」

「本当だ。でも、遊泳禁止だから、落ちないようにしてね。」

「わーってるよ。おめえこそ滑るから、落ちるなよ。」

ところが、そう言い終わるか言い終わらないうちに、遅れてきた玲香が走ってきた。

「新一くん！知らないと思うけど、泳ぐの禁止だから」

新一は、青ざめた。この短い距離であの足の速さ！それに、この橋……頭の回転の速い新一には次に起こることが予想出来た。

「それは、わかったから。今すぐ止まれ！」

案の定、彼女は新一にぶつかり……バッシャーン！

水面に大きな水しぶきがたった。

「あのなあ。ここは、遊泳禁止じゃなかったのか？」
不機嫌な声でつぶやいた。

「あはは、ごめんなさい……」

岸边では、お気の毒にと苦笑する平次と園子の顔があった。

ハックション！黒い制服姿の新一は、まだむすつとした顔をしていた。

なぜ、制服を着ているかというと、服部は新一が来る時点で、
「ハ」

事件が起こるゝと考えて、非常時用つまり葬式用の制服を持ってきたからだ。それで、着替えのない新一に選択の余地はなかった。まったく、物騒で失礼な話だぜ。

「大丈夫？ 水は綺麗なんだけど」

「大丈夫だけど、慰めになんねえな。」

「おれの制服、結構にあつとるやん。」服部も様子を見に来た。
「中学に戻ったみたいで落ちつかねーよ。こっちの制服青なんだから。」

「まあ、そう文句いうなや。それと彼女が話あるそうやで？」

「彼女って？」

服部が、何かを示すように目を動かした。目線をたどると玲香がこちらを伺っていた。

「なんでも、おまえにそっくりな青年がどーたらこーたらって言ってたで。」

怪盗キッドがまた変装してんのか？ 興味を持ったオレは、聞いてみることにした。

そのせいで、ある事件に巻き込まれるとも知らずに・・・

服部平次の贈り物（二日目）（後書き）

玲香の話とは・・・次では、玲香がとんでもないことを言い出します。

なんとコナンの正体が”

予告はここまでです！（何言いたいかバレバレですよ、汗）

投稿は、遅れるかもしれませんが。興味のある方は是非！

欺き

新一は制服に着替えて、部屋の外に出ると、玲香と話しに行った。玲香は、誰かの写真を、持っていた。ふと写真の人物が気になる。近づいてみるとハツとした表情をしてカバンの中に入れてしまった。しかもさつきから様子がおかしい。

彼女はさすがにそんな目をこちらに向けていた。

少し不信感を抱いたが、話の内容が気になって玲香が話し出すのを待った。

しかし、話の内容は意外な事だった。

「新一くんは白馬深って知ってる？」

「え？知ってるけど……今キッドの調査に来てる探偵のことだろ？」

白馬といえば、キッドを捕まえることに執念を燃やしている探偵だ。でも、話って俺に似た青年の事じゃなかったのか…

玲香は相変わらずそわそわしながら話を続けた。

「それで、さっきの写真は白馬くんの友達の写真で今預かってるのよ。だけど、彼はその人がキッドだと思ってるんだって」

「捕まえられないってことは見当がついてるのに証拠がつかめない

ってことか」

「その写真見てみる?」

そう言つて、またカバンから取り出た。その途端新一は、驚愕した。その写真はまさに自分の写真のように見えたからだ。このとき、彼は、一度しまった写真をわざわざまた取り出したことを疑問に思ふべきだったのだが……

「これって…まさか白馬が疑ってるのは…」しどろもどろに言つと、玲香が答えた。

「そう。新一くんよ。あなた、昨日のショーが終わった今日に来たわよね?それって、ショーの裏で何かをしていてそれで出てこられなかったんじゃないの?」

「んなわけねえだろ!だってオレは……」

そのころはまだコナンだったんだから」と言いかけて、口ごもった。

「オレは、何?劇を見てたの?」

「ああ、服部と一緒に…じゃなくて、一人で。」

その瞬間、玲香の目が意地悪そうに光った。

「前日に来てたなら一緒に見れば良かったじゃない。服部くんと見てたなら納得出来るわね？コナンくんとか……」

「そんなわけないだろ！オレはコナンじゃねえよ！」

「私はコナンくんとかとしか言っていないわ。でも、平次くんがコナンくんとトイレに入ってあなたと出てきたのを見たわ。その後いくら待ってもコナンくんは出てこなかったけど。やっぱり同一人物なの？」

嫌な予感が当たった事に気づいた。玲香は初めからこれが聞きたかったのだ。

「白馬くんはあなたには一度もあつたことないって言ってたわ。写真はあるとすり二つの別人、黒羽快斗の物だって。彼は、警察にも知り合いがいるから、後で指紋を調べてもいいけど……」

だんだん腹が立ってきた。やけに細かく知ってやがる、何が目的なんだ。新一は、にらみつけながら言った。

「おめえ、何者だ？目的は何だよ。」

やっと、目から試すような視線が消え、今度はとまどった表情を始めた。

「私は、本当はコナンくんの様子がおかしかったから見に行っただけなんだけど…本当だったんだ。じゃ、本当だったらして欲しいと思ったことがあるんだけど……」

「は？」

「私、この周りの建物を見て回ろうと思ってたんだけど、今日と明日だけつきあってよ。そしたら黙ってるから。」

「はあ。だまされたのか。」

新一は、呆然とした。女って怖えな…

部屋に戻ると、蘭が聞いた。

「何の話だった？かなり険悪な雰囲気だったよ。」

「…たいした話じゃねえよ。それより今日はどこに行くんだ？」

新一は、ごまかした。まさか、玲香に今日と明日一緒にこの辺りを見て回ろうと脅されてたなんて、とても言えない。

その日は、キッドが仕掛けをしていないか調べるために、舞台に行くことになった。

舞台には、まだ中森警部や、警備員、白馬がいた。

服部は、舞台の真ん中まで行き床のどぱった部分を蹴り上げた。

案の定、床にあった仕掛け扉が開き、大きな音を立てた。

「これが、この前のショーの種やな。」

蘭、園子、和葉ものぞき込む。確かに人が一人入れるだけの隙間がある。

「へー。ここから、出てきたんだ。」

「手品の種もしてしまえばたいしたことないのね。」

「でも、炎の中から怪我ひとつなく出てきたのは、手品師の腕前だったやろけどな。」

新一は、会話からはずれて、仕掛けから離れると、階段で舞台から降りた。

舞台は高いところにあって地面から三メートルくらい離れていた。ふと見ると、一番前の客席に手錠が置いてある。

だれか忘れていったのか？ まさかな。

拾おうとすると横からも手錠を取ろうと手を伸ばした者がいた。

「あ、快斗くん。どこに行ってたんですか。」

「白馬 深・・・？」

白馬深に出くわしてしまい、また先程の嫌な記憶がよみがえってきた。

「僕は、黒羽快斗じゃありませんよ。玲香ちゃんから聞きましたけど。」

少しムツとして答える。

「あ、もしかして彼女の言ってたそっくりさんですか？名探偵工藤新一ですよね。」

「そうです。それより、この手錠あなたのですか？今日と明日だけ借りてもかまいませんかよね。」

そう言うと、新一は、手錠を舞台の上まで持っていき、仕掛け扉に入る。

「何してんのよ。勝手にそんなことしていいの？」園子が、周りを見回しながら聞いた。警部は、ぜんぜんこつちを気にしてない。

「キッドが明日現れるとしたら十中八九舞台の上だ。なにか役に立つかもしれないだろ。」

ヒソヒソと言い返すと、中に引っかけた。服部が怪訝な表情をして、手錠を眺める。

「おまえ、手錠に細工したやろ。見とつたんやから。」

「ばれたか。でも簡単に逃げられたら困るだろ。」

外に出て、頭を上げると舞台のには大きな肖像画がかかっていた。「太った婦人」。そう書かれている。ハリーポッターに登場する、中に描かれた人間が動く肖像画だ。実は、この絵の防犯設備はとくに堅固で触ると絵がひっくり返って裏側の偽物と入れ替わる仕組みになっていた。絵に見入っていると、

「新一くん！例の予告状の宝石のところにいこー！」

という、大はしゃぎの声が耳に飛び込んできた。新一はその声をきいた瞬間、頭からつんのめりそうになった。チラッと蘭がこつちを見る。思わず目をそらして、返事をした。

「おう！もう少しこつちを見てからな！」

蘭が、そつばを向いて壁と向き合うような場所へ移動した。

悪いな、蘭……まだ正体を知られるわけには、いかねえんだ。
玲香は不満そうな表情をしたが、外で待つことにしたらしい。蘭に
声をかけようとして、立ち止まってしまった。泣いてる・・・？

「蘭、さっきのことなんだけど……」

「ほつといてよ。行ってくればいいじゃない！」

「泣いてんのか・・・？」

「誰も泣いてないわよ！私は園子と和葉ちゃんと買い物に行ってくるから。」

言葉を返すことが出来ずにいると、話しかけられる前にと、さつさと歩いていつてしまった。

服部も様子がおかしいと思ったらしいが、先に宝石のある場所へ行った。

蘭……また迷惑かけてしまったな

いつの間にか、警部や白馬もいなくなり、舞台には、新一しかいなかった。

いや、正確には新一とハカレヾしかいなかった。音もなく、階段を上がり、忍び足で近づく。何か考え事をしている様子の新一の背後に、ハカレヾは回り込んだ。そして、手に持っていた長い棒を振り上げる。背後で、ざわつと音がして、やっとなんか感づいたが、もう遅い。ハカレヾはそれを振り下ろした。バン！と、鈍い音がして新一は倒れた。

気絶した新一を動かしていると、遠くから名前を呼ぶ声がする。焦って、何かにぶつかつた。急に赤いランプが灯り辺りをほのかに照らした。犯人は、笑みを浮かべて先程蹴飛ばした物を見つめた。絶好の隠し場所を見つけたらしい。

舞台にはハカレヾの蔭だけが黒々とうごめいていた……

赤いブルーダイヤ

服部、少年探偵団の五人は、宝石保管室に来ていた。宝石の周辺2メートル以内に近づいた。サイレンが鳴って建物の鍵が全てかかってしまう仕組みになっていた。

壁際には二人の警備員が居て、一人は眼鏡で背が高く年齢は20位に見えた。

もう一人は、年齢は同じくらいで短髪の男の人で腰にはピストルを装備していた。

物騒な刑事やな。キッド見つけたら使うつもりなのか・・・しばらくすると、警備員の交代の時間がやってきて、一人が出て行った。

新一も、玲香もまだ来ない。おかしいな。アイツは、調べるだけ調べたんだからもう来るに違いないのに。まさか、なにかあったんじや……そんなことを考えていると、玲香が一人で走ってきた。事件が起こったと言いに来ない事を願って待った。

「新一お兄さんは、どうしたんですか？」

「大変なの！いなくなっちゃったのよ……入り口にいたから私の前を通らずに外に出られたわけないんだけど……」

不思議そうに首をかしげる。

「それって、まだ中にいるんとちゃうんか？」

「探したけど、いなかったわ！逃げたのかも……密室失踪事件……なんてね」

「あほ！そんなに事件ばかり起こってたまるかい！」

平次と探偵団はあきれたような顔をした。玲香は、ツンとした表情だったが、服部の背後を見て目を見開た。

まゆをひそめて後ろを振り返ると、宝石の台には怪盗キッドの帽子が斜めにかかっていた。

かなり不安定な位置だ。

ぐらつと傾いて…まずい！と平次が叫ぶ声がむなしく響く中、帽子はゆっくりと地面に落ちた。

ビーツと、音がなり、四方の扉がガン！と閉まる。

真っ赤な光が、半分の宝石に当たり、床を照らした。

部屋に残ったピストルの刑事が走り寄ってきた。外では、交代の人がドアを叩いていた。

「どうしたんだ！キッドが来たのか！？」

ピストルの刑事がドア越しに叫んだ。

「違う！ここにいる子が、間違えて入っただけだよ。警報を止めてくれないか。」

「おい！俺らはなにもしてない。見てたやろ？キッドの帽子は……」

服部はここまでしゃべって、急に口をつぐんだ。刑事がゆっくりとシルクハットを拾い上げ、台から宝石を取り上げたからだ。よくよくピストルを見てみると、拳銃ではない。いったい……
全員の視線が集まり彼が、静かにいった。

「何も見てません。って僕が証言したら？」

「は？なにをふざけてるんや？」

「明日、夜7時君達とまた会えるのを楽しみにしていますよ。」

ドアが開き、中森警部がかけてくる。外の騒々しさからは、周りには相当人が集まっていると予想出来る。

「君達！線が見えないのか。勝手に、入ったらダメだって書いてあるだろう！」

「オレらじゃない。その警備員が変装して……」

「警備員？あつ、だれも、いないじゃないか！何をやっとなるんだ、わしの部下は」

周囲の野次馬に紛れ込んでまんまと逃げてしまったらしい……平次は、拳を握りしめた。もう逃げてしまったんだし、冷静に話を話すと警部は大あわてで、キッドを捜させた。
が、見つけた物は、床に落ちていたバラとわかりやすく簡潔に書かれた犯行時刻のみだった。

「えー！じゃあ、宝石盗まれてしまったん！？何しとんの平次ー！」

「おれは、他のこと考えてて忙しかったんや！何も知らんくせして、文句言うなや！」

「他の事ってなんやの。」

「工藤がいなくなってもたんや…」

さつきまで、上の空だった蘭が、顔を上げた。園子も、怪訝な表情をする。

「また、何かの事件じゃないの？抜け駆け得意だし。」

「それだったらわざわざ舞台からこっそり抜け出さなくても良いでしょ？きつと何かあったんだわ……わたし、もう一回もどってみる。」

一同は息を切らして、劇場に戻ると、舞台裏や小道具置き場、カーテンの裏まで探したがいなかった。

光彦は音響室に入ると扉を開けた。暗い部屋で、電気のスイッチを探していると何かを蹴ってしまった。まだどこかの機械が作動しているらしく耳障りなノイズが、どこからか聞こえてくる。

「電気のスイッチは…あった！」

電気はゆっくりとついて、足下を照らした。すると靴には、真っ赤な血が付いていたのだ…

「うわあああ！」

「どうしたの！光彦くん！」

蘭が走ってくる。光彦は、様々な機械の前に倒れている花瓶を指さしていた。

「これって……新一さんが事件に巻き込まれたって事なんじゃ…」

何度もつまずきながら、服部に状況を知らせに行った。かれはドアに突進するような勢いで入ってきた。そして、床の上をさっと一瞥して言った。

「ここに落ちてるの、オレの制服の第2ボタンや……でも、この血の量やったら気絶させられただけや！ここにいるはずやで！でも、あとで戻ってくるだろうから一刻も早くみつけな…」

しかし、言い終わるか言い終わらないかのうちに新一はやってきたのだ。

「おめえら、ここにいたのか。なんだよ、幽霊でも見たような顔をして。」

「探したのよ…行方不明で事件に巻き込まれたかと思った。」
蘭は、床にへたり込んでしまった。

「え、行方不明??」

「知らないんか?どうやって、出口にいる玲香に見つからずに外にでたんや!密室やったんやぞ!」

「密室?何のことかわからないけど、喉が渴いて飲み物買いに行つてただけだぜ?心配かけて悪かったな…おめえらも飲むか?」

そういつて、コーヒーの空き缶を振った。しかし、服部はまだ納得出来ないという表情だ。

「じゃ、この花瓶は何や!」

「それは……劇の小道具じゃないのか?聞かれてもしらねえよ。」

言い返そうとして、口を閉じた。これは、明らかに血なのだ。なぜ、いろいろな事件に関わってきた彼がそんなことをいうのか…反論より不信感の方が高まって黙り込んでしまった。

「新一お兄さんって探偵なんだよね?私達も、探偵団なんだよ?」

「そうなのか…無茶しないように気をつけろよ。」

「それより、ジューズおごってくれよ!探したんだぜ。」

「もう…元太くんは!」

新一は、しゃがみこんで財布の中身を調べている。すると、まだ恐

怖の収まらない光彦が、慌てて走ってきて転んでしまった。そして、財布をはたきおとした。

「ごめんなさい！」

「大丈夫か？」といって、引っぱりおこす。

「ええ、大丈夫です！」財布の中身をしまつのを手伝った。

「あ、あの……」

「それじゃ、オレは今からすることがあつから部屋に戻るな。」
出て行こうとすると玲香に呼び止められた。

「飲み物買いに行つてたのよね？宝石見にいこつて言ったのに聞いてなかったの？」

「ごめん、忘れてた。」

素っ気ない返事に違和感を感じた。そういえば、彼を見ていると何かを思い出しそうな気がする。数時間前の記憶を辿ってみる。

さつきとは何か違うのよね……

そうよ！制服！あの制服が微妙に違う…腕のボタンの校章とか。雰囲気もまるで正反対だし。あの写真の人に似てる。

どこが似てると言われると答えられないけど、きつとあの人だ。玲香は、怒ったふりをしてほっぺたをつねってみた。

「いててて！何するんだよ。」

新一は、痛がって離れた。あれ、変装じゃなかったの。そっか、似てるなら変装しなくて良いのね。これじゃ、確認出来ないわ。

そんな一見中の良さそうに見える二人を蘭は見ていた……

全員が出て行った後、玲香は音響室に残った。唯一作動している機械をみてる。

何の機械かは分からないが、普通は誰もいないのだから切っておくはずだ。

実は、人が隠れられそうな場所を思いついたのだ。舞台の出っ張りに足をかけると仕掛け扉を開けた。

ところが、中にはいなかった。そこには、手錠が引っかかっているのみ。

なんだ、違うのね。気にしすぎたのかしら

まだ赤く光っている扉の明かりの前を通って、外へ出て行った。

赤いブルーダイヤ（後書き）

とうとう第十話まで書けました！

光彦が言おうとしたことは何だったのか…
新一を襲ったのはだれか…

あとで、重要になってくることなので、良ければ予想してみてください
いい

本物はどこに (三日目)

朝、起きてきた新一は食堂で朝ご飯を食べながら言った。

「今日は、キッドが現れる日だよな、服部！あんなやつ、俺たちで十分捕まえられるぜ！！」

「…自信あるんやな。」

「あつたりめえだよ！それと今日は、また湖に行こうぜ。」
そういつて、服部の肩を叩いた。

「……なんか、今日テンション高くないか？それに、あの湖には二度と行きたくないって行つてたやろ。急にどうしたんや。」

気味が悪そうに、新一から離れる。湖に落とされたお陰で、連休を制服で過ごすことになって、むすつとして、二度と行かないっていつてたはず。

「気が変わったんだよ！そんな変な顔するなって。」

「ねえ、新一。お箸の持ち方違うよ…いつもそんな持ち方だっけ？」

さらに、蘭が指摘する。

「えっ？こう……だっけ？何でもいいんじゃないのか。」

「そんなわけありませんよー。」

テーブルマナーを教師の両親に教え込まれている光彦が抗議する。

「それに、いけないんだー。魚残して！食べないんだったら元太くんにあげてね！」

歩美も注意した。

「食べてもいいのか？でも、好き嫌いはいけないんだぜ？何で食べないんだよ。」

元太が嬉しそうに、近づいた。新一は、助かったという顔をした。

「いや、湖で魚と一緒に泳いだからそのトラウマ…かな？」

「えー！？」「えー！？」「えー！？お魚さんそんなにこわかったのー！」「三人が一斉に声を上げた。

「湖いくんと違たんかい。」

「っていうのは、冗談で…理由なんてどうでもいいだろ。」

「新一は、食べたのに。」

蘭は、ぼそっとつぶやいたが、その声は探偵団の笑い声に紛れて誰にも聞こえなかった。

実は、蘭はとつくに新一が本物でないことにくらい気づいていた。

ひとつには、音響室に落ちていたはずの第2ボタンが、制服にあること。

二つ目には、蘭が床にへたり込んだとき新一が心配もせずに、服部くんと話を続けたこと。

いくら、彼女じゃないとはいえ、幼なじみに心配をかけてたんだから近づいてきて声をかけるくらいはしても良いはずだ。

初めは、すごく寂しい思いをしたけど玲香ちゃんと話してるときの仕草や、話し方で気づいた。新一は、あんなに冷たい態度しないし、光彦くんがさらに話しかけようとしたのに無視する訳がない。

もしかして彼は偽物で、新一の事をそこまで心配する人と話して、正体を見破られるのを恐れたんじゃないかと。

「目の前にいる奴が本当に自分の知り合いか確かめるためには」

ええっと…たしか新一、前にこんな事いつてた…なんだっけ。

そうよ！思い出した！でも、あの時新一なんでこんな事いつたんだろ。

これじゃ、本物かどうかなんてわかんないよ。

小学二年の時だったわ。あの時の新一も様子がおかしかった。

「おい！蘭！もう、店出るっていつてんだろ。何ボーツとしてんだよ。オレは、ちょっと部屋に取りに行くもんあるから先に行つて

てくれ！」

蘭の前で新一が手を振っているのに気づくのに数秒かった。

「……うん。待って！ねえ、新一！ティッシュ持ってる？」

「持つてるぜ！ほら！返さなくても良いからな。」

「ありがとう。」

ティッシュからはかすかにバラの香りがしていた。「確かめるためには、持ち物から花の香りがしないかみてみる。そしたら…」

それから先を思い出す前に、蘭は席から勢いよく立ち上がり、廊下に出たがそこには誰もいなかった。

しまったな。…また、逃げられちゃった

蘭は、咄嗟にそう思った。後ろから、ドタドタと足音が聞こえる。

「蘭ちゃんどうしたん？上の空だと思ったたらいきなり走りだしたりして。新一くんならなんか用があるんやって。」

息を切らして蘭に追いついた和葉がいった。

「平次くん、和葉ちゃん！今すぐ新一を捜して！怪盗キッドよ！」

「え???何でわかったん!??」

「おれも、怪しいとおもったわ！行くで和葉！」

二人は、新一の部屋の方へ向かった。

ティッシュ――返さなくても良いからな。――返せないだろうから。さっき聞いたばかりの言葉が急に新しい意味を持つ事になってしまった。

「待つてよ！怪盗キッドが、新一の部屋に行くって言ったのはきつと何かから目をそらさせるためよ。」

「じゃ、どうすればいいんや！」

「まず、彼をよく知ってる人に電話してみるわ。昨日、劇場に行ったとき、白馬くんメールアドレスと電話番号教えてもらったの。どうやら、本当の新一をキッドかもって思ったみたいね。おかしい行動をしたらメールしてって。するつもりは、なかったんだけど…」

蘭は、くすつと笑って通話ボタンを押した。

「もしもし、白馬ですが。」

「毛利蘭です。怪盗キッドが新一に変装してたみたいで、今逃げちゃったんだけど……」

「本当ですか。追いかけるのは、難しいと思います。怪盗キッドの事ですから、追いかけてくことも計算済みでしょうから。そういえば、もう一人怪しいと思ってた黒羽快斗。退屈だからって帰っち

やったんですよ。僕は、工藤くんに変装したのが助手だと思いますからいったん帰って監視することにします。」

「ええ。そうですか。」

そういつて、電話を切った。

「えらい短い電話やなー。で、どうやった。」

「なにも、役に立ちそうなことはなかったわ。結論は、探すのは難しいでしょうだって。」

がっかりして、カバンに携帯をしまった。白馬探偵もキッドに操られているのね。帰ったら誰もいなくてテレビにはまさにここで、怪盗キッドが映ってる……っていうのが、キッド流のジョークなのかも。

「ごめんね。探すしかなさそう。」

キッド捜しは続行されたが成果を上げることが出来なかったのは言うまでもない。

予告時間まで、あと四時間。

本物はどこに (三日目) (後書き)

投稿遅れて済みません。テスト期間で宿題一杯だったんです(汗

新一の言葉の謎については、後で説明するつもりです！読んで頂いた方は引き続きヨロシクお願いします。

冷ややかな気配

蘭たちが去ったすぐ後、廊下に面した男子トイレから一人の男が出てきた。辺りには、誰もいないのに左右を確認した。

「ふう、やっとあきらめたか。でも、なんで工藤新一出てこないだろうな。一日部屋にも帰ってこなかったし。まあ、白馬の奴も上手くだまされてくれたみたいだし、何でもいいか」

トイレから出てきた黒羽快斗は、歩きながら電話をかけた。

「もしもし、寺井ちゃん、仕掛けの方は進んでるのか？名探偵の知り合い、だいぶ鋭くて名探偵の部屋には行かなかった見てえんだけど、大丈夫か？後、四時間しかねーけど。」

「もちろんでございます。十分もすれば仕上がりですから。警官の目をこまかすのに少々時間がかかりましたが……」

「そうか、よかったー。急だったから、間に合わないかと思った。実は、ここに来る前はそんな仕掛けするつもりなかったんだぜ。だけど、初日に面白いこと発見したから変更したんだ。悪いな。」

安心して、笑顔になる快斗。

「ぼっちゃま、それで気になることなんですが、この部屋、いくつか血痕が残ってるような…それと、あの「太ったレディ」の肖像家が盗まれそうになったみたいですよ。警察は知らない見たんですが、防犯ブザーが光ってました。」

「血痕って……オレが行ったときはそんなのなかったけど。本当に赤い絵の具とかじゃないのか？こっちも、気になることがあるんだけど…ともかく、もう二時間で最後のショーだからオレも準備するな。じゃ！」

電話を切って、劇場へ向かう。

なんか、変なんだよな。あの毛利っていう女の子、どうして分かったんだ…今日はものすごく、勘が良い気がする。

それに、音響室の血って本物なのか？

だったら、すぐくまずいことが起こってることになる。でも、あの部屋にいたなら寺井ちゃんに見えないわけない。脅迫状のこともあるし、目当ての物、本当に呪われてるんじゃないか？

結局快斗は、脅迫状には屈しなかった。そんなものを、送ってくるツてことは、何かあるに決まってる。おそらく犯人は、その宝石を安いうちに無理やり買い取るつもりだった。しかし、キッドが予告状を送ったことで宝石の値段は跳ね上がった。オレの正体をばらしたからと言って脅迫状の送り主に得はないし、証拠もない。快斗は買えない値段になったら、キッドが盗んだ物を取り上げた方が早いと思うようになるだろうとふんでいた。だから、計画通りにしても、正体をばらされたりはしないし、宝石を盗んだ後でわざわざもう一度登場して、証拠を見せるのだ。

ここにいる間に、こちらから正体を暴かなければ…

彼は、もう一度服の袖の、裏の隠しポケットにホーブダイヤモンドが入っているのを確認して、劇場の中に入った。

警官の前を通るとき警官の目が光ったが、やり過ごす。今日になるまで、何も情報をつかめず、ピリピリしている警官の目は、針のように尖っていて悪いことをしていなくても恐ろしい。

確かに防犯ブザーは光っていた。だが、劇の途中に鳴るといけないため、音は鳴らないらしい。

「寺井ちゃん！…忘れ物、見つかったか？」

「ええ、万事上手くいきました！今日のショーが終わったら帰るだけですよ。」

「サンキュー。」

外に出ようとすると、入れ替わりに反対の扉から子供が入ってきた。げっ！あの灰原っていう奴だ。子供のくせにかなりの切れ者なんだな。早く来て良かった。

今度こそ本物かもしれない…期待に胸をふくらませながら、外へ出

た。

そして哀は、劇場に入った。その途端、誰かに見られているような
気配を感じる。一つ、二つ…三人、くらい？ ほぼ二人は悪意のない
が分かるが、そのうち一人の視線には指すような物を感じる。組織
の人間．．．気配がした方を振り返ると、嫌な感じは消えた。

なんだったの．．．？

犯行時刻まで後、三時間三十分。

冷やかな気配（後書き）

次こそ、シヨーの内容にいけると思います！

I c a n ' t b e l i e v e i t !

解答遍

壁に並んだ、刑事、警官、宝石の懸賞金目当ての一般人の緊張はピ
ークに達していた。現在、六時五十六分。相変わらず進展はない。
こんな状況で普通の観客が来たがるわけがなく、せつかくのショ
ーなのに、見ているのはキッド目当ての者たちだけだ。劇団員もこ
んな雰囲気での上演はやりたくないだろう。少し同情しながら、席に
着く九人だった。

「で、最後のマジックはなんやの？」

「最後は、一日目と同じ炎の中からでてくるマジックよ。本当は、
空飛ぶ車、フォードアングリアのはずだったんだけど、白馬くんの
車と同じ車種で付き添いの運転手が間違えたの。」
蘭が、顔をしかめていった。

「え？」

「それに乗って帰っちゃったんだって。空飛ばないと良いけどね
笑」

くすくす笑い出す一同。

「その運転手あほっちゃうんか。普通間違えるか？」（平）

「珍しい型だし、ナンバープレートも付け替えられてたんだってさ。
キッド様もやるわねー。」（園）

「本当冗談きついですよー。まあ、お客さんもないことですし同

じでもいいと思ったんでしょね！」（光）

「でも、キットがどこから出てくるかは、想像ついてしまっね。」
（和）

笑ってる間に幕が開き、真ん中には前と同じように縦長の箱が置かれた。中に猫を入れ、内側から錠前の鍵をかけて閉める。アシスタントが箱に火を付けた。初日より勢いよく燃え上がった。

一分、二分…箱に変化は見られない。「おい…ちょっと出てくるの遅くないか？前はほんの数十秒でできたのに…」平次が、さすがに不安になったらしく隣の和葉にささやいた。

三分、三分十秒、箱が崩れそうになる。

二十秒……五十五秒。

そのころになってやっと箱がゆれ、中に人がいることが確認出来た。

平次の腕のデジタル時計がやっと七時を示した。7:00:00

ドアが、バーンと勢いよく開く。

怪盗キッドが出てきた…手に、例のダイヤモンドを持っている。

蘭は初めて見たが、そのダイヤは博物館に移されたときネックレスにされていて、半分ながらも見栄えが良くなるようにしてあった。それを腕に通して高く掲げていた。

「キッドを捕まえろー!」

中森警部の声が響いた。

ピュー

キッドが口笛を吹くと、フクロウが飛んできて、中森警部の頭すれすれに飛んできた。そして、飛んでいるうちに鳩に変わってキッドの肩に止まる。羽がそこら中に飛んだ。

「ご来場頂きありがとうございます。皆さんが、ご覧になっっている舞台の肖像画もあなた方に手を振っているように見えますね。」

そういうと、膝に手を置いていた婦人の手が上がり別の絵が見えた。魔法界の動く肖像画、太ったレディが本当に動いてしまった。まさか魔法? 誰もが、そう思った。

目撃した全員が啞然とする中、一番端に座っていた灰原だけは、壁にある防犯装置に気を取られていた。

この防犯ブザー光ってるわ…っていうことは、この絵は本物じゃなくて、偽物のほうね。昨日ここに来たとき唯一作動していた装置が

防犯用のだったら納得出来るわ。24時間作動してなければいけない装置と言えば防犯装置だけだものね。

工藤くん、ずっとここにいたの？

灰原は、わずかに血痕のついた警備解除のボタンを押した。

すると、急に「太ったレディ」の肖像画が裏返し、裏から本物の絵と一緒に本物の新一が現れたのだ。

「新一！」

蘭が、口を押さえて立ち上がった。頭には打撲の跡があり、顔にも少しづついている。

キッドが慌てて、その場から飛び退いて、白い衣装を守った。珍しいものでも見るように新一をまじまじと見つめる。

「おまえ、何やってんだよ……えっと、頭どうしたんですか。殴られたみたいに見えますけど。」

思わず、素が出てため口になってしまったが、気を取り直した。

「……いつてー、一生出られないかと思っただぜ。あつ、キッド、おまえこそ何やってんだ。」

先程まで、暗闇の中にいた彼は、周りのことなどお構いなしで、舞台の明るさに目を細めながら言った。

「なにやってんだって……見ての通り。普通に聞かないで下さいよ。」

寝ぼけてんじゃねーよとばかりに、視線で舞台を示す。

改めて、辺りを見回した新一は、やっと状況を理解し、顔の血に気づいて、ぬぐった。いつのまに、こんなところにいたのかと不思議そうに首をかしげていた。突然ふつと笑って顔を上げた。

そして、目を見開くと、キッドの後ろを指さす。

「アイツがオレを殴った犯人だ！」

当然キッドだけでなく会場の全員の注目が舞台袖に集まった。しかし、それはそんなことを見越した新一の罠だったのだ……

「！？ だれも、いませんけど……」

疑わしそくに、前に向き直るのとカチツと軽い音が鳴るのはほぼ同時。

後ろを向いた隙に、仕掛け扉を開け、手錠を取りだした新一は、キッドの腕に手錠をかけた。警官に、追いかけられたことが何度もある彼でも、ここまで追い詰められたのは初めてだった。……迂闊だった……

ヤツは、手錠の金属の、鎖の部分を持って勝ち誇ったような顔で言った。

「やっと決着がついたな、怪盗キッド……！」

高らかに中森警部が叫ぶ。

「怪盗キッドが焦ってミスしたぞ！快斗のお陰でわれわれの計画通りだ。捕まえろ！」

（いや、違うんですけど・・・）

キッドは手にもっていた鍵を取ろうとした。新一がそれを察知して腕をひいたときに鍵が、手を離れ、3？下の舞台の下に落ちてしまった。これで、鍵をはずすこともできない。本格的にやべえ…

しかし、運は怪盗キッドの方に味方…した。

落ちた鍵を取ろうとして新一の手が下に下がり、キッドの腕は鍵を取り損ねて、その代わりにもう片方の

手錠の端に当たった。

新一が手錠の鎖ではなくあらかじめ手錠の端を持っていればよかったが…予測出来るはずがなかった。

カチャリ、と今度は嫌な音がして、もう片方が新一の腕にはまってしまった。

キッドの手にかけていた宝石のネックレスが滑り落ち、快斗と新一のうでの間―手錠の鎖に引っかけて止まった。

呪いの宝石が、行方不明の名探偵、予告状をだす大怪盗というありえない組み合わせをつなぎ止めているようだった。

その瞬間、辺りは静まりかえり、警部すら足を止めるほどだった。

「…これでも状況は変わんねー。逃げらんねーよ。」

「…それは、どうかな。」

お互いに引きつった笑いを浮かべながら、まだ強がっている。

キッドは、発煙銃を取り出すと、新一に向かって発砲した。例の煙の中で咳き込んでいる間に、肖像画の裏の小部屋に引っ張り込まれた。そこには窓が……

舞台上が上がってきた警部と平次は嫌な予感に襲われた。キッドが、もつとも得意とする逃走計画だ。しかも、この距離から駆けつけても手遅れなのは目に見えてる。

煙が晴れた後、新一が目を開けるとキッドが窓に足をかけている。

「離せよ！ハンドグライダーに二人乗りなんてできるわけないだろ！落ちるに決まってる！」

抵抗する新一。

「離せないから言ってるんだろ。僕だって、連れて行きたくない。それに、落ちないと思うぜ……占い師の友達に警告されたからな。まさか当たるとは思わなかったけどさ。」

焦って、駆けつけてくる最中の平次に向き直って、最後に言い捨てる。

「親愛なる観客の皆さん、今回は、赤いブルーダイヤモンド―ホーブダイヤモンドと、青い目の……真っ赤な探偵を頂いていきます。ご機嫌麗しゅう。」

「まてや！キッド！」

とうとう飛び降りた。平次が、窓に着く頃には二人はだいぶ離れてしまっていて、遠くの空に、真っ白なハンドグライダーだけが異様に明るく光っていた。

I c a n ' t b e l i e v e i t ! 解答遍（後書き）

題名の解答遍というのは、新一がどこにいたかの解答です。

私も、書きながらドキドキしてました。充分表現出来ると良いのですが…

また、感想の方もお願いします！

……**衝撃**

キッドと新一の二人がいなくなり、辺りは閑散としていた。数秒の沈黙の後、中森警部が悪態について悔しがった。服部は、まだ窓から遠くを眺めていて、まだ信じられないようだった。和葉も、舞台上がり、平次を窓から引き離れた。

「平次：平次！ちよつと、ボーツとせんといて！」
平次の前で手を振る。

「…本当に行つてもたな。怪盗キッドの奴、工藤をどうするつもりなんやろ…工藤のことやから、キッドの正体わかってしまうやろ？そのとき、なにか事件に巻き込まれなええけど。」

下を向いて、考え込む平次。

「それどういう事なん??」
和葉が、思わず大きな声を出す。

「いや、キッドに限ってあらへんとおもうけど…口封じのために、とか。」

口ごもりながらいった。探偵の勘で、何かの事件の巻き込まれる気がしたのだ。

「まさか…キッドが危害を加えるわけないって。」
無理に笑顔を作ると、舞台の下へ連れ戻した。

下では、足がすくんで動けなかった蘭が、しゃがんで下に落ちた小さな鍵を見つけたところだった。

「これがないと新一はキッドから離れられない…何とかして渡さないで。」

そのとき、ふと寒気がして後ろを向くと、玲香がこっちを見つめていた。

「今、私も拾おうと思ったんだけど、あなた彼がいる場所分かってるの？」

不敵な笑みを浮かべて言う。

蘭は、唇をかみしめた。もっと、探しておけばこんな事にはならなかったのに―うつむきながら言葉を返した。

「そんなのわかんないよ…キッドが連れてっちゃったんだし。玲香ちゃんは何？」

「私は、彼女がいるから見つけられる可能性は高いわよ？ちよっと貸してよ」

そして、鍵を奪い取った。空手の実力も体力もこっちの方が上なのだが、そんな風に奪い返すことを新一が望むわけがない。蘭は、握りしめた拳をゆっくりと開いて、平静を保って言った。

「彼女って誰よ」

玲香は、灰原の手をひいていた。しかし彼女は、子供扱いされて嫌だったらしく手を振り払った。

玲香が言うには、光彦が偽新一の財布をはたき落としたとき、自分の探偵バッチも床に落としてしまったらしい。お金を戻すのを手伝っていたら、間違えてバッチまで入れてしまった。そのことを言うおとうすると、新一の知り合いと話したくなかったキッドは、部屋に戻ってしまう。だから、ある程度近づけば、哀のもつてたコナンくんのスピアの眼鏡で追跡出来る。まるで、眼鏡が自分の物みたいな言い方だった。

「でも、みんなで探せばいいんじゃないの？私は、渡したくないわねえ？」

灰原が、冷めた声で言う。玲香は、不満そうだったがふくれて去っていった。

「ごめんなさい、蘭さん。私達の話聞いてたみたいなのよ。嫌な人ね。鍵、持って行かれたら元も子もないわ」

小さくため息をつくとき、こっちに向かってきた和葉と平次の方を見た。

「服部さん、怪盗キッドの居場所検討つくかしら？」

「さっぱりやで。工藤は携帯電話持つてるけど、すぐ隣にキッドが

いるのに連絡してこられへんやろ。眼鏡があっても世界中のどこにいても分かるわけやないし…」

肩を落としていった。探偵団も、話を終えて合流してきた。

「じゃあ、キッドのマジックの種をわかった？何か、ヒントがあるかもしれないよ！」

「フクロウが、鳩に変わるのは分かった。飛ぶときにたくさん羽が落ちてきたから、鳩に余分に羽根を付けてただけだ。でも、絵の方は…あの絵の裏の小部屋から何か仕掛けたんだったら、工藤に気づいたはずやからな。」

「新一お兄さんは透明人間だったんだよ！コナンみたいに抜け駆け得意なんだろ？」

「もう…そんなわけないでしょ、元太くん！新一お兄さんは、きっと一回移動させられたんだよ！」

歩美が、諭すように言う。

「それやったら、犯人を特定するのは難しいな…」

みんな、黙り込んでしまった。長い間沈黙が続いてから、灰原が口を開いた。

「警備員…警備員に変装してたんじゃないかしら。」

それを聞いて、一同は思わず納得して口々に哀をほめた。確かに、たくさんの警備員がいる中で、一人くらい余分に見張っててもだれも気にしない。絵は、緞帳のお陰で他の警備員からは見えない。初めに絵の周りをウロウロしているはずのキッドの助手を特定しておけば、入ってきても分かるのだ。それとも初めから知っていたのか…舞台はマジックの仕掛けをするのもってこいの場所だ。まず新一を小部屋の出口の近くに座らせて、助手が入ってきたらさりげなく警備からはずれる。助手と入れ替わりに新一が出てくれば、あとは他の場所に移すだけ…

「そして、いなくなつた後に戻したって訳か。工藤が見つかったから危険やで、あの二人。」

話が、ますます悪い方向に進んでしまい、会場の雰囲気も最悪だった。

「打倒キッドだー！絶対ゆるさーん！分かったな！」

「はい！」

中森警部の怒声が響いてなおさら騒々しい会場だった。

……**衝撃（後書き）**

遅くなつてすみません！勉強とがあるので投稿遅れるかもしれないが、よろしくお願いします。今日は説明ばかりになつてしまいました……それにしても、玲香恐ろしいです。次は、怪盗と探偵の登場です！

手錠にかけられた二人

とんだ運命の巡り合わせで、目当ての宝石とともに手錠につながれてしまった新一と怪盗キッド。そして、いまやつとある建物に到着した。地面に足がつけられて嬉しそうにする新一と、へとへとになった快斗はその場に座り込んだ。がらんとした誰もいない屋上だった。

「おーい！ここ、どこだよ。」

「…オレン家の隣のマンション。いつも、仕事が終わったらここから家に入るんだよ。人氣が少ないから！」

半分やけくそになって叫び返す。新一も意外そうな顔をする。

「へー。どこへ行くかと思えば、自分の家に連れて行くのか？この状態で。自由になったらオレが通報するかもしれねえぞ？」

「住所はノーコメント。飛んできたからわかんねえよ。オレの母さんは、毎日が休暇だから、今日はワシントンDCにいるから問題ない。それから、携帯は没収な。」

ムツとしながらも仕方なく携帯を預ける。まあ、予想はしていたが…二人は、マンションから隣の民家に飛び移り、屋根に着地した。家の瓦を一つ取ると、その下の扉の鍵を開けて部屋に入った。

「屋根裏もあるのか。」辺りをきよろきよろ見回して言う。

「そりゃあ、代々怪盗キッドを受け継いでるんだから外から入れないはずいだろ。地下室もある。といっても、まだオレで二代目だけ。」

廊下に出て、階段を下りると快斗の部屋だ。

「……ここがオレの部屋。あんまりいじるなよ！」そういつて、教科書など名前や身元が分かってしまうものを素早くしまった。

「で、史上初怪盗キツドの部屋に入った探偵として、なにか感想は？」

おどけて聞くと、正直に答えた。

「あまりキレイとはいえないな。制服はちゃんとかけて置くもんだぜ？あ、えつと出身高校は……」

「だ・か・ら、うるうるするな！当たり前だろ、普通の部屋じゃないんだから。いろんな仕掛けをカムフラージュするために……」

「嘘つけ。」

鋭くつつこむと、快斗は肩をすくめた。こんな風になるとは予測しなかったのだろう。

「まったく、これだから嫌だよ探偵は。夢がねえな。でも、仕掛けがあるのは本当だ。たまに嫌な奴がくるんだよ。万が一はいって来たときのために。まあ、そういうときはたいてい居留守を使うんだけどな。」

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「どなたですか？」

キッドが出迎えようとする、新一も行かなければならず、強引について行かされた。ドアののぞき穴から見ると、白馬深が戸口に立っていた。

― 出た！嫌な奴。でも、もう返事しちまったし…

快斗は音を立てないようにこっそりと鍵を開けると、さっと部屋に戻った。

「いいか？物音たてたらコナンのことばらすからな？」

「またコナンのことで脅されんのかよ…いや、なんでもない」

― 瞬玲香のことを思い出してげんなりしながら従う。

「で、どんな仕掛けを使うんだ？」

「それは、見てからのお楽しみ」

ウィンクすると次の指示をした。

ところで、快斗の部屋は地下室に通じている。実は、部屋の隅の床板から出入り出来る。そこに新一だけを隠れさせて自分は隅に座った。

「鍵は開いてるから勝手に入ってくれ！いま、部屋だから！」

まだ、玄関に待機している白馬に呼びかけた。

「だけど白馬、せっかく来てくれたところ悪いんだけど、今マジックの研究してるから忙しいんだ。用が終わったらすぐ帰ってくれ。」

素っ気なく対応すると白馬の追求が始まった。

「ちょっと聞きたいことがあるだけです。今日の朝、家に帰るって言ってたのは嘘ですね？」

「よ、寄り道して帰っただけだよ！何度も言うけどオレはキッドじゃないって！」

「どうだか」地下室から快斗にしか聞こえないくらいの音量の音が聞こえた。快斗は、床をべしつと叩く。

「どうしました？その腕の鎖、なんですか」白馬が部屋に一步踏み入れる。

その途端、炎が床から吹き出た。その壁と天井だけ防火対策が施されているため、火事にはならなかった。

「ああー！危ない！マジックの実験中っていったろ。」

「なんの、実験って言いました！?!？」

一言一言に怒りを込めて、言い捨てた。

「花火の炎がどこまで大きくなるか…の実験？ほら、ショーでもマジシャンが登場するときによくあるだろ。横から火花が散るのが…」

「今のは、火花じゃなくて、炎でしたよね？」さらに、詰め寄ろうとする。

「それ以上近づかない方がいいって。そこにも、ここにも落とし穴があるから」

「そんな馬鹿な・・・」

「警告したからな！」

そういつて、壁にもたれて白馬を眺めた。

「……やっぱ、帰りますよ」

「氣を使われて悪いな」

快斗がニコニコしながら手を振ると、白馬は捨てぜりふを吐いて出て行った。

「いえ、楽しかったです「人」の家でこんなもてなしを受けたのは初めてです。「人」それぞれって奴ですね」

ドアがぱたんと閉まる。新一に出て行ったことを伝えて、引っぱり上げた。

「腹立つな！。オレが人じゃないみたいない言い方じゃがって」

「特殊には変わりないだろ。来客を炎で撃退する「人」なんて聞いたことないからな。まさか、落とし穴もあるのか？」

足下に氣を付けながら、外に出ると床を凝視した。

「はは、そんなんあるわけねえよ！父さんが父さんだから知らないところに一つはあってもおかしくないけど。でも、入ってくる氣はなくすだろ？」

「……どんな父親なんだよ……」

そう思っていると、また誰かが入ってきた。

「快斗ぼっちゃま！ご無事でしたか。警察に捕まったりしたら、統

「様になんてお詫びすればよいのか…」

「寺井ちゃん！名前で呼ばないでくれよ！」

「へー。なるほど、玲香のいつてた黒羽快斗か！ぼっちゃまって呼ばれてんのか？」

なんで知ってるんだ…快斗は深々とため息をついた。

「申し訳ございません…あなたが工藤新一様ですね。いま夕食を用意致しますので。それと…」

寺井は、快斗に近寄って何かささやいた。快斗が大きく目を見開く。

「何、話てんだよ」

「それは、また企業秘密だ」

快斗は何も教えてくれなかった。その日新一は、久しぶりに寺井の持ってきた夕食を食べた。ただ手錠があるので、上着を脱ぐと鎖の部分にひっかかってしまう。着替えることができないため、制服のまま過ごすことになった。制服に飛んだ血だけ拭き取って、頭の手当をした。快斗もキッドの衣装のまmainなければならず、白いマントとハンドグライダーだけ外した。

「頭の傷、誰かにやられたのか？」

「ああ、舞台に立ってたら突然殴られた」

快斗はしばらく考え込んだ。

「もしかして、オレと間違えたのかも…」

「え？」

「狙われたのはおめえじゃないかもしれねえ…よくおまえに変装す

るから」

神妙に話す快斗。

「狙われる心当たりでもあんのか？」

「ああ…」

数秒の沈黙があった。

「なあ、快斗。さっきからずっと思ってるんだけどオレの変装するの止めてくれよ！向かい合って食べてると気味が悪いんだよ！」

「それは無理。正体がばれるから。」

新一は快斗を睨む。

「そう怒るなよ！。当分離れないんだから仲良くしよっぜ。」

そういつて、手の中から一輪のバラを出した。新一は、チラッとそつちを見て受け取ると、一瞬で見破ったらしくマジックで元通り消してしまう。

「来たくて来たわけじゃねーよ。泥棒と仲良くできるか！」

そして、そつぽを向いて食べ始めた。なんだか、前にも同じ事があった気がする。

小さい頃にあったことがあるような…でも似てるから鏡の中で見ただけかもしれない。

疲れていたせいか、壁にもたれてしていると眠り込んでしまった。

だが、災難はこの日で終わったのではなかった…

手錠にかけられた二人（後書き）

ご都合主義万歳って感じですね（笑）テレビでマジック快斗の一話を見ただけでよく分からないのですが、原作と違うところがあったらすみません。怪盗の部屋を想像して書きました。まだまだ続きます

紙一重

「名探偵、眠ったみたいだな。」

新一の顔をのぞき込み、本当に寝たのか確認してから言う。急に脳天気な笑顔が消える。実は、少し作り笑いをしていたのだ。

この勘の鋭い名探偵に、明日の計画についてなにも悟られないように。いつもなら、無事に何事もなく帰ってこられた。今回は違う。紅子の言うとおりに、最大の敵を家に連れてきてしまうという悲惨な状況だ。二人乗れる位大きな羽の、ハンドグライダーを用意してなかったらどうなっていたか…考えるだけで頭が痛い。寺井も同じ事を考えているらしく、じっと黙り込んでいた。

「今日は、大変な一日でしたね。」

寺井が、ポツリとつぶやく。寺井も突然の指示があったため忙しかった。

肖像画の偽の絵の上にそっくりな絵を描いた薄い透明の覆いを二枚してくれ、と言われたのだ。

会場のマジックでは、動くはずのない絵が動いたため、観客は全体が動いたような錯覚に陥ったが、実際に動いたのは腕だけだった。

肖像画の背景は、黒のビニールの後ろに黒の画用紙を貼れば、遠くからは気づかないし、透明の覆いの表面も光りにくくなる。

一枚目には、絵と同じ手を膝に置いたもの、二枚目には手を挙げた物を書いて貼る。

糸を付けて、手を動かすときにゆっくり取っていけば、動いたように見えるし、薄いため証拠も簡単に回収出来るというわけだ。

快斗が唐突に話しかけた。

「寺井ちゃん、炎のマジック、見てただろ？」

「ええ。見てましたよ。」

何を言い出すのかと考えながら相づちを打つ。思い詰めたように話す。

「あの箱が運ばれて来たの何時か覚えてるか？」

「…七時位じゃなかったでしょうか。」

「六時五十六分だよ。だけど、俺は劇団員に変装して六時五十八分にしてってくれて頼んだんだ。劇が始まるのは本当は七時からで、その時間ぴったりに出てきたい。炎のマジックは危険だから一分でも早いと危険だからって念を押した」

不可解な表情をして、答える。

「ちょっとした手違いじゃないんですか。」

「それだけじゃない。箱から、油のにおいがした。どおりで炎の勢いが激しいと思ったよ。内側から錠をかけるなんて、打ち合わせでは言われてなかった。」

「まさか……」寺井が恐怖の入り混じった表情をした。

「ああ。先に錠を外しておくのは簡単だった。だけど、俺は予告状の時間は守る主義だから、ひとまず下の隠し扉に隠れて余った二分を過ごしたんだ。それがあつたから良かったけど…なかったら死んでたかもしれない」

もしかして、父さんが殺されたのと同じ方法で命を狙われていたのかもしれない…快斗にとって、燃える箱に閉じこめられたことよりも、そのことの方が切実な問題だった。

しかも、前日に劇場にいた警備員、その前日に宝石を守っていた眼鏡の警備員から殺気のような物を感じた。見張られてた様な気がする。

「これ以上事件に関わるのは危険なのでは…」

「いや、俺は犯人を突き止めてみせる」

宝石を目の高さに持ち上げてみる。目的の宝石であることは間違いないけど、何がわかるっていうんだ。相変わらず不気味に光ってるだけじゃないか。

「盗一様は…やけどを負って病院に運ばれるまでの間、何度も何度も例の宝石の色、危険だと呟いておりました。」

そんなこと初めて聞いた。宝石の色…？青か…それとも赤い燐光か？混ぜ合わせて紫ってことはないよな？

考えるのを止めて、真剣に寺井に頼んだ。

「犯人は絶対この宝石を奪いに来る。それには鍵がある。舞台の下に落ちた後、誰が取ったかは知らねえが、俺たちよりも先にそっちの方が危険だ。寺井ちゃん、調べて取り返してくれないか。こっちは、明日することがあるんだ」

「わかっております。お気を付けて、罠にかけられないようにして下さいね。」

「ああ、新一には気づかれてないよな。この状態でいる限りこいつも連れて行かなきゃなんないんだから……」

数分後、快斗と寺井も眠りに落ちて、寒気がするような一日に終止符が打たれた。

見せかけのマジック

朝早く、誰もいない家を出発した。今は、バスの中だ。時間は早い
ため、車内はがらんとして空いていた。

立って、つり革につかまながら時計を見た。六時三十分。

寺井は、二人が起きる前にどこかに行ってしまったらしく、どこを
探してもいなかった。向かう先はハイドパート。そう、例の宝石
のもう片方が置いてある宝石店だ。

ここまで読めば何がしたいのか分かってもらえると思う……盗みに
行くのだ。この隣の、盗みなんてはたらいたことない――むしろ捕ま
える方の、名探偵を連れて。

寺井がこつそり二階にあると教えてくれた。それを言えば、コイツ
は反対するに決まってる。

これからの計画を暗示するようなことを言わないよう、言動に気を
使う必要があった。

「用事があるって行っただけど、どこに行くつもりなんだ？」

新一がいい加減教えてくれと、肩を肘でつつく。ちよつと考えてか
ら、こつ答えた。

「寺井ちゃんが、朝ご飯買ってくるの忘れてどこかいったから、買
いに行くんだよ。これ以上寺井ちゃんに用を頼むのは、大変だろう
し。」

「買いに行くって言うても……会計とかどうするんだよ。代金払わ
ないといけないだろ。手錠も目立つんじゃないか？それに……他に
もいろいろと問題があると思うけど」

新一と目が合うと、前の女の子が、クスクス笑い始めた。隣の母親もつられるように、笑った。きつと、新一がおかしい訳じゃない。問題は、快斗だ。昨日は着替えられなかったため、マントを取っただけの真っ白な服のままだった。

漫才のコンビみたいだ……隣にいる新一も恥ずかしくなってうつむく。

ところで、なぜ席が空いているのにつり革につかまって立っているのか。実は手錠をごまかすためだ。外出する時に、まず人の目をひくのは、白黒の制服みたいな格好、手錠、そしてそつくりな顔だ。周りから見たら変わった双子の漫才コンビ……この「変わった」だけでも、なくそうして考えたのが、この作戦。

まず手錠のわつかの部分だけは、袖の下に隠す。

新一が天井に腕をつき上の金具に捕まるふりをする。快斗が、つり革、ではなく手錠の鎖の部分にそれにそつくりの輪を、横からはめたものをつかんでいるのだ。つまり、新一が上から鎖を金具に押さえつけ、わつかの部分を快斗が固定している。ただ、つり革の役目をはたしてないので、新一は右へ左へ引つ張られ大変だった。一つだけ革ではなく鎖なものもおかしく見えるが、乗客も少ないし誰もつり革をじつと見たりしないから、辛うじてごまかせている感じた。

やっと、アナウンスから「次はハイドパート前です。」という声が流れてきて、バスが停車した。バスから降りて、二人は大きく息をはいた。

「どうするんだよ！バスの中でもこれなんだから、デパートに入ったらどうなるか」

「……名探偵、笑われる覚悟は出来てるだろうな？」

「は……?」

嫌な予感。絶対コイツ何かたくらんでる。

「この手錠をして堂々と歩いてもなにも不思議に見えない方法、考えついたんだよ」

にやつと笑う。ああ、帰りたい……買い物行くなんて話を鵜呑みにした俺が馬鹿だった。

少しならず後悔したが、デパートに入った。掲示板の後ろに隠れると、突然快斗が大声を上げた。

「こんな時間から買い物に来て頂いた皆さん！今日は十周年ということで、この時間だけマジックショーを企画させて頂きました。良ければ見ていつて下さい。」

突然のことに焦る新一……笑われる覚悟つてまさか……

「おい、聞いてねえぞ！マジックなんて出来ないからな！」小さな声で抗議したが、快斗はそんなこと気にもしなかった。掲示板に隠れているので、買い物客は辺りをきよるきよる見回したが誰も見えない。再び声だけが聞こえる。

「僕たち二人の腕にはなにも異常がないことを確認して下さい。……腕に布をかぶせてカウントします。十、九、八、七」

一人で話し続けている。快斗は、腹話術に長けていた。声は掲示板からではなく、反対側からしているように聞こえる。「だから、何やッてんだよ。」

唇に人差し指を当てて黙らせた。

赤い布を手錠のかかった腕にかけ、全員が後ろを向いたとき、さつと前に進み出た。

「三、二、一、」突然こちらから声が聞こえ、全員向き直った。快斗が赤い布を取ると当然、手錠をかけられた腕が見えた。一瞬不意をつかれた顔をしたが、とりあえず拍手が聞こえた。怪しそうに目を細める物もいる。

「マジックになってねえよ。」ぼそつと呟いた。
「いいんだよ。マジックがしたいわけじゃないんだから。手錠をしてることを印象づけるため……俺に合わせるよ。」

態勢を立て直し、大声で言った。

「あ、手錠を外す鍵忘れた！おまえもってるか？」

「えー。大変なんだなー。もってないけど……」
呆れて、他人事のように答える。これには、疑わしそうにしていた人も吹き出してしまった。マジックの内容より、手錠のことに注意が向いてどうでも良くなってしまったらしい。

「仕方ないから、買い物だけして帰ろうか。」そういうと、何事もなかったように店内を回り出す。噂はすぐに広まっていく……ため息がもれた。本当に、おかしい双子のマジシャンになってしまった。これを本当の「笑われ者」っていうんじゃないのか。

「食品売り場は……二階だな。早く行こうぜ」

あれ、一階だったような気がするけど。注意する気力もなかった新
一は引っ張られるがままについていった。

見せかけのマジック（後書き）

快斗のキャラが……三枚目になってしまいました。これ以外に思い
つかなかったです、すみません。続きも読んで頂けると、嬉しいで
す。

マスメディア

エスカレータにのって、二階へ向かった。新一は、一切まだこちらを見ようとしなかった。この日、この探偵は一度不機嫌になったら、なかなか元に戻らないということがわかった。

「よく、堂々と顔を上げていられるな。神出鬼没の大怪盗っていわゆるくらいだから、なにか画期的なマジックを用意してるのかと思っただのに」

「まあ、そう怒るなよ。これで、手錠してても周りにおかしな目で見られることもないんだし」

「おかしな目で見られてるよ！！マジックで手錠を使ったのに、鍵を持ってこなかったドジなマジシャンになってるだろ！」

新一が、怒鳴る。痛いところをつかれた。

「怪盗だったら、ピッキングとか出来るんじゃないのか。」

探偵には、似合わないことを聞いてくるので、よっぽど嫌なんだろうなと思った。

「そんなの昨日さんざん試したよ。でも、この鍵、細工されてて全然開かない」

「あっ！」新一が声を上げた。

「……まさか細工したのって」新一が、後悔したような表情で無言で頷く。

「もしかして、手錠が簡単にかかりやすくするようにしたのも？」

「ああ。」

「ずっとおかしいと思ってたんだよ！なんで、手が当たっただけで手錠が簡単にはまるのか。強く押したわけでもないのに手錠の方が滑っていったら」

「……油を差したんだよ。マジックの小道具の横に置いてあったから」

こんな事にならなければ細工しておいて正解だったのに。皮肉なことになるってしまった。

エスカレータから降りて、右に曲がる。

二階の宝石店まであと少しいうところまで来た。

ところが快斗はここで肝心なことを思い出した。

いつもなら絶対に忘れないもの……予告状を出してない。予告状を出さない怪盗なんて、その辺の泥棒と一緒に。絶対に、突然現れて盗むなんていう、強盗みたいな真似はしたくなかった。

快斗は、トイレに行くと言って、新一を個室の外で待たせ、その間に無地で大きめのメモ用紙にボールペンで書くことにした。いつものと比べるとお粗末だが、しょうがない。

これで、怪盗に扮して盗みをはたらかなくても良くなるかもしれないのだし。

ペンをしまつて、ポケットに予告状を滑り込ませると、外に出た。周りからは新一の言うとおり、確かに、おかしい目で見られている様だった。

噂は、広まっっていて人とすれ違うたびに忍び笑いが聞こえる。……もう少しの辛抱だ……といいけど。

宝石店の隣を通ると、もう片方の宝石はやっぱり目立つところにあった。

真横に来たときに、こっそりと予告状をとばして、ガラスケースに置いた。

犯行時刻は一時間後。こんな急な時間は初めてだ。

大慌てでやってくる中森警部を思わず心配してしまった。おそらく昨日も眠れなかっただろうに。親父がそんなんで青子も大変だったろうな。

まあ、とりあえず、新一を噂の届かない場所に誘導しよう……そう思った矢先、ポケットの中で携帯が鳴った。昨日没収した携帯だった。

咳払いをすると、口調を真似て話し始めた。新一がこっちを睨む。

「はい。え???どなたですか?もしもし!」

相手は外国人のようで、片言の日本語でなにか、まくしたてた。名前を名乗るのも忘れて、叫んでいる。早口で聞き取りづらい。外国

人の友達でもいるのか？と考えたが、あまり親しい人に話すという感じでもなかった。

なにやら酒の名前を叫んでる。さては、よっぽらった外国人の間違った電話だな——そう思った。仕方なく英語で質問する。

「I'M AFRAID YOU HAVE THE WRONG NUMBER? (間違い電話ではありませんか?)」
「NOOOOOOOOO!!! 違います!」

耳が痛くなるほどの声が返ってきて、びっくりして携帯を放り出した。じゃあ、誰なんだよ!

放り出した携帯を新一が見事に、キャッチした。さすがに驚いた顔をする。「出てもいいよな?」電話相手の迫力に圧倒されながら、頷いた。

しばらく受話器を耳に当てる。

「ジョディ先生じゃないですか?!」

それは、帝丹高校に英語の教師として潜入したFBI捜査官、ジョディからだったのだ。

下手な日本語は、実は演技だと言うことが以前調べたことで、はっきりしている。

「どうしたんですか。そんなに慌てて……それになんで電話番号知

ってるんですか!？」

「緊急事態なのよ! FBI本部に、どうしても必要だからって頼み込んでいろんな携帯会社にハッキングしてようやく手に入れたんだから!」

そんなこと出来るのか・・・!? 冷や汗をかきながら、電話を強く握りしめた。

「朝、私のところに黒の組織……危険な組織に潜入させてる、キールっていう仲間から連絡があります! た! なんでも、殺したはずの工藤新一が生き返ったとか。暗殺計画を立ててるって。心当たりないの!？」

聞いてるうちに、顔からどんどん血の気がひいていく。心当たりつて、ありすぎて困る。でもジョーディ先生にとって、俺はまだ話したこともないただの生徒だろう。それに、こんな短時間じゃ遊園地で一番初めに遭遇した事件から、最近のことまで、とても説明しきれない。

「……いいえ。ないです」

「そう、じゃあ、すぐにそっちに向かうから!、すぐに帰って。お、お隣には怪盗キッドがいるようね、帰れなくても、とにかく気を付けてね」

電話が、ぷつつと切れた。

「どうした、新一？」快斗が顔をのぞき込む。

「こんなところにいる場合じゃない……組織が動き出した、どうして、分かったんだ？」

呆然として呟く新一。快斗は

「何だかわかんねえけど、これじゃないのか？」と売り物の、なぜかいつもより分厚い、新聞を掲げた。

新聞の一面には、大きくキッドの盗んだダイヤがのっついて、細かな字が並んでいた。二面を開いてちらっと見ただけで、ぎょっとした。

二面、三面……五面までキッドの話題ばかりだ。それには当然自分のことも書かれていた。組織が見つけられない方がおかしい。

蘭に服部、園子は無事だろうか。もしかして、ここの居場所もばれてるんじゃない……いろんな事が頭に浮かんでは消える。だが、それよりも強く新一の目を引きつけたのは見出しだった。

そこには大きく、「怪盗キッド、かの名探偵工藤新一を誘拐!？」とある

「なんだよ、これ。誘拐されたことになってるのか……」

内容が、とても気になったので、一部買って広げた。その一部を要約するところだ。

「五日前、キッドからある宝石店に展示してあった、ホープダイヤモンドを盗むと予告状が届いた。

宣言通り、昨夜夜七時に米花劇団のショーの最中に現れた。だが、同じ劇場に来ていた名探偵、工藤新一が逮捕しようとしたところ、手錠がキッドと新一の腕に片方ずつはまるという異例の事態が起った。

インタビューによれば、工藤新一はその何日か前から行方知れずになっており、その間キッドが彼になりすましていたことが分かった。「協力」水樹玲香様・服部平次様」

警察は、怪盗キッドが犯した犯行なのではないかという見方で調べを進めている。警察は何をやっていたのか……」「出版、日紫佑帆」

「あーあ、窃盗罪の上に未成年誘拐罪までかけられてるよ。俺も未成年だって……ほら、この日紫佑帆っていう記者、予告状出すと毎回くるんだ。それも、常識はずれな奴で警察が追いかけてこられないのをいいことに、捕まえようとせずインタビューしに来る。まあ、こつちには好都合だけど。」

新一は全く聞いてなかった。ため息をつくと気づかず、話し続ける。

「これは、傷害罪もかけられてるってことかな。俺じゃないんだけど……」

その下には、キッドの行動を予想する評論家の意見・インタビュー。表が載っている。読むだけで、批評家が足やを組んだり、もったい

つけて話す場面が浮かんでくる。

五月一日：キッドの予告状が警視庁宛に届く

五月二日：大阪の警察署に同じ文面が送られる

五月四日：宝石を盗んで逃げる

五月五日：ショーに現れ上記の犯罪を犯して、窓から逃走

評「キッドは、今度の宝石にはやけに拘っているようですね」

記者「そうですね。盗んだ後にすぐに返らずに最終日に現れたことも気になりますね。」

評「そう、誰かに見せつけているようだ。警察や探偵への嫌みもとれます。大阪の警察署まで予告状を送ったのは非常に興味深いです。キッドが米花劇団を選んだのも、偶然ではないでしょうね。絵の裏の部屋はなんのための部屋なのか……なんだか、キッドの犯行はまだ終わらない気がしますよ。」

記者「なんでですか？」

評「実は、あのホープダイヤモンドのことです。半分しかないと言われていますが、もう片……」

バリバリッと言音がして、快斗が新聞を取り上げた。勝手にカバンにしまった。

「なんで、取り上げるんだよ。俺が買ったんだから返せよ。」

「文句が言える状況かな？盗むと思うんだったら自分で見張ってたらしいだろ」

さらっと言い放ったが、内心焦っていた。予告時間までいつのまにか三十分をきっている。それまで、新一に噂を聞かせずにいられる

か。

今頃、野次馬で囲まれているであろう宝石店を避けて、一階に下りた。

ゲームセンターなら音がうるさくて人の声も聞こえないかも知れない……

ぼんやりと青子と朝学校に行く約束をしていたのを思い出したが、そのことを頭から振り払って、早足でそっちへ向かった。

マスメディア（後書き）

投稿遅れてしまいました！

次は、青子の話です。実は、予告状を忘れてたのは、キッドじゃなくて作者の方です（汗

登場するわけにも行かないので濡れ衣を着せてしまいました。怒ってるかな……笑

まだ、予告時間まで余裕があるので、次では宝石店までたどり着かないかも知れません。土日の内どちらかには、投稿したいと思っています！

うわさ×野次馬

早朝六時三十分、青子は学校に一緒に行くという幼なじみとの約束をすっぱかされて、バス停までとぼとぼと歩いてた。―絶対来てっていったじゃない……今日は、イメチェンしようと思って、長い髪を結んできてから、快斗に気づいてもらおうと思ったのに。まあ、別にあんな自己中な奴ほっとけばいいもんね―。

すっかり機嫌を損ねて、ゴムもヘアピンも外してしまった。快斗がいなかったため、だいぶ早くバス停に到着することになる。青子はいつも、寝起きの悪い彼をインターフォンでたたき起こすために二十分は余裕を持って来ていた。バス停にいる間、音楽でも聴こうと思っていると、待っているのは一人だけではない事に気づいた。―紅子ちゃんだ。

「おはよー」嬉しそうに声をかけると、向こうも挨拶する。

「どうしたの？こんな早くに」青子が聞くと、紅子は意味不明な言葉を返した。

「実はね、今日の朝、早めにバス停に着いたら面白いことが起こるっていうお告げがあったの」

「…………おもしろいこと？」

そっか、紅子ちゃん自称占い師だったわけ。快斗にいわせれば、マジックには必ず種があつて、あんな子供だまらしいけど。

「で、あなたは どうして、早く来たの？」

「いつも寝坊する快斗が、今日に限ってあたしよりも先に家を出ち

やったのよ。こんなんだつたらもつと寝とけばよかった。」

少し眉をひそめる。

「へー、快斗君いないのね。じゃあ、彼は欠席よ。」

「なんで？」

「さあ……ずる休みじゃないかしら。後でお得意のマジックで、出席名簿をすり替えたりしてごまかしたりしてね。私の予想では、もう一人欠席者が出るわ」

「なによそれ」

真面目に取り合ってくれない紅子にふくれつつも、快斗ならやりそうだなと考えたりしていた。

まさか、あたしと登校するのが嫌で先に行っちゃったのかな。

もしかして昨日、米花劇団のショーの方が快斗のより上手だって宣言したの、まだ怒ってる？

米花劇団と言えば、お父さん、とうとう朝になっても返ってこなかった……きつと、またキッドにしてやられたとか言って帰ってくるのよね。

話すこともなくなってしばらくボーツとしていると、近く的大型デパートの方向からクラスメートの桃井恵子が走ってきた。

「青子ちゃん、早くデパートの方に来てよ！」

「どうしたの？」

「ハイドデパートにね、双子のマジシャンが来てるって話をきいたんだけどね。手品に手錠を使って鍵を忘れて手錠のかかったそのままでデパートうつろついているんだってー見に行こうよ！」

青子「見に行こうって、動物園じゃないんだからじつと見たらかわいそうだよ。」

紅子「おもしろそうね。で、どういう手品だったの？」

恵子「それが、みんなわかんないって。でも、双子は本当にいるみたいだよ」

手品が分からない？変ね…種が分からないって事はあるけど」青子もついていくことにした。

三人は、店の中にはいると、辺りをきよろきよろ見回した。左は花屋、正面はゲームセンター、右はエスカレーターだ。学生が朝からゲームセンターに寄るのはまずいわよ……全員暗黙の了解でエスカレーターの方へ向かった。

さらに右に曲がると、そこには人だかりが出来ていた。

「ねえ、あれじゃない？」「あんなに人が集まるもんなの？」

口々に言いながら、人混みをかき分けると警察が道を封鎖していた。その中には、青子の父親、中森警部の姿も…

「おとうさん！また事件なの？？」

寝不足で目の下に隈の出来た、中森が振り返り、だるそうに言った。

「青子、こんなところでなにをやってるんだ。ずる休みじゃないだろうな。今は忙しいんだ、もしずる休みなんかしたら」

「今何時だと思ってるの？ちょっと寄っただけ。」

「なら良かった。おまえは、まだ新聞読んでないだろうが昨日の失

敗のせいで、一晩中キッド対策会議だ。ほとんど眠ってないのに四十十分に予告状と来てる。追いかける方の身にもなってくれ」

そんな泥棒はいないと思うけど……だが、もちろん口には出さない。

「お父さん、今回はちゃんと捕まえてね！」

青子は、キッドを見つけたらこうした方がいい、手品には必ず種があるからなど快斗の言葉を利用して熱弁をふるい始めた。

「ねえ、紅子ちゃん」恵子が、袖を引つ張る。

「もう、五分でバス出ちゃうわよ。」

「そうね、青子ちゃんには悪いけど、先にいこうか。あのままじゃ当分動きそうにないし。」

紅子は、肩をすくめた。やっぱり、欠席がもう一人でたわね。もう立派なずる休みよ

ふとポケットに手を入れると、何かはいつている。

それは、反対向きに入っていたタロットカードだった。

「塔」

逆位置の場合、緊迫、突然のアクシデント、誤解を示すカード。

塔の上半分から炎が出て、てっぺんの王冠が崩壊している絵柄だ。

寒気がしたが、占い師が運命を変えることまではできない。後ろを

振り返りながら、デパートを後にした。

うわさ×野次馬（後書き）

文章短くなってしまいました。

次回は、また快斗の話に戻ります。読んで頂いた方の中には、タロットカードの場面でなんとなく予想がついた方もいると思います。

また誤字脱字・感想・評価があれば、教えてください

混沌として、のち恐怖

「さてと、ゲームセンターに着いた」快斗は満足そうに辺りを見回した。

ここでは、隣の客の声も、とぎれとぎれにしか聞こえなかった。どうやら、この選択は正解だったようだ。快斗だって、自分の選択に不安を持つことがある。彼にとって、珍しいことなのだが、今日とはなりにやっかいな奴がいるので緊張しっぱなしなのだ。

俺―怪盗キッドは、世間から大胆不敵といわれている。そして、だいたいのは行動は、突然の事にも、冷静に対処出来るように、脱走可能なルートや警察の盲点……などなど事前に調べていた。

予想しなかったことが起きた時、とにかく捕まらないため。

ただ、こんな計画、安易に誰かと相談出来ない。

いつも、一人で決めるか、寺井と協力していた。

だから、たまに予想出来ないことが起こると、宝石を後回しなくちやいけなくなるのだ。

飛行船に乗ったときも、強力な細菌をもったテロリストと遭遇するなんて、絶対に予想出来なかったし。そして、いま名探偵と手錠でつながっているという状況も、予想していなかった。

今回ばかりは、なにが起こるかわからない。

あの、新聞の批評家のコメントを読んだときもそう。もう少しのところで回収したからばれなくてよかったけど、最後まで読まれてたら即作戦中止だ。

新聞の一覧には、「（わざわざ）同じ文面が大阪警察署に送られる」と言っのがあったが、批評家の考え通りこれも作戦の一つ。

ところで俺は、東京出身と言っこともあり、盗みをはたらくのは主に東京付近だった。

大阪を悪く言っ気持ちはないが、東京から遠い場所だから、キッドに対する「免疫」がない。

彼らは、東京の警察と比べてたまされやすいということになる。

大阪人の勢いに負けて、東京の刑事がつられることを期待していた。

二週間くらい前に、偵察に来たときには、屋上、階段などをいろいろ調べたが、トリックに使えるような物は少なかった。

まあ、忍者屋敷のようなデパートがその辺にゴロゴロしている方がおかしい。

そういうこともあつて、今日は仕掛けを家から持つてきた。

例の花火と、屋上で見つけた物を使つて、盛大に姿を消してやろうじゃねーの……

マジックの事を考える快斗の目は輝いていた。

しばらく歩いて、時間をつぶした。新一が、このゲームもあつちのも嫌だといっので、俺は新一の携帯をいじつていた。

適当に歩き出すと、途中でうでが何かに引っかつて止まった。はあ、何に引っかったのかは分かつてるよ。

「腕が動かねえもん。手錠だ」

新一が、わざと柱に引つかかる場所を通って動きを止めていた。

「楽しそうだな、ぜってー何かたくらんでるだろ。買い物に行くっていったらさ！？さっきみたいなことは嫌だからな」

ちよつと一緒にいたせいで、だいぶオレの性格が分かってきていやる。その洞察力には拍手を送りたいぐらいだが、まだ知られるわけにはいかない。

「ああ、楽しいぜ。最近の携帯ゲームは」

新一が携帯の画面をのぞき込んだ。……

の「怪盗ロワイ

」お宝強奪戦」しかも結構強い。短時間でかなり攻略していた。

ゲームの中でも怪盗かよ——呆れた表情をした。

「はは、おまえは楽しくなさそうだな。いいさ——二階に買いに行こう」

「あつたりめえだろ、ライバルだと思ってた奴と、ゲームセンターなんて……」

「わかったわかった。言わなくていいよ」

（それは、こつちだって同じなんだから……）

まだ、不機嫌な名探偵をなだめて、引張った。それも、必要以上に周りを警戒している。

「あのな……」まだ、言いたいことがあるらしかったが少し考えこんで止めてしまった。

言いたいことあるならはつきり言えよな……

新一から目を離して腕時計を見た。六時五十分、そろそろだ。

***作戦開始！

まず初めにあるものを書いた紙をゲームセンターに置いていくことにした。

近くには、授業の一限目を選択してないからか、こんな時間から数人の大学生が集まっている。

紙を置くと、彼らが騒ぎ出さないうちにさっさと別の場所へ移った。新一には、一階を一回りしたら二階へ行くとでも言っとこー。

ただ、一回りすると言っても、本当の食品売り場は避けて通るけど……

次は、花屋で同じ紙を落とした。出てきた、女性店員が花に何か引っかかっているのに気づいた。じっと見つめると、いきなり金切り声を上げた。そして、もう一度確認して少し安心したような顔をしてから、店内の奥へ駆け込んだ。

「快斗、あの店員、いきなり叫びだしたけどなんなんだろうな」

誰でもそう思うような、聞かれたときのために用意しておいたセリフがある。

「宝くじがあたって、ビックリしたんだろ。紙を見てたし」

「……それにしては反応がオーバーというか、恐ろしそうな顔して

卒倒しそうだったぜ」

「それは、気のせいだ。よっぽどの大金が当たったんじゃないの」

こんな事をあと三カ所でした。だんだん一階が騒がしくなってくる。充分だと思ったときに、エスカレーターの方へ向かった。それはそうと、なんだか、新一の表情が暗い。何かを打ち明けようとしているような、そうでないような…

俺に見られていることに気づいた新一が口を開いた。

「あんな、さっきの電話のことなんだけど…」

まさか、携帯電話を返せっていうのか！？それは出来ない相談。さっきのは緊急事態だから代わったけどな。そこで、強引に話を変えた。

「さあ、いろいろ見て回ったとこだしそろそろ買い物して帰るか」
「…」

あれ？なんにもお咎めなし？話を聞けよとかいわねえの。新一は話す気が失せたようだった。…大事な話だったのかな…

でも、そうじゃないこともあるから話しかけられない。いくら敵の探偵とはいえこんなに近くにいて辛い顔してるのに。つくづく嘘をつくのが嫌になった。悪いな、オレのせいだ。

そう思いつつエスカレーターに足をかけた。

オレの予想では、二階にいる人の数は三分の一くらいに減っている。

*** 青子の勇気

五分後……二階ではまさに不思議な事が起こっていた。どんどん人が一階に移動している。

もう、刑事をのぞけば十人くらいしかない。

そのうち数人も様子を seen に一階へ行こうとしていた。

青子は当惑した。父親の方も、何人が階下に様子を見に行かせ、連絡を取っている。

「なんだって！キッドの予告状のマークが入ったカード！？それが落ちてたのか？」

トランシーバーの音量を大きくした。

「はい、そうです！ここにいる女性店員の方が発見しまして。その前にはゲームセンターで大学生が」

また何人が刑事を向かわせた。トランシーバーの相手が店員代わった。

「初めそのマークを見たとき、家の物が盗まれるんじゃないかと思って、立ちくらみがしましたよ。よく考えたら、キッドが盗むのは宝石ですし、文もなかつらので安堵したんです。とりあえず報告しなきゃいけないと思って……あつ、警部さん。向こうでもカードが見つかつたらしいですよ。みんな騒いでます。」

確かに騒がしくなってきた。女性もそつちに行つて、話し相手は、

刑事に戻った。

「中森警部！大変です。一階の五力所からカードが見つかり、店内が混乱してます。そのカードの位置が上から見ると星形になっているとか：学生達が新しい予告状の推理をしていますよ」

警部はいきり立って言った。

「キッドの目的は一階にあるんだな。こうしちゃいられん！いま私もそっちへ行く。」

そういつて中森警部は走り出した。部下もその後が続いた。青子も追いかけてようとして――踏みとどまった。

嫌な考えが頭をよぎった。

出来れば後ろを振り返りたくない。さっき何人の刑事が走っていった．．．！？

深呼吸して回れ右をすると、

宝石店の前には、誰もいなかった。

「お父さん！止まって！戻ってきてよ」

青子は頭を抱えた。一階の騒音で何も聞こえていない。キッドはこうなることを予測していたのね。いまは、二階には誰もいない。

あと、二分しかないのにここには私一人。

私を守るしかない。店の外に展示してあった宝石を素早く店内に隠す。

そして震える足を動かし、店にはいると内側から鍵をかけた。

勇気を奮い起こして、自分自身も宝石店の中のレジカウンターに隠れた。

護身用の長い電子警棒を握りしめて。

混沌として、のち恐怖（後書き）

遂にここまで来ました！まだまだ、続きます。

私は、大学のことはよく分からないのですが、受けた科目を選んで一限目に行くかどうか決められる、と聞いたので・・・

読者の方から固有名詞は伏せた方がいいと助言を頂いたので訂正しました。また、あれ？と思ったことがあれば教えて下さいm（――）

m

感想をたくさん頂いて本当に嬉しいです

次回も是非読んで下さい

緊迫 x 2

今快斗は、宝石店に着いたところだ。不思議なことに、店外にあった宝石は全て片づけられている。これなら、新一が見ても宝石店だとは思わないだろう。――中森警部も面倒なことするな！。中に隠すなら、目当ての宝石だけでいいのに。この宝石店も寂れているようだった。周りが静かなので、いつそう寂しさを感じる。新一も、二階に自分たち二人しかいないのを気にしていた。視線を無視して、店で止まる。

「おっ、この店テープが張り巡らされてる。探偵君が得意な事件だぜ。」

「マジかよ、でも今日は何も出来ないから、早く帰ろう」

「ちよつと見ていこうよ」

ノブに手をかけると、開けようとしたが鍵がかかっている。え？さつきは鍵がかかってなかった。中森警部も用心深くなったんだ。

「な？鍵開かないだろ。」まずい、せつかくここまで来たのに。新一が、二階を見渡した。

「それにしても、なんで、こんなに客が少ないんだ。今日セールだつてのに」

「事件が起きて、警察が避難させてんだよ。ほら、一階に刑事がいるの見えるだろ？」エスカレータのところへ戻って下を見た。上から覗いてみて快斗自身ビクリした。……なんて数だ。

キッドが人質を持っていると勘違いしてやがる。これは本当に捕まるわけにはいかない。青子にどんな顔をされるか……つばを飲み込んで、新一を盗み見ると、彼の目は鋭く光を放っていた。

ふつと笑うと、「さつそく何かしでかしたのかも、しれねーな」小さく意味不明なことを呟き、急に乗り気になっただらしく、逆に快斗を引っ張って店の前に戻った。

快斗はカバンからピッキング道具の箱を取り出した。彼が何でそんな物持ってきたんだと疑わしそうにする。俺はいつでも用意周到なんだよ！二分もかからず、鍵がカチツと音を立てた。ギーツと音と共に、扉が開く。ここまで来ればこっちのもんさ。

中にはいると、なんと店内の宝石まで全て片づけられている。中森警部ってこんなに用心深かったか！？と、とにかく計画通りに。

「事件って言っても何も無いぞ」

「そうだな」しばらく探す仕草を見せた。

「なー、ずっと思ってたけど、この近くに宝石店があったと、思ったけど気のせいだったな。ちょっと安心したよ」あつたんだよな、目の前に。また罪悪感を感じる。でも、引き下がることはできない。新一が退屈そうにのびをしている。こうやっていうと、楽なことに聞こえるけどこっちの腕ものびと一緒に上げなきゃいけないことを自覚してくれ！

その隙に、少しかがんでいった。

「おい、こんなところに何か落ちてる。暗号…かな」

元から持っていた紙を、拾うふりをして渡した。彼は受け取ると食い入るように見つめた。

O G E M N N A N

文二に字目注

しばらく、沈黙が続いた。少なくとも暗号で頭が一杯の新一にはそう思えた。しかし、本当はかすかにごそごそという音が聞こえていたはずなのだ。

文二に、字、目注。目注は注目のことだとして、二つの文の字に注目……。暗号文は二文しかねーだろうが。さてよ、反対から読むと……

注目字に二文。あまり意味が変わったとは思えなかった

あつ……

目注 注目 に字 字に 文二 二文

一瞬頭の中で文字が動いたような感じがして、文字が読めた。

二文字に注目

上のアルファベットを並べ替える。G O M E N N N A

こんな暗号、誰が作ったか、考えるまでもない。顔を上げると、目の前にいたのは、快斗ではなくキッドだった。カバンの中に、マントをしまつてあつたんだな。

怪盗キッドがこっちを見た。

「意外と解くの早かったな。さっすが、キッドキラー。」

「……今の内に忠告しとくからよく聞けよ。オメーが手品か何か使
って逃げようとしたとき、俺が大声で種を言えば、簡単に捕まるん
だから」

「わーってるよ。急いで逃げることにする。その前に警官が来るか
どうか」

とうとう我慢の限界に達して、低い声で言う。

「じゃ、警官が来る前に、俺が許すかどうか考えてみる。全力で阻
止してやるぜ、目当ての宝石は手に入れてないんだろ？」
目の光が鋭さを増した。

重苦しい空気が流れ始めたその時、カウンターの方からガタン！と
音がした。

緊迫X2（後書き）

話し言葉ばかりの文：本当に駄文ですね

だんだん改善していきたいです！

緊迫 X 3

後ろのカウンターで突然ガタン！という音がして、二人ともびくつと振り返った。カウンターにずっと隠れていたらしい。出てくるタイミングを推し量っていたようだった。誰かが、こっちに向かって、警棒を構えて立っている。（罠にはめられたか……）

逆光で、よく顔の见えない相手が叫んだ。

「怪盗キッドね！やっぱ来ると思った。みんなはだまされても、私はだまされないから！」

この声、青子の声と似てる…相手が一步近づいた。顔がよく見え

「あ、青子!？」

「何で青子の名前知ってんのよ！」

「い、いや、こんな晴れた青い空なのに、お嬢さんにそんな物騒な物似合いませんよ」

無理やりごまかす。平静を装っていたが、動揺を隠した声だと新一には分かった。（今度は何を隠してんだ？）

「適当なこと言わないで！今日は曇り空なんだから」
おっと、運が悪い…

「なんで、目的が一階にないって分かったんですか？」
「友達で、マジシャンの快斗が、人の目をそらせるためには……
とか何とかしゃべってたから」

青子がさらに近づいてきた。お互いの顔がよく見えるところまで来た。青子が、目を見開く。

「快斗!？」正体がばれた?しかし、青子はじつと新一を見つめていた。新一は、といえば、同じように驚いている。

「蘭?」「快斗よね?何でここにいるの!」「オメーこそ何で……」

「快斗はなんでキッドに捕まってるの」

同時に質問していて全く話がかみ合っていない。真ん中に割ってはい

「静かにしろー。二人とも、なんか勘違いしてる!」って聞いてない」
相変わらず、無意味な問答を繰り返している二人を見ていて、あることに気づいた。例の宝石、青子が持つてる……シヨックを受けた。青子にとって、俺は敵なんだ。今、青子は別のこと――俺のことに気を取られている。今なら、不意をついて盗れるだろう。恐る恐る静かに手を伸ばした。もう少しで手が届く――というときに、横から腕が伸びてきて俺の手を掴んだ。新一が、オレの言動をめざとく見張っていたのだ。青子がハツとした表情をした。新一は、全然手を離そうとしなかった。これは、先に逃げる方が先決だな……

そう思っていると、一瞬後ろへ下がった青子が、もう一度前に出てきて、ためらいながら俺の手に宝石を置いたのだ。

「えっ……いいのか」何で青子が急に気を変えたのか。啞然とした。

「快斗を返してよ」少し涙ぐんでいった。手錠をちらつと見て付け足す。

「今は、無理でも」

（青子、そんなに俺のこと心配してたのか．．．迷惑ばっかかけてんな。）目頭が熱くなってきた。でも、いま俺はその幼なじみを連れ去った敵。複雑な気分だった。

「もし、快斗のせいで宝石が手に入らなかったらひどい目に遭わされるんじゃないの？」

俺は、不安に駆られて後ずさった。早く、帰ろう。ところが、かの名探偵が余計なことを言った。

「あの、おれ快斗じゃねーよ。」その場の雰囲気張りつめる。

「どういうこと？」青子の声が、震えた。

「つまり……快斗って奴と俺は、似てるって事だよな。キッド？」

青子が、警棒をぎゅっと握りしめた。鋭い目でこっちを睨んだ。新一も、直感的にこれはやばいと感じたらしい。蘭が怒ったときとおなじ目だ。こういう場合、怒り出すだけではすまない。その上相手は、強力な武器を持っているのだ。二人は慌てて廊下に逃げ出した。

「待ちなさいよ！」大きな声に一階にいた人達も少し静かになる。事態に気づいて、走ってくるのも時間の問題だった。最悪だ。早く逃げねーと

目指すは屋上――静まりかえった二階にバタバタという音が、やけに大きく響いた。

緊迫X3（後書き）

この場面、まだ終わりません。青子と、快斗もそのうち仲直りさせようと思っているので安心して下さい！

四面楚歌

二人は、屋上まで逃げた。青子は途中で遠回りをしてまいた。でも、父親からキッドの事を何度も聞いてるため、どこに逃げたかなんてすぐに感付くに違いない。

走りながら、新一は、快斗の事を考えていた。あの女の子は、十中八九快斗の知り合いだ。しかも、相当怪盗キッドを嫌ってる。だったらなんで怪盗キッドを続けるのか？と不思議に思えてならなかった。

また、快斗は悪い奴じゃないという予感がするのも確かだった。

階段をのぼりきって、屋上のドアを開けると、外には、雨雲の立ち込める暗い空が広がっていた。

すると、どこからかバタバタと風を切る音が聞こえて、眩しいライトが目の前照らした。目がちかちかして手をかざす。

「おい、あれ取材ヘリか」「みたいだな。相変わらず、情報つかむの早えー」

「そんなこといつてる場合か！まあ、俺は関係ねえしかまわないけど」

光に目が慣れてきた。

当然に俺は、いままで取材ヘリを探偵の側からしか見たことのなかった。それに乗ってキッドを追いつめたことでもあるくらいだ。しかし、今回は違う。

怪盗の目線からみたヘリは、思った以上に滑稽だった。――移動ならハンドグライダーの方が、身軽だな。

そう考えてから、ぞつとして頭を振る。どうしちまったんだよ。こいつのせいで、俺まで怪盗になったような気分だ。

怪盗の方を見ると彼は得意げなポーカーフェイスをしていた。それが、得意げに見えたというのもおかしい話だが、ポーカーフェイスというのは、悲しそうにも、嬉しそうにも怒ってるようにも見えるものなのだ。

俺は、後でこいつが何を思っていたのか知ることになる。ヘリから、記者が降りてきた。へこの人が、常識知らず、恥知らずの新聞記者、日紫佑帆だぜ。快斗がご丁寧にも、肩書きをつけて説明した。

眼鏡をかけ、背が低くくひよろりとして、スーツはだばだば。いかにも天然そうな出で立ちだ。幸いまだ警察はこないらしく快斗がさつさと逃げようとすると、佑帆は、この細い腕のどこにこんな力があるのか、というくらい強く、新一の腕をがしつとつかんで引き戻した。

仰け反りそうになりながら、振りかえる。彼女のに向き直るや否や、マイクを突き付けられた。

「あなたがキッドの助手といわれる江藤淳一ですね」
は……？助手？しかも名前全然違うし…

虚をつかれて目をしばたいてみると、ディレクターがでてきて横からなにかささやく。彼女は不機嫌そうに言い返した。

「名前……？どーでもいいじゃない！今、取材中なの！助手じゃない

！？それはきつと警察の捜査がおかしいのよ」

おいおい……大丈夫かこの記者。快斗は、慣れたような顔つきですましている。それにしても、あんだけ力があるなら、自分で捕まえればいいのに。

新一がなにも答えないと、時間の無駄！とばかりに快斗にマイクを向ける。

「今日も、予告状通りに成功したんですね！今のお気持ちは？警察への伝言があれば何かどうぞぞ！」

たちまち質問攻めにあつた。さあ、どう答えるんだらう……

「そ、うですね、もうあなた方をわづわらせることもないかも知れませんかと言ってください」

適当に応えて上手く一つ目の質問をスルーした。さすがに答えられる訳ないか。さらに、二三問聞いて、満足したのか引き上げていった。

耳を澄ますと、ふこれでまた視聴率No.1だと聞えてくる。

つたく、こいつもよく我慢してられるよ

「お客様には手厚くしなくちゃな、テレビはたくさんの方が見るんだし」

考えを読んだように、言った。そりゃ、ご苦労様。

快斗は、嵐のような報道陣に囲まれて自分の立場を忘れていた。屋

上の扉があいてようやく我に返った。青子が息を切らして、走ってくる。

「怪盗、キッド、はあ、いい加減にしなさいよ」

「……」

「いま、自首すれば、何もしないわ、警棒も、捨てるから」
「残念ながらそういうわけにはいきませんね」

一瞬迷って青子が、警棒をこっちに振った。屈んでよける。次は横から――数十秒間こんな状態が続いた。

ところで、これも、後で聞いたことだが、青子には本気で当てる気などなかったらしい。青子は、そんな暴力的な性格ではない。あくまでも、警察が来るまでの足止めだった。一発だって当たるとは思っ
てなかったのだ。ましてや、キッドに避ける気がないなんて……

「人のもの盗むなんて、最低よ！」

「よく、分かってるさ」

青子が、また警棒を振り下ろすと、今度はバシツと音になった。青子がギョツとしてまじまじと見ると、快斗が警棒を手の平で受けとめていた。受けたのは、白い手袋越しだったが、それでも痛かっただろう。彼は、顔をしかめて、腕を引いた。彼女の手から快斗の手へ警棒がずりりと抜ける。青子は、殴られる――と、目をつぶった。

なにも起こらない。彼は、カランとそれを放った。

「バカ。似合わねーって言ったろ」

「なによ！なんでよけないの！紳士ぶっちゃって。悪者なら悪者らしくしないと……一思いに捕まえられないじゃない」

「わるかったな。俺によける権利なんてない気がしてよ」

青子には彼のポーカーフフェイスが悲しそうに見えた。

屋上の階段から、足音が聞こえて、中森警部と部下がやって来た。涙目の青子と床に落ちた警棒を見て、娘に駆け寄る。

「おのれ、怪盗キッド！青子になにをしたんだ」

彼は疲れたような動作でどぎまぎとする新一を引つ張り、無言で二人から離れると、花火に火を付けた。すぐ煙が漂い始め、角においてあった消火器を蹴りあげた。それは、暴発して白い粉が霧のように舞った。

霧が晴れたときには、二人の姿は消えていた。

四面楚歌（後書き）

消火器が暴発したことがあるのは本当の話です！

もう二年くらい前に、塾に置いてあつた消火器を誰かが倒して、階段から落としちゃったんです。一階から二階まで霧がでたみたいになりました。（苦笑）

その時は二階で授業を受けてたのですがドーンって音がして、先生も生徒も、防災訓練みたいにマスクとハンカチで口を覆って通つたのを覚えてます

皆さんも、気を付けて下さい 余計なお世話

タイホ？シャクホウ？

さあ、その煙が舞ってる間何が起こったかだが……視界が見えなくなつて数秒後、俺は快斗に突き飛ばされた。シュツという音、続いてカタンとなにかが落ちる音がした。でも、粉の霧が晴れた後は何も異常はないようだった。霧が晴れたあとも、まだ逃げてはなかったのだ。皆、さっきまで俺たちがいたところをあんぐりと口を開けて見つめてて、こつちを振り向いたりしない。ここは、屋上の右端でだいぶ後ろに移動した場所。場所を移動しただけなのになぜ、分からないのか……少し考えてから、自分の状況理解して吹き出しそうになった。頭には、いつの間にか警官の帽子を被り、手は敬礼のポーズを取ってたからだ。（敬礼は余分だろ…キッドが逃げたすぐ後だつてのに）周りに気付かれないように手を下ろした。

快斗はどこだ？辺りを探すと、手錠の先はビルの壁をつたっていた。彼は、壁の窓の窓枠に足を引っ掛けて立っている。

おい、落ちるなよ…心の中で心配したあと、はつとした。

今なら、このキザな怪盗を逮捕できるんだ。この場で、ちょっと警部に声をかけるだけ。簡単なことだ……快斗にもその気持ちが伝わったらしい。今ここを飛びだせば確実に逃げられない。捕まるのか、彼の目に絶望の色がまじった。小さな声でつぶやく。

「できれば、カバンからダミーのハンドグライダーをだして飛ばしてくれれば…助かる。近くにあるだろ」

カバンは足下にあった。青子が来たときに置いたのだ。さすがに見つかるだろと思っていると、地面には何かのスイッチも落ちている

のを見つけた。たぶん、これでダミーがでてきて、押すつもりだったのが、落としてしまったという事なのだろう。ゆっくりそれを拾い上げる。だけど、押したら共犯者だよな、

心臓が早鐘を打ちはじめた。数日前の動悸とは別の種類の緊張。快斗の事で気に掛かることもあるんだ。昔会ったような記憶もつつすら。信じられねーけど。釈放か、逮捕か。でも、事情を聞くなら警察署の方が…少し手が震えた。だんだん警官が正気に戻ってきた。辺りを捜し出す。

「キッドめ！どこへ逃げた！」

突然、後ろで中森警部の声が聞こえた。真剣に考えてるときに急に声をかけられたらどうなるか…しかも大声で。

新一は、飛び上がりスイッチを落としてしまった。それは、遠く離れた地面へ。手錠を落としたときの映像と重なった。さらに快斗の手を擦り抜けて、重い重力にのしかかられ、すぐ見えなくなった。

「わっ！」

「どうしたんだ、そんなに驚いて。ん？見かけない顔だな。大阪からか」

「えっ、いや、あの…せやな」

警部が眉をひそめた。やべー、大阪弁しゃべれねーよ。快斗が観念したように静かに目を閉じた。オメーに任せるよという声が聞えてきそうな表情だ。新一の方も、決意が固まった。俺は、まっすぐ指差した。

「中森警部…怪盗キッドならいますよ…」

ギリギリのトリック

中森警部が屋上から下を見ようと、てすりに手を掛けた。そして、俺はまっすぐ扉を指差した。

「警部…怪盗キッドならいますよ、扉から逃げていきました」

——何キッドをかばってるんだろうな…

中森警部は目を吊り上げて怒鳴った。

「なんだと！？お前は見て見ぬふりをしたのか！早く言わんか、そういう事は！全員聞いたか、おいかけるぞ。それと、青子は早く学校に行け！」

快斗は信じられないと言った様子で目を開いた。どんどん屋上が空になる。青子だけがポツンと取り残されて、思い出したように呟いた。

「学校、あること忘れてた。今日はきつと運勢が悪いんだわ、おかしな事ばかり。快斗の奴、後でとつちめてやるわ。約束破って」

約束を破った張本人は、冷や汗をかいてこっちを見上げた。はいはい、俺になんか言ってほしいんだろ？すでに共犯になって、投げ遣りになって青子に声をかけた。

「快斗って子、学校にはいつてない思いますよ」

見知らぬ警察官に唐突に話しかけられていぶかしげにする。しかも、一人だけキッドを追いかけずにたたずんでる警官だ。だが、青子はそこまでは考えなかったらしい。

「えっ、なんでですか？快斗のこと知ってるの？」

「実は僕の…姉の友達の従兄弟のが快斗って奴で…熱だして休むって」

「……それってほとんど赤の他人じゃないんですか？」

最後の質問は黙殺した。下を見ると、快斗は口だけ動かして何か言った。

——約束破った事怒ってんのか？

そう聞くと、意外な答えが返ってきた。

「怒ってたけど、熱だったらしょうがないわよ。それに、あのいたずらっ子みたいな顔で怒るなよってマジック見せられると、なんか憎めなくて、その内忘れちゃうのよね！あはは、なんでだろう？」

キッドが焦るのを承知の上でさらに質問してみた。

「じゃ、例えばの話ですよ？彼がキッドだったら…」

「快斗があんなにマジック上手な訳ないじゃない、あり得ないわ」あまりの鈍感さに膝がぐくつとなった。まったく知らねーのか。

「キッドはなんであなたに危害を加えなかったと思います？どうやら、キッドに気に入られたようなので後で謝りにくと思いますよ。そうでなかったら僕が逮捕してやります」
したにいる奴に睨みをきかせてやった。

「来ないわよ、来たら即逮捕よ！」

そういうと、階段を降りていった。新一は、快斗に手を差し伸べた。ひらりと、コンクリートに着地する。

「いててて！そんなに強く手を持つないでくれ！それでも結構痛いんだから、青子の馬鹿力め」

「素直じゃねーな、あの子のこと好きなんだろ？」

「バーロ！っなんじゃねーよ。余計なことばっか言いやがって。それよりどうして俺のこと助けたんだよ」

「好きな奴に嫌われてまで正体を隠して盗みを働くってことはよっぽど理由があるんじゃないかと思ってな」

「……」

しかし、理由はそれだけではなかった。正体を隠している状況が自分に似ていて放っておけなかったというのもあるのかもしれない。周りの奴が、自分のことで沈んでいるのを隣で、何食わぬ顔を装って見ているのがどれほど辛いか……そんなことは身にしてみて分かっていた。いつも、泣いている蘭を「新一兄ちゃんはいつか絶対帰ってくるから」と励ますことしかできなかったのだ。ここで捕まったら一生後悔するだろうな、と思った。

「……」

「おい！ちゃんと警察が納得するような理由があるんだろうな？なかったら承知しないからな！それに、あの子には後で全部はなせよ！」

そう叫ぶと、彼の横顔を見た。すると、顔には切り傷があり、うっすら血がにじんでいた。煙が上る前はなかったはず。同時に、これが特殊マスクを使った変装ではないということも、はつきりしてしまった。

「その傷……」

快斗は、おもむろに言った。

「消火器のトリックを使う寸前、視界の端にライフルを構えた男が見えたんだ。そいつ、オメーを狙ってたぞ。俺の秘密も、話すから、どういふことが説明しろよ」

シュツという音が、弾丸が通り過ぎる音、コトンというのが……足下に落ちてる弾丸の立てた音だったのだ。

「わかったよ。どうやっても、離れられないみたいだからな。」

「それじゃ、今は停戦といきますか」

新一は、そっぽを見ながら片手を突き出した。

「ほら、伸縮サスペンダー。これで、ビルから路地に降りられる。階段から下りると見つかるだろ。このデパートの裏は人通りがすくねーから。」

「サンキュー」

こうして、下に降りる準備をし始めた。さて、これからどうなる事やら……苦笑を浮かべながら考えた。組織とキッドと元の姿の俺、面倒なことにならなきゃいいけど。コナンでの日常になれ始めていた俺には突然の出来事に、頭がついていかなくらいだった。そんな自分をあざ笑うかのように事件はどんどん進んでいく。怪盗キッドをかばって逃走中だと？三日前の俺は考えもしなかったな。

俺は、まさに怪盗の世界に足を踏み入れようとしていた。

準備は出来たか？名探偵。快斗の声がぼんやりと聞こえた。

ギリギリのトリック（後書き）

手錠でつながれながらそばを向いて片手を突き出して伸縮サスペンダーを渡すっていったいどうやってやるんでしょう……

新一は器用なんだと思っておいて下さい（笑）

ANOTHER SIDE

七時五分、ちょうどキッドの作戦が進行してたところ。ハイドデパートから約三キロ離れた高速道路では、黒いポルシェが静かに、不気味に走行していた。その黒い車体は他を威圧し、絶大な存在感で周囲を驚かせた。中には、ジン、ウォッカが乗っている。隣に、ぴつたりと着いていくのがヴェルモットのバイク。ポルシェの窓が、開いた。

「朝から呼び出してどういう事なの？ジン。」

尊大な口調で話す。「あの方」のお気に入りだから出来る態度だ。

「ヴェルモット、おまえはテレビを見ないのか」

「マスコミの情報は信じない主義なの。もしかして、あの探偵さんと一緒にいる泥棒のことかしら」

「ああ。ずっと前にバラしたはずの工藤新一。フツ、どうやら生き返ったらしい。探偵狩りに行くところだ、何も知らない大泥棒と一緒ににな」

「そうなの、バーボンがいらないようだけど？もう、そこに向かってるのかしら？」

「ああ、上手くいけばとくに成功してると思うが。そうじゃなくて、また別の策がある。それは、随分前のマジシャン、黒羽盗一を殺った、黒崎って奴に任せてある。コードネームは、ヴァインだ。」

「アップフェルヴァインの省略？——リngo酒のシードルの一種ね。禁断の実とかけたみたいね。確か、そのマジシャンは組織の重要な

証拠を掴んだんじゃない？彼は組織から離れて長いこと、身を潜めてたのにねえ。何か引つかからない？」

「それをバーボンに調べさせているんだ。まあ、こっちはこの辺で高みの見物と行くか。万が一その作戦も失敗したら……何をするかいつてあるな？作戦は今日決行だ。」

「OKよ」

ヴェルモットは軽く手を挙げ、轟音を立てて走り去るポルシェを見送った。

（ジン、あなたは思い違いをしてるわ。シルバードレットはそう簡単に倒せない。彼にはたくさん仲間が居るのよ）

パーキングエリアにバイクを止めると、何台も通り過ぎる車の中から黄色いビートルを見つけた。やっぱり、彼の居場所を突き止めたの。彼女は、バイクの向きを変えてそつと彼らの後を追った。

*****ビートルの中で

服部は、光彦の探偵バッジとコナンの眼鏡を頼りにここまで来ていた。学校も休んで、東京に残った和葉と平次はなかなか眠れず朝早く起きてしまっていた。テレビを付けると、なんと怪盗キッドの予告状だ。

——何を考えとるんや。工藤も一緒におるんやぞ。

日紫佑帆のアナウンスは、要領を得ない、的はずれな質問ばかりだが、映像からそこがどの辺かは絞れた。お陰で、眼鏡には工藤の居

場所が示されている。

「アガサのじいさん！もつとスピードだせへんのか！」

平次が、文句を言っているとアガサ博士はアクセルを思い切り踏み込んだ。

「そんなの分かつとるわい。これは、わしが作り替えたもんでのう。普通のビートルの約一点五倍は燃費がよくてスピードも……」

「車の宣伝はええんや！どうせ最後はわしは天才発明家じゃっていうんやろ？前向いて運転してくれや」

「そうじゃった、そうじゃった」

そうじゃったって前見て運転するのをわすれんなや……

車には、蘭、玲香、和葉、平次が乗っていた。小学生が学校を休むのには大反対だった。ところが、「新一お兄さんが心配だ」と言われると、止められなかった。ちなみにコナンのことは、新一のぼやいたとおり彼の両親とアメリカに旅行しているという話をした。手錠の鍵はいまだに玲香が持っている。ビートルの後ろには、毛利のおっちゃんの黒い車が走っていた。後ろには探偵団と園子が乗っている。

「服部君！キッドの予告、成功したんだって！」

「なんやて！？そんなことあるかい！」

助手席から振り返ると、蘭の携帯を奪い取った。ニュース覧には、ホープダイヤまたもや消失、警察の不手際とあった。舌打ちをして、携帯を返す。その拍子に、後ろのバイクが見えた。ビートルはかなり速いスピードで走っているのに、そのバイクは、つかず離れずついてきていた。

「博士、あのバイクの女知ってる奴か？」

横目で見ると、青ざめて、また強くアクセルを踏んだ。それでも着いてくる。

「組織の人間なんか」蘭たちに聞こえないようにささやく。

博士は無言で頷いた。バイクが、ビートルと並んだ。ヴェルモットは、平次の持つている眼鏡の表示をちらつと見て、瞬く間にビートルを追い抜かしていった。平次がハッとする。

「おい、工藤の居場所がばれたで！……あのバイク、なんてスピードや。追いつけへん」

小声でそう呟くと座席に座り込んだ。ヴェルモットが、無線を取り出した。ジンに連絡するつもりだ。超高速で走るバイクを片手で運転しながら無線で話すのは並大抵のドライブテクニクではできない。ビートルで、追い越すのは不可能であるかに思われた。平次には、彼女の口がこう動いているように見えた。「工藤新一がいるのはどうやらバス停みたいよ。すぐにヴァインをそっちに行かせて」数分後、その予想は現実になる。

そしてそれが、蘭に黒の組織の存在を知ることになる最初の兆しでもあった。

ANOTHER SIDE (後書き)

今回短いです……

後の章で私の考えたバーボンの正体と目的を明らかにしたいと思うので是非読んでください。

評価感想、あれば教えて下さい

アップフェルファイン（前書き）

ヴァインの口調が乱暴でくらい雰囲気になってしまいました…

やっと黒の組織登場です！

アップフェルブアイン

今にも、黒の組織がやってくると言うことを知らない二人はバス停にいた。相手に気を許せば、捕まるかもしれない、という緊迫感が消え、比較的穏やかな空気が流れていた。

バスがハイドパート前で停まった。来たときとは逆向きのバスで作戦会議のために快斗の家へ戻るところだった。

快斗は、新一が自分と同様に何か凶悪な物に追われているのだと察しがついた。おそらく、コナンとしてクラス羽目になった理由を聞かされるのだろう。引き替えに自分も、父さんのことを話さなくてはならない。コイツに賭けてみつか……

バスの座席に座ると、やはり手錠のカムフラージュのために例の新聞を広げた。新一は、一番に評論家のコメントを最後まで読んで苦笑していた。短時間の間に出来るだけたくさんの情報を集めようとしたようで中には白馬の些細な愚痴まで掲載されていた。もちろん、劇に使う予定だった車のことだ。

（奴、そうとう根にもってんな。なにせ、アレには本当に仕掛けがしてあったんだから。車をワイヤロープで吊すだけのお粗末で単純な仕掛けだけど、何かの弾みで発進しないようにブレーキを踏むと同時にタイヤがパンクするようになっている。アクセルは普通に効いたから、そのまま帰っのたんだろうな。赤信号で停まった途端パンクか……許せ白馬。時間稼ぎのため、どうしようもなかったんだから。）

新聞の隅には、怪盗トピックスという枠があり、昨日の手品の種が

公開されていた。ただ、肖像画の仕掛けについては分かってないらしい。ふと、青子の言葉がよみがえってきた。

「青子、俺より米花劇団の手品の方が上手だなんて言いやがって……」 小声でつぶやくと、新一が訊いた。

「オメー、なんで舞台で手品なんてしたんだ？」

「えっ、なんでって、その、何もしないで帰るなんてあっけないだろ」

「この評論家によるとー、誰かに宝石を盗んだことを示したかったらしいけど、それなら証拠だけ見せて逃げればこんな面倒なことにならなかったのによ」

「だからそれは……」

「気になる奴の言葉に対抗したかったから……か？」

「は！??」 少し声が裏返った。

「米花劇団の方が上手いって言われたから、劇団のトリックを暴いて利用した挙げ句、誰にも解けないマジックを披露して仕返ししたと……」

「うるせー！ 違うっていつてんだろ！？」

動揺しているのが見え見えだった。凶星らしい。いつも、蘭のことをからかわれる新一としてはいい気分だった。

そんなことを話していると、三番目のバス停から二人が乗ってきた。一人は、黒いジャケットに、サングラス、湿度が高いのに、手袋をしている人物。もう一人は、眼鏡で長身の大学院生のようなだった。

「あつ、あの人、沖野すばるだ。火事で家が焼けて今オレの家を貸

してる人だよ」

「へー。」

バスが発車した。二人とも席が空いてるのに座らない。まあ、そういう人もいるから別に変だとは思わない。しばらく、沈黙が続いた。暇なので何となく目を泳がせていると、ジャケットの男の腕が震えている。

彼は両替をしに行くように、財布を持って、運転手に近づき、ポケットに入ってる物に手をかけた。

次の瞬間、拳銃を取り出すと、運転手に向けた。運転手は横目でちらつと見て驚き、ハンドル操作を誤った。バスは大きく、車道をはずれ、建物に車体をぶつけた。すさまじい衝撃とともに、車の表面を建物の壁がするキキキという嫌な音がして、車内は悲鳴で溢れた。バスジャック！？いったい何のために。幸い歩道には誰も歩いてなかった。

「しつかり運転しろ！今からオレの言う通りにするんだ。絶対バス停で止まるな。それと、白と黒の服を着た高校生の二人組を見なかったか、答えろ」

運転手が必死に車道にバスを戻しながら返答した。

「そ、その二人なら、手前の席に……」

彼はつかつかと車内を歩き出した。新聞を顔の高さまで上げて、顔を隠した。かれーヴァインは、二人に気づかずそのまま通り過ぎた。新一と快斗は同時に言った。

「俺を狙ってるのかも知れない」

顔を見合わせると、頷いた。二人を見つけれないヴァインが引き返してくると、快斗が足突き出し引つけた。

もう少しでつまずきそうだったが、彼はよろけただけだった。快斗にはまだ計略があるようだ。

ヴァインは振り返り、足が突き出した方向をにらみつけた。視線の先には新聞が一杯に広げてある。下には、足が二人分のぞいていた。

「そこか……小癪なまねを」

彼は新聞めがけて二発銃弾を撃ち込んだ。周囲からさらに悲痛な叫び声が上がった。銃弾の勢いで新聞がひらめき、地面に落ちた。

しかし、高校生なんてどこにもいない。新聞は手すりに器用に置いてあっただけだった。足だと思ったのは、二足の長靴。その隣では窓が全開になっている。

まさか、飛び降りた！？そんなはずは……

窓から顔突き出すと、上からカバンが落ちてきた。間一髪のところだよける。

くそっ、天井か。ヴァインは、運転席に駆け寄り叫んだ。

「上の奴らを振り落とせ！」

「で……でも」

「ごちゃごちゃ言つな。こうやるんだよ！」

彼は乱暴にハンドルを掴むと、右へ左へ方向転換した。天井にいた二人は危なっかしく、足下に捕まっていた。このときばかりは、手錠が役に立った。快斗が落ちそうときには新一が、新一が足を踏み外せば快斗が引つ張り、助けることが出来た。

でも、あまり長くは持たない……何か使えそうな物はないかと、探すとバスの後を黄色いビートルが走ってくるのが見えた。アレは確か……新一の近所の博士。窓から大阪の探偵の声がした。

「工藤！そんな所で、なにやってんねや！」

快斗の頭に名案が浮かんだ。ちょっと荒っぽい方法で新一が着いてこられるかは微妙だが。彼は立ち上がった。

「どうするつもりだ」

「集中してくれ。危険だから、素人は腕に捕まってる！」

そういうと、バスの屋根を助走を付けて走り出した。

足が離れ、ひやっとする感覚の後、ビートルのボンネットに着地した。

勢い余って正面ガラスぶつかったが、何とか無事だ。

「おい！前が見えん。早く中に入れ」服部が言ったが、快斗は首を振った。

まずはバスジャック犯が優先だ。

「博士！コナンのあのベルトねーか？」「こつちに、あるで！」服部がカバンと一緒にパスしたベルトを受け取った。ボタンを押せばサッカーボールが発射される物だ。

「快斗、そこに座ってバランス取ってる」言いながら立ち、ボールを蹴った。快斗も座って同時にトランプ銃を撃つ。

トランプ銃で、バスの後ろのガラスにひびが入った所に、ボールが命中した。そのままヴァインの方に。

そして、彼の顔にあつたってほおを張り飛ばした。

彼はちつと舌打ちをし、外に視線を向ける。隣にはポルシェが併走していた。

ヴァインも窓から飛ぶとポルシェの中に吸い込まれるようにして消えた。ビートルが減速した。玲香が急いで、鍵を手渡した。

「さ、サンキュ」受け取ると、車が止まったところで飛び降りる。
「博士、早くにげる！奴らは俺が引きつける」

走り出すと、少しの間、ポルシェが威厳たつぷりに追いかけてきた。大きな車が通れないような、裏路地や細い橋で追っ手をまく。ポルシェは赤信号なんてお構いなしで、ジグザグと走行した。だが、ついに、ポルシェは追跡をあきらめた。二人は、フラフラになりながらも、人目につかない場所へ行き、鍵で錠を外した。自由な腕に一つずつ着いた赤い跡が、今までの過酷な状況を物語っていた。

「まいたのか？」

「そうらしいな。」

「これからどこに行くんだよ……オレのうちの場所を知ってたなら、戻れないし」

「ちようどいい場所がある。この近くだ。」用がなくなった手錠を、コナンのカバンに入れて、歩き出した。快斗もついていく。

その場所とは、蘭とオレの家が見渡せる、無人の借家だった。

作戦失敗ーバーボンの妙案（前書き）

バーボンのことですが、万が一に、私の考えが当たってしまふこともあるかも知れないので、読みたくない方はB a c kしてください
m) > < (m

作戦失敗―バーボンの妙案

先程、ヴァインの入ったポルシェの中――ジンのウォッカからは殺気だったものが感じられた。

「さてと、ウォッカ。追跡する素振りはいくらいいいんじゃないか？奴らは、俺が見失ったと思うただろう。ビートルの方を探せ」

ポルシェが、追いかけるのを止めた。ジンは、二人に目をこらしながら言った。

「ヴァイン、おまえにもう一回だけ、チャンスをやろ。失敗したらただじゃ置かない」

「わかった、次はバーボンの作戦だったか……」

「ああ、そのためにバーボンと呼んだ。失敗するとは思わなかったがな。あの探偵にとって、身近な人物が捕まるのが一番の苦痛だろうかな。本人を追いかけるより人質を取る方が早い」

「お人好しですからね、あの探偵は」前では、ビートルが次の角で止まるところだった。デパートでの事件のことを聞きに行くと予測出来た。道路の路肩に車を止めると、ヴァインを下ろした。彼は、目深に帽子をかぶって、歩き始めた。デパートの壁では、長身の男が携帯をいじっている。道路は見渡す限りひどい状態になっていて倒れたポストやそれにぶつかった車による交通渋滞が起きていた。こんな有様だから、もう信号なんて機能していない。楽々と、道を横切ると、その男と目があった。

「バーボン、シェリーはいたか」

「そこまでは分からない、でもこれを見れば勝手に近づいてくるは

ずさ」

デパートでは、標的が固まって中森警部に事情を聞いている。大阪の高校生などは、頭に血が上って怒鳴り散らしていた。騒ぎのせいで警官は益々増えて、FBIも駆けつけた。ヴァインはバーボンを離れ、標的が動き出すのを待って、じっと機会をうかがっていた。

*****ジョディ&哀

哀は、警部にけんか腰で話してる、平次を眺めた。あんな畏れに気づかないなんて……白馬君がいないとダメなようね。灰原はいつものように冷めた表情をしていると、ジョディがこう囁いた。

「ねえ、さつきから見張られてるのにきづいた？誰なのかは分からないのよ」

「そうね、江戸川君がいればよかったんだけど、あいにくアメリカに旅行中。頼りには出来ないわ。私が怪しいと思ってるのは、彼よ。」

哀は、さりげなく沖矢昴を示した。

「そんな……きつと思いきみだわ。私は彼が警戒してるようには見えないもの」ジョディが安心させるように言うと、灰原は、眉をひそめて、ジョディに背を向けた。ちょうど少年探偵団が、トイレに行くところだった。念のため着いていこうと、階段に向かったが、傍を通り過ぎた人物を見て気が変わった。灰原は、その男を追うことに決めた。コツツ、コツツ。静かな店外に足音が響く。

数分過ぎた後、男は突然立ち止まり、振り向いた。やっぱり……思った通り。灰原はその男を知っていた。

「赤井、秀一ね。何でここにいるのよ。あなたはFBIの一員なのに、お姉ちゃんを利用して組織に関係するために、恋人として、近づいたのよね!？」

静かな口調が乱れ、呼吸が荒くなった。この人が赤井秀一……

ほおに傷のある男は、申し訳なさそうにすると思いきや、にやりと笑った。低い笑い声が漏れる。なんなの……灰原は放心状態になった。

「クツクツクツ。俺がそんなに赤井秀一に見えるか? シェリー。まあ、そうだろうな。でも、アイツは死んだ。組織なんて知らないって言うんだったら、なぜ赤井を知ってるか、訊いてやってもいいか? まさか、子供の姿とは……」

灰原は唇をかみしめた。

「その名前で呼ばないで! 私はもう組織の人間じゃないわ!」
後ずさると、バーボンはその分距離をつめ、自分の顔に手をかけた。それは、特殊マスクだった。その下には、灰原の全く知らない、バーボンの素顔があった。

「姉の敵である赤井の変装をすれば、引つかかると分かっていたよ。だいたい、赤井は事故で死んだのに、キールと示し合わせて生き残ったなら、顔に傷がある方がおかしいんだ。アイツは失敗何かしない。キールはしってんだらあ?」

「そんな……」

なんて言う見当違い……嫌な笑い方をすると、バーボンはハンカチを持った手を伸ばしてきた。声を上げるまもなく、口がふさがれ、徐々に意識が薄れていった。バーボンは用意していた大きな力バンの中に、灰原を隠した。デパートの外には、前から用意されていた

トラックがある。その荷台まで運ぶと、カバンを開けて灰原をのせた。しばらく待つと、ヴェルモットが他の少年探偵団の団員を連れてきた。もちろん、カバンの中に隠してきたのだ。これで、四人揃った。あの探偵がこれを放っておけるわけがない……後は向こうから来てくれるのを待つだけ。トラックの荷台が閉められ、バーボンが運転席に乗った。さあ、奴はどう来るか、、？

かくして、集団誘拐は幕を閉じた。

作戦失敗―バーボンの妙案（後書き）

読んで下さった方は、この考え、どう思いますか???
あくまでも、推測なのであまり期待しないで下さい！

六月二十八日から、テスト期間なので、投稿遅れると思います！

て・お・く・れ・？

少年探偵団がいなくなったことを一番初めに口にしたのは、FBIのジヨディだった。別方向に行った哀も、見当たらない……灰原の疑っていた沖矢昴はまだ書店で本を読んでいるのが見える。灰原があんな事を言い出してから何となく意識してしまい、ここ数十分の間に、約二分ごとにそちらを見るのがくせになってしまっていた。今の今まで感じていた視線は、消えていた。あきらめて帰ったか……それとも。

ジヨディは喧嘩している二人に歩み寄っていった。

「だから、その時キッドはまだ屋上にいたはずやって！！何で探さなかったんや」

「いや、それは……わしの部下が階段から下りていったって話を聞いてー怒鳴りつけてから追いかけたからに決まっとるだろう！」
ただの逆ギレとしか思えない言葉をぶつけた。

「そやか。なんて名前や？大阪の新人だと思って名前も聞かんかったんやないか？」

図星らしく、目を泳がせる警部。

「ハハ、私は部下を100%信頼するからな、その、変装してないか事前にチェックしてあったし」

服部はため息をつくのが見えた。

「間違いない、そいつがキッドや」

ジヨディは、終わりそうもない討論に割って入った。警部がその隙にと逃げていこうとするのも、抑えて周りを警戒しながら言った。

気配を完全に消した組織の人間が潜んでいるかも知れない。そんな一員がいてもおかしくないのだ。

「ねえ、過去のことを責めるより、現実を見た方がいいんじゃない？ 哀ちゃんと少年探偵団戻ってこないわよ」

平次は、ガバツと後ろを振り返り、見える限りを探した。全て探し終わるのに時間はかからなかった。キッドの作戦とバスジャックのせいで、デパート内はがらんとしていた。私だつて信じたくないけど、見つからない。彼も、すぐ肩を落として向き直った。

「俺はなんてアホなことしたんや……は、早よ探さな」

彼は、警部と話していたのとは正反対の落ち込みようで呟いた。そう、早く探さないと。組織に先を越されてしまう。服部が蘭たちに唇を動かさず、声だけでそのことを伝えてる間にジョディは走り出していた。走っても無駄なような焦燥感に襲われながら、再び書店の方を見ると沖矢昴が初めて動き出した。

タツ、タツ、タツ、、、タツ、、、、

ジョディの足取りは、無意識の内に止まりその場に立ちつくしていた。彼、誰かに似てる……誰に似てるかは分かってる。ずっと、生きていてくれればいいと思っていたから。でも、そんなこと、あり得ない。

どこが似てるんだろう。特に似てると言える特徴はない。鋭い目元くらいだろうか。どこにいても、つきまとう雰囲気は唯一彼であることを象徴しているような……ばかね、FBIが直感だなんて言つてられないでしょ？ それでも、ジョディは追いかけるにはいられたかった。もし本当に秀一なら、組織を追跡するはず。もし、もしも私が探偵団を探さなくても秀一に見当はついてるのよ、きっと。追いかけたい気持ちをこまかすために、自分にそう言い訳をしながら

尾行を始めた。

それも秀一の方が尾行するのもなれてるし、それを見破る力があるのも承知の上だ。それでも、話しかけてこないのはどこかに案内したいからに違いない。秀一は、一つ向こうの曲がり角で曲がつて大型トラックの停車しているところまで歩いていった。彼は、背を向けたまま、いつもの低い無愛想な声で呟くように言った。

「ジョディ、なんで俺だと分かったんだ……危険だから連れてくるつもりはなかったのだが……」

皮肉な気持ちになりわらってしまった。

「じゃあ、これでわかったでしょ？？私は、あなたに危険から遠ざけられるほど、理由を調べようとして近づく女なのよ。FBIが組織を怖がってちゃ話にならないわ。なにがあったか、教えてくれるんでしょうね？」

「仕方のない奴だな、俺が心配してやってるのに」

「心配ご無用よ」

そういいながらも、ジョディの目は久しぶりに輝いていた。

「で、組織はどこなの？見つけたのよね。」

赤井は顎で大型トラックを示した。腰のホルダーから拳銃をぬく。

「ついてくるなと言っても、おまえがついてくるのは分かってる。どうせなら、出遅れないようについてこい。」

要するに、ついてこいという意味なのだ。今から、突撃するぞ、の方が短くて分かりやすいのに、どこまでもひねくれた人ね……それ

でも、懐かしい言い回しに微笑した。それからジョディも、気を引き締め、腰から拳銃を抜いた。

て・お・く・れ・？（後書き）

投稿遅れて済みません！まだ、テスト期間なので間が開くと思いますが、忘れないで下さい（笑）

お気に入り登録が増えてきたようでとても嬉しいです。感想などもあればヨロシクお願いします。

怒涛の逃走劇

そして、秀一は、大学院生眼鏡を外し、沖矢昴の仮面をはぎ取った。見慣れた懐かしい顔がそこにある。顔には、私がデパートや銀行強盗事件で見かけた傷もなく、悠々とした微笑をたたえていた。

「ねえ、秀。顔の傷はないの？私は、てっきりあの爆発事故の時、どうにかして生き残って、なんらかの方法で脱出したからだと確信してたんだけど……」

秀一は、片方の眉を呆れたように曲げ言った。

「どうにかして……なんらかの？随分曖昧な推論だな。FBIの一員を名乗るなら、もっと考えてから行動して欲しかったが」

「あなたが……あなたが何も言わないから悪いんでしょう！あなた本当に人の気持ちを分かって言ってるの！？」

ジヨディは拳を握っていい返した。だんだん声の大きくなってきた彼女を制し、大型トラックの方をみやった。

「まあ、そう怒るなよ。でもな、爆発した車の中にいたのかすり傷一つしかないなんて大間違いだからな。完璧にやり遂げ、傷一つ無いか、失敗して……何がいいかわかるな。その二つのどちらかだ。」

「じゃ、説明してよ」

「おっと、忘れちゃ困るぜ。後でって言っただろ。今は時間が無い」

「次行方不明になったら、一生許さないから」

ジョディは、秀一を睨み付けると足を一步踏み出し、ほの暗い路地の壁添いに動きだした。トラックの戸が開いた。

……秀一……秀一がこっちにも。顔に傷もある。やっと何がいいいかわかった。偽物だったのね。となると、あの灰原って女の子も騙されて…

「ヴェルモット！遅いぞ！」

「あなたは茶髪の子1人で私は、三人なのよ。逆の立場だったら、私が怠けてなかったって分かるでしょうに」

そういうと、車のトランクに乗り込んだ。ジョディが拳銃を構える。またもや、秀一が止めた。

「待て。子供に当たったらどうする」

「じゃあ、どうすればいいのよ！」

「こうしたら、いいだろ」

秀一は、カチャと軽い音を立てて銃口を下に向けると、車のタイヤを狙って撃った。銃声が、路地にこだました。あっけなく決着がついた……と思った矢先車が発進した。バーボンが窓ガラス越しに秀を見つけた。

「赤井……秀一だと？」

どうしよう。弾が外れたのかしら、いや秀一に限ってそんなのあり

えない。

「あのタイヤの素材を知りたいものだな。組織のタイヤとあって、強力だ」

「何感心してんのよ。追いかけなきゃ」

ジヨディが慌てるのも意に介さず、秀一も近くに停車された車に乗った。彼女も、助手席に座る。

「荒っぽい運転になるようだ。捕まってる」

思い切りアクセルを踏み込んだ。車が、うなり声を放ち、速度を上げた。逃走に不便な大型トラック。有利な、秀一の小型車が前方の車を追い抜く。疾風が耳元を駆け抜け、轟音だけが聞えた。悲鳴をあげたくなるほどの急カーブ。すぐに道が真っ直ぐになった反動で肩をぶつける。バーボンが自棄になったのか、車の狭すぎる隙間に突っ込んだ。クラッシュする耳障りな音の後に、持ち直して十字路を右折したのがわかった。目前には、ぶつかった車体の峰。背後からの車はない。

秀一は、バックで勢いを付けると、人気の無い歩道をガードレールを曲げながら強行突破した。道路に戻るとなんと三叉路を直進。ジヨディが注意する声も風がさえぎる。秀一は、すでに速度オーバーで走っている車のハンドルから、片手を放して、背中の銃を横に突き出した。一瞬、それだけ見て引き金を引いた。

その銃弾は、し字を描いて離れる二台の間を（？）突っ切り、意志があるかのように運転席のサイドミラーに当たった。破片が散らばった。

「秀！なんでサイドミラーを狙うのよ。もう追い付けないわよ」

遠くのトラックにキールのバイクが近寄っていた。キールは、トラックになにか設置しスピードを落としてそこから離れた。

「バーボンはキールがいるのを知らないの…」

「ああ。サイドミラーを撃ったから見えなかった。あれは発信機さ。オレが>死んだく後なら、いくらでも連絡が取れたから、これくらい予測していた。奴らも、自分の命がかかってるから、必死で逃げ切るだろうと」

「ちょっと！意味がわからないわ」

「とにかく、キールには今日限りで無断で組織を抜けてもらう。オレを見つけたとなれば、彼女も危ないだろうから。逃げてしまえばこっちのもんだ。」

キールのバイクの影が徐々に大きくなった。秀も車を止めた。改めてジョディは二人を見つめて、混乱した表情を浮かべた。

「あなた達何を隠してたのよ」

そして、ため息を吐いた。

怒涛の逃走劇（後書き）

ピアノです

久しぶりの投稿ですみません。

テスト期間やつとおわりました。それでも、こまめに登校できるかは分かりませんが、、

次話の内容ですが、私の単なる想像ですので、話半分に読んでください！！

爆発事件の真相（前書き）

当たっていることもあるので、謎解きはテレビ、漫画で見たいという方は、Backして下さいm（――）m

爆発事件の真相

秀とジョディは、車から降りた。ここまでの状況を説明すると、キールがバイクから転倒した事故で意識不明になるところが事の発端だ。意識の戻らないキールをFBIが、病院でかくまう。それからコナンが部屋に誰もいなくなったときにキールが身動きをしている証拠を見つけ、意識のあることを発見する。やがて、病院内に組織の一員がいると分かり、FBIは、みずなしレナの病院を移動する計画を立てる。ところが、コナンと秀一は、みずなしレナ（「キール」を組織に戻る計画を立てていた。レナが運転手を殴り、気絶させて逃げ出したという演技をさせた。あまりにも簡単にキールを奪還出来たことを不審に思ったジンが、あの方の命令だ、とFBIの首謀者である赤井秀一の抹殺を命じる……キールは、承諾し、車でライハ峠にやってきた赤井に銃を向ける。弾は、肺と頭に当たり、赤井に悟られないようにモニタ越しからの映像を見ていたジンも満足する。最後にキールは、赤井の乗る車に、爆弾を仕掛け、その場から立ち去った。

という経緯である。

一つ深呼吸をして、物知りたげにする彼女の目を真っ直ぐ見据え、口を開いた。ついに爆発事件の全貌を語り出したのだ。まず、彼とキールは、ジョディに爆発事件で何が起こったかを説明した。ジョディは、青ざめたが口は挟まなかった。次は、その前のキール移動作戦での赤井の考え……

「FBIが総動員で、みずなしレナを他の病院に移そうとしたとき、

俺とあの眼鏡の坊やは、キールを組織に返してスパイさせる計画を立ててたのは知ってるよな？キールを組織に返すにはFBIが返すわけにはいかないだろう。となると、彼女が自分で逃げなければいけない。組織から見たら、何もしなくてもキールが脱却できたのだから、呆気ないもんだろう。」

そして、キールが続けた。

「そう、事故から何日もたって、意識から戻ってたら、赤井秀一が疑うに決まってるわ。それなのに、移動作戦の時、キールが乗ってる車を運転手と二人きりにした。その結果、キールは易々と奪還された。組織には、こう見えてるのよ。上手くいきすぎて、赤井の策に違いないってね。」

「じゃあ……」

赤井が、頷いた。

「俺は、それを見越して首謀者である『赤井暗殺計画』を思いつくように、し向けたんだ。わざと、キールにスパイであるかのように怪しい行動をしてもらって。」

怪しい行動というのは、キールの、「はい……この仕事は精神的にもう……降りたいんです」と言う電話のことだ。

「あなたの、『暗殺事件』が示し合わされたものだったのは分かったわ。でも、頭を打たれて、乗ってた車を爆破されて、どうやって生き残ったのよ」

赤井は、キールに目配せをした。彼女は、その計画に使われた拳銃を懷から取り出した。

「まず、ひとつ目の質問から答えていくわね。」

彼女は、その拳銃を構えた。その先を、地面に向けて、発砲した。バーン！、と銃声が聞こえた。

すると、目の前の地面が、真っ赤に染まったのだ。それは、撃てば弾丸から真っ赤な塗料の吹き出す、偽物だった。＞その証拠に原作ではキールが、肺を貫通したといったたはずの弾丸が、赤井に跳ね返って地面に落ちていましたく

「この銃が偽物……」

「ええ。彼には演技をしてもらったわ。打たれて、倒れる偽装工作を。」

「でも、何でそんなの持つてるのよ。まさかCIAに組織のスパイになれ、と命令されたときから予想してたなんて言わないでしょうね」

「ええ、CIAに持たされていたのよ」

ジョディの動きが止まった。

「前にも言ったと思うけど、私のCIAとしての任務は、組織に新しい一員のつなぎ役を紹介するため。それが終わったら私は、事故がで死んだと見せかけて、組織を脱出する手はずだったの。その際、使うつもりの銃を赤井に向けたのよ」

不敵な笑みを浮かべて言い切った。キールに打たれたときの、赤井との会話はこうである。

「まさか、ここまで（上手くいく）とはな」
「本当、驚いたわ」

つまり、この言葉で成功したことを話していたのだ。あの暗闇の中で、赤井の黒い服にニット帽、その上モニタ越しに、服に付いたのが血か赤い塗料かなんて判別できない。キールは、組織が、赤井を抹殺を命じたときにも銃を渡されたが、彼らはモニタから観察するために、キールのそばを離れた。カメラと盗聴器は彼女の首に装着しており、銃をすり替える隙は十分にあった。もちろん、ライハ峠に行くとき、ジョディを呼ばなかったのは、彼女がいると成功しない作戦だったから。

「でも、爆発のことはどうなの？」

「それは、簡単だ。キールと組織の連中が、ライハ峠を離れた後、爆発までに時間は三十秒ほどあった。俺は意識があったからそのまま外に逃げたさ。」

それを聞いて、ジョディが反論した。

「そんなはずないわ！だって車内から見つかった焼死体と、あなたの指紋が一致したのよ？他人だったら、不可能だわ！車にいたのは誰だって言うのよ」

FBIはシボレーの中の焼死体と、赤井の指紋が同じものだと確認していた。赤井は、一度コナンの携帯に触っている。コナンの携帯に付着した指紋と照合したのだ。高木刑事の報告によれば、そういつてたはずだ。

「携帯から出た指紋は、間違いなくあなたのものだわ！」

「なんでそう言えるのかな？」

「え？」

「もう一人いるだろう。以前あの坊やの携帯に触ったことがあって、ライ八峠の事件の前日に追い詰められて拳銃自殺した組織の一員」

――

楠田陸道だ――と、言い放った。

コナンは、病院に紛れ込んだ組織の一員を割り出すために、携帯を使ってそれを拾わせることで、調査していたのだ。コナンの携帯に楠田陸道の指紋も付着している。そして、彼は組織の一員だとFBIにばれて、拳銃自殺した。遺体を警察に引き取らせれば組織のことを説明せざるを得ない。おそらく、彼はFBIが極秘に引き取っているのだ。その遺体を比較的安全に、警察に引き取らせるためにも必要だったこの計画。組織は、爆発事件の前日に米花中央病院のFBIを爆弾騒ぎで、混乱させようと企んでいた。キールが、確実に信頼できるように、とジンに話して、爆弾を付けるも可能だった。その結果、赤井の死を偽装し、車内の焼死体の素顔を隠す事ができた。

二つの指紋が一致したのはいわば当然だったのだ――

爆発事件の真相（後書き）

楠田陸道のことはあつてゐる気がします！

彼が携帯に触つたのもそんなに前じゃない……はずです。

ちなみに、キールに打たれたときに、赤井の口から出た血も、偽物だと思ひます。家族でお台場に行ったときに、手品用のコーナーがあつて、面白そう……みてたら、ドラキュラの挿絵で、パーティーの余興で口から血が出たように見せかけられるのが、実際売つてました！

コナンの舞台は東京ですし可能じゃないでしょうか……（たぶんそれは関係ないです）

赤井がキールと示し合わせていたと思つたのは、>赤と白のクラッシュ、嫌疑くでキャメル捜査官が容疑者だと疑われた話で、その時赤井は部屋にいたのに、次話では、急に車に乗つたので、キールの電話を受けたので、計画のことを知つて、準備してたのかも……と考へたからです。

楠田陸道が亡くなつた次の日に、ジョディが秀一に寝不足だったんじゃないの？と聞いているので、その日にコナンと何か相談したり、楠田陸道を移動してたのかもしれない……あくまで推測なので間違つてゐる可能性大です！

ビデオを見ないと確認できないと思いますが、もし興味を持っていただけなら、497話からを参照してください！

これだと、ここが矛盾している！と言ふ意見や感想もお持ちしています

訂正していききたいと思いますので……

***7月19日

原作で矛盾を見つけたのでその内訂正します……

その頃……

そして……手錠から自由になった新一と快斗は、ある空き家の前にいた。実はこの家は、新一の両親が住んでいたことのある場所だった。彼らがアメリカから帰ってきたときに、息子の新一の様子を見に来るために、わざわざ老夫婦に変装してここから、探偵事務所を覗いていたのだ。でも、一週間ほどでコナンにばれてアメリカに帰ったせいで、今では空き家になっている。家の敷居をまたぐと、靴を棚にしまう。棚の上の埃は、長いこと誰も入らなかったを示していた。少し急な階段を上り、二階へ行った。

「よくこんなぴったりの場所を見つけたなあ。ここからだと、探偵事務所に何かあってもすぐに分かるしよ」

「ちょっと思い出があつてな。まあ、母さんと父さんのくだらねえ悪ふざけだけど」

「オメーの母さん女優なんだつてな。父さんは推理小説作家。天才の血を継いだサラブレッドって訳だ。」

新一が嫌な顔をして、大儀そうに答えた。

「そういう言い方をするなよ。事件解決だつて父さんの力をなるべく借りないようにしてやってきたし、馬鹿にされたような気分になるだろ？」

「……そうか？」

「両親が、有名だから俺も有名が当然で、努力も血筋のせいって言われんの、つまんなくないか？」

「素直に褒めてんのに、ひねくれた奴だなー。まあ、そんなつもりじゃねーから安心しろ」

快斗は、新一の文句を聞き流し、フローリングの部屋に入った。軽くのびをしてソファに座る。新一は、また不愉快な顔をしたが、黙って床に座った。

「そういえば、オメーの父さんも普通の父さんじゃないんだろ？」
「え？」

「だって、父さんのことだから、部屋に落とし穴が仕掛けてあってもおかしくないってことは、よっぽど、その……」

「個性的……か？」
「そうそう、なんの仕事してんだよ」

快斗は一瞬迷ったが、少し胸を反らし、誇らしげにしていた。

「オレの父さんは、有名なマジシャンさ。マジシャンの中では、尊敬されて俺もすごいとは思ってるけど、同時に越えなきゃいけない敵でもあるんだぜ。まあ、俺が抜かす前に事故で死んじゃったんだけどな……」

うわずっていた声は、だんだん小さくなっていった。新一は、彼を上目使いに見ると、先を受けていった。

「そんで、オメーは本当に事故かどうか疑ってるわけだ」
彼は、ギクツとして恐ろしげに、引きつった笑みを浮かべると、目を細めた。

「まったく、油断もできない。口調で判断しやがったな。そうだよ、事故じゃない。寺井が、言ってたんだ。それを初めて知って、犯人を捕まえるためにも、父さんが泥棒をしてた理由を突き止めることに決めた」

新一は、口の端を曲げて訊いた。

「それで、話したいことは全部か」

「ああ。協力する気になったか？」

快斗は、答えも待たずポケットから宝石のかけらを出した。父さんが言うにはこれに何かヒントがあるらしい、と独り言を言った。「そのかけら合わせてみるよ」新一が横から提案した。

息を吞んで、米花劇場とハイドパーティの宝石を合わせた。

その途端、青と赤のホーブダイヤモンドは、中で煙が渦巻いているかのような黒に変色した。思わず、宝石をとりおとす快斗。そして、宝石の呪いも解けたみたいに、不気味な印象もなくなった。

「新一、黒くて危険なもの……なんでもいい、物でも集団でも。思い当たらないか？」

新一は、また黒か……と苦笑した。

「組織なら、知ってる。協力するしか、なさそうだ」

その目に挑戦的な光をともし、力強く宣言したのだった。

その頃……（後書き）

原作で矛盾に気づいてしまったのですが、皆さんも考えて下さいM

（――）M

爆発事件のことで、

キールが赤井を撃った〓赤井はキールの仲間じゃない事の証明になる
ということですよ？

でも、

赤井は、キールの高飛びを手助けする代わりに情報提供すると言われ、呼び出された〓キールは赤井の電話番号も知っていて面識もあり、仲間。

になるのに、なんでジンは納得したんでしょうか……

キールは、意識があっても、FBIの前では昏睡状態のふりをしてたはず……

この計画は、（キールが赤井を呼び出せる）というのが前提で行われてます。〓ジンは彼女がFBIと面識があると知って知らないふりをしている（？）

ジンは、FBIの情報を知らうとしているのか、ただ赤井をたおしたかった為に利用したのかです。

作者の間違いでしょうか……だいぶおかしな所に目を付けたんですが、推理小説大好き人間なのでご了承下さい（笑）

秘宝・悲報

怪盗と探偵のいる家では、しばらく沈黙が続いていた。新一もこれまでのことを話して、お互いの目的が同じだということを確認し合ったまでではいいが、相手は証拠も隙も見せない組織の人間。その組織の予想を裏切る戦略が思い浮かばない。窓の外を、鳩が飛んでいた。バサバサとやたら大きく音が響く。三羽、四羽……八羽……

「うるさい！快斗、おまえの鳩どうにかしてくれよ。」

快斗もかみつくようにして答えた。

「しゃーねーだろ！俺がいる限りついてくるんだから……嫌なら俺を追い出すんだな」

新一は、にらみ返して、また静かになった。

組織か……とうとう終わるんだな。こっちが負けて相手が闇の世界にのさばることになるのか、勝って奴らを冷たい監獄に入れてやるのか。中途半端なところで追跡を止めたポルシェ356Aが思い起こされた。なんでアイツら簡単に引き返したんだろう……

「快斗！ー！」

新一は、ガバツと体を起こし、掴みかからんばかりによんだ。

「うわっ！なんだよ。急に大声出して」

「組織のポルシェを振り切ったとき、おまえの場所から車が見えたか！？」

しばらく快斗の目が空を漂い、たいしたことなさそうに言った。

「見えたけど、少しだけだぜ。相手がみてたなんてわからねーし」

「携帯……携帯返せ！」

新一の剣幕に押されて、快斗は黙って携帯を差し出した。携帯が震えるほどの勢いで、番号を打ち込み、耳に当てた。三十秒ほどコールすると、応答があった。新一はつかの間、気が抜けた表情をした。

「もしもし、新一！？今どこよ」電話に出たのは蘭だった。底無しの穴に落ちていくような不安を感じた。慎重に言葉を選ぶ。

「……蘭？これ、灰原の携帯……だろ??」

二人は、携帯越しに居心地の悪い沈黙を共有していた。何が起こったかは口に出さなくても分かるくらい明白だった。組織の真の目的を悟れず、踊らされていたのだ。

「そうか……」

「落ちてたカバンからコールが聞こえたの。ゴメン……私がしつかりしてなかったから……少年探偵団も」

頭が真っ白になった。灰原が捕まった。彼女が一番警戒していたはずなのに……蘭のせいじゃない、オレの不注意だ。守ってやるって言ったのに

「新一？聞してる？」

「ああ、じゃあな」

ちよっと！——新一は携帯の電源を切った。心の中に脱力感が広がっていた。快斗が、静かに咳払いした。嘘はつくなよ、と。新一は、頬杖をつき、動揺を押し隠しながら、のんびりと説明を始めた。

「灰原と少年探偵団が、誘拐、されたらしい。たぶん組織は俺を脅してると思う。探しに来なければ恐れていた事が起こると。奴らが、

オレの存在に気づく前から、灰原も俺もそう脅されてたようなものだからな。単なる脅しじゃないのは、分かるだろう？」

感情の読み取れない抑揚のない声で続けた。

「これは、俺と組織の最後の戦いだ。延長戦は、ない。オメー、今なら抜けても組織から目を付けられることはねえぜ」

パンツと音がして、快斗は、どこから出てきたのか派手なクラッカーを持っていた。新一は、冷静にそれを見つめていた。快斗は、状況にそぐわない明るさで言い切った。

「なにアホなこといつてんだよ。オメーが感情を殺してるときは、感情が溢れてる時しかねーんだよ。その心理状態で組織を倒すなんて言うんなら見てみたいね」

新一は、テーブルを拳で叩いた。花瓶の水がはねた。

「嫌みかよ、こっちは真剣なんだ。真面目にしろ」

「おー、こわ。助けてやるってのに」

テーブルの上で指をイライラと動かした。

「どうなっても、しらねえよ？」

「望むところだ。こっちが同じ質問をしようとしてたぐらいだ」

クラッカーから出てきた、手品用の杖で頭を叩かれ、新一は顔をしかめた。

「それに、アホ子に怪盗キッドのネタバレしねーとな」

快斗は、ウィンクした。

「新一の話でアイデアも浮かんだし、今日はお開きだ。まだ起きて

てもいいけど、おまえが今考えても無駄だと見た！」

快斗はおどけて部屋から出て行った。

軽く舌打ちして、ソファーにもたれた。快斗も俺を励ますために無理してるのは見え透いた事だが、ほつつといて欲しい。組織だの、策略だの、うんざりだ。

そこまで考えてから、思い直した。俺は自暴自棄になってんのかもな……とりあえず、休むとするか。

その心理状態で組織を倒すなんて無理だね……快斗がぶつきらばうに言ったことが頭にこびりついていた。

決別

朝がきて……日がてっぺんに位置する昼間ごろ、二人の高校生が家から出てきた。どうやら、一人が出ていって、もう一人は見送りらしい。

「それじゃあな！」

「おう、また向こうでな」

二人――新一と快斗は、しっかりと目を合わせて、まだ手錠跡の残る腕を挙げ、別れた。実は、新一は、快斗と一緒に戦うのを承諾した。昨日はあれだけ、拒絶した彼が頷いた理由は、組織撲滅作戦の精密さにあった。手先の器用な快斗がいないとできない作戦。新一は、秘密保持のため読者の皆さんにも伏せておくようだ。ただし、一緒にといっても、団体行動ではなく、新一が先に敵地に踏みいり、快斗は、後からだ。彼には、まだやるべきことが残っている。組織が勝って一生元の生活に戻れなくなることも覚悟した上で、闘うのだから心残りがあつてはいけない。

「失敗は許されない……か。」

快斗は、手に握った携帯電話を見つめ呟いた。おそらく今頃青子は、学校だろう。俺が2日も続けて休んだことを心配しているか、いつものことだと素知らぬふりを決め込んでいるか。どちらの様子も目に浮かぶくらい容易に想像できた。俺はこんなに青子の表情を見ていたんだという自覚に、立ちくらみがした。

そつと通話ボタンに指をのせた。後は少し力を入れるだけ……目をこめて指を動かし、かすかなボタンのへこみを感じた。

……ルルルルル

携帯が汗で滑らないように、手のひらを拭った。

「……はい。もしもし？快斗なの？昨日から何やってんのよ、担任の先生、二日も無断欠席だ！ってかんかんだったわよ。」

「……………」

「それから昨日の約束破り忘れてないわよね？」

「俺はそれとは別の約束破りを謝ろうとおもったところさ。お前、怪盗キッドは嫌いか？」

「あはは…当然でしょ。今日のキッドの新聞読んだ？青子のことを気に入ったかなんだかしらないけど、本気で逮捕しようとした私に情けをかけようなんて、バカにしてるわね」

明るい笑い声に聞こえるのに、どこか冷たく響く。つんけんとした口調に報いて、快斗も小声で訊いた。

「じゃあ、俺のことも嫌いなのか？」

「えっ……何でそうなるのよ…別に青子は…嫌いって訳じゃ…」

受話器の向こうで動揺しているのがわかった。早く電話を済ましてしまいたいが、動くのは口ばかりで声が出ない。

「快斗？」

「俺が…いとう」

歯切れが悪く、上手く舌が回らなかった。軽く息を吸って、正確に言い直した。

「俺が、その青子の嫌ってる怪盗キッドだぜ」

「はは……何の例えかしら。抜け駆けしたのを謝ってるつもり……」

青子は、言葉尻をばかしてこちらの反応を伺っている。俺ははっきり否定しなければならない。

「いや、文字どおり素直に解釈してほしい。伝えられる最後のチャンスかも……だから冗談抜きで言ってるのは分かってくれ」

最期の、チャンス？

がたん！と受話器から音が届いた。声が遠ざかったから、携帯を落としたんだろう。

「快斗の馬鹿あ！！」

最後に聞こえたのは、青子が教室を走りぬけ、ドアが閉まる、無情な離別を告げる物音だった。

急に静まり返った室内で、携帯は誰かに拾われた。

「もしもし。私、紅子よ。青子ちゃん、出ていっちゃったわ。私はあなたを探しに行ったと思うけど……とうとう何もかも話したのね。よっぽど理由があったのは察せられるわ。でも、気を付けるのね」

紅子が即座に通話を切った。そうでもない、俺からは切れずにずっと座り込んでいたかもしれない。紅子に感謝して、怠惰そうに腕時計を見た。時間にはまだまだ余裕があった。新一が、上手く切り抜けているのを祈って、刻々と時間が近づくのを待っていた。

運命の交差するプロローグ

5月5日、決戦の日。

何も聞いてない蘭や平次、和葉達は、必死で行方不明の少年探偵団の行方を搜索していた。特に原因を知ってる服部平次は、罪悪感に溺れる新一を想像して、死なせる訳にはいかないと休みもせずに探し続けていた。組織がどこへいったか、組織の内部事情、アジトの位置すらわからない状態でがむしやらに探して見つかるなんて、奇跡に近い。でも、何かしないと気が済まなかった。彼らは、ハイドデパートの周囲500メートル以内をくまなく見回っているところだ。

「手がかり、手がかり……頼む！後生やから何か見つかってくれ」
誰にいうでもなく、同じ言葉を繰り返し、繰り返し、呪文のように唱えていた。いかなる事件にも挑戦的かつ思い切った行動で、解決してきた服部が、手探り状態で新一も不在、探偵団は誘拐されて……こんな前代未聞の大事に、誰もが行く末に危険と恐怖と、第六感が告げる、この誘拐犯は残忍でいつもと違う、といった不安に押しつぶされそうだった。蘭は心を決めて、服部に近づいて、肩をたたいた。一瞬、間が合って、追及されるのを恐れた表情で振り返った。

「なんや？毛利の姉ちゃん」

「服部くんさ、何も教えてくれないけど、おかしいよね。この事件」

服部は、うつ、と息を詰めて目が泳いでもばれないように、若干そらしながら唇の端をあげた笑みを作った。

「な」にいうてんねや。俺はあの工藤新一と、西の服部東の工藤と

並び称された探偵やで？ ぼちぼち場所に見当も…… ついたころやし」
新一の名前を出して信憑性を高めようと謀った服部だったが、その思惑は蘭の小さな笑い声一つで脆く、あっけなく破られた。

「フフフ…… その新一も、この事件にはてこずってたんだっけ？ 服部くん推理はできても、嘘は下手ねえ。私だって、毎回新一の推理をボーツと聴いてるんじゃないのよ。」

蘭は、ほっと一息ついてあの、探偵が推理をぶつけるときの狡猾さで話を切り出した。

「私が変わだと思ったのは3つ…… あいつの探偵病がうつったのかしらね…… とにかく、一つ目は誘拐のことよ」

彼女の口調は、まさに決死の戦いに向かおうとしている探偵のものだった。そう、ここにいるのは――組織から見れば――少なからず探偵と事件に関わりを持った共犯者。彼らの警戒する通り、情報に知識、洞察力も持ち合わせたメンバーだった。

「一般的に誘拐の目的とされる身代金の要求とか、脅迫電話がない。犯人の意図があやふやなのよ」

「……」

服部は口をつぐんで、壁を睨んでいた。蘭は、口を割ろうとしない彼に、畳み掛けるように、人差し指と中指を立てた。そろそろ真実が知りたい、彼女は一步も譲らなかつた。

「第二に、誘拐手順。哀ちゃんがさらわれた場所は私たちから近かったの。犯人は、目立たないバッグなんか隠したはず。いくら悪

人でも小さな女の子に、平気でそんな真似できる？ 私達が、探偵団がトイレにいつて帰ってくるのが遅すぎると思い始めた頃だから、せいぜい十分。哀ちゃんの様子を見に行ったのはそれより後ってことは、犯人には時間は5分だけ。全く躊躇しなかったのね」

部屋中に背筋の凍る冷気が立ちこめた。当然、異変には気付いていたのを、蘭がはつきり言葉にしまった。そしてまだやめる気配は……

「三つ目に……」

「待った！ もう、ええで」

服部が手をかざして、蘭の正論と凍り付く空気を両方制止した。今度は服部の目が、鋭く光った眼光を取り戻し、同時にそれは仲間全員を巻き込んだ死闘が始まることを暗示していた。

「三つ目は、工藤や。あんたが、通話切られてすぐに掛けなおしたのに、留守番電話。あいつは掛けなおすのを望んでない。電源を入れるまで二度と掛けてくるな、うちゅうことや」

蘭はかすかに頷いて、我慢していた涙を溢れさせた。んなこと、自分にだってわかつとったわ……けど……

「新一の事件……なんだよね？」

「まあ、俺もかかわっとるけど、あいつの事件や。工藤は来るなっていうと思うで」

「次言われたら、回し蹴りで黙らせてやるわよ。仲間外れにするなんて」

「そやか・・・？」

少し空気が和んだ合間に、玲香が蘭のもとにやってきて、素早く囁いた。――私、彼の正体分かるけど、今言ってほしい？それとも、本人から直接説明してもらおう？――ためらったが、好奇心より新しい誠実さを試したい気持ち勝ち勝った。蘭は自分が後者を選ぶのを他人事のように聞いていた。

玲香は、まだ追跡眼鏡があるのを覚えていた。

一步、また一步、危険へ

服部もまた、新一達と同様に組織破壊の策略を練っていた。彼も新一も同じ事で悩んだが、どちらの方がアイデアを探るのが難しいと言える、服部だろう。なんてったって、新一の作戦を邪魔してはいけないのだから。組織と戦いに行くからには、当然新一にも作戦がある。自分達の行動でそれをぶちこわすことになっただら大変だ。「どないしよう。何も思いつかへん……」

ひとしきり頭をかきむしった後、彼は、息抜きしようとハイドデパートから東京の繁華街へと出た。真つ昼間からまばゆいイルミネーションが灯っている。ったく、電気の無駄遣いやわ！朝から神経質な服部は舌打ちをして、自動扉を通った。

そしてそこには、正反対の顔色をした仲間がそれぞれに、ひっそり行動していた。まさに、嵐の前の静けさという言葉がぴったりの光景だった。まず和葉は、デパートの隣の本屋で看板にもたれて、コナンの眼鏡をいじっていた。園子は、淋しそうに京極さんと電話していたし、蘭の姿は見当たらなかった。

彼は、和葉に近寄ると、眼鏡を取り返して、探偵バッジのありかの表示に切り替えた。四つの点が一ヶ所に偏在していて、残りの一点は、周辺をうろつる動いていた。・の集合している場所は、ハイドデパートから程近いテレビ局。毛利家に迎う際必ず通る道にあることで、服部も、すぐに鉄筋コンクリートの三階建てを思い出した。探偵眼鏡には標高までは載らないため、どのフロアにいるのかは読み取れない。

土地の面積の狭い東京には、ビルとビルの間隙間は、数十センチだ。そのわずかな間に、窓がある建物は、少ない。隣のビルからはもちろん、窓を破って浸入できない東京の町並みは、人質を隠すのもってこいだ。皮肉に笑いながら、和葉をふりかえると、彼女は

再びレンズを見て呟いた。

「テレビ局……ここから10分とかからないとこやね」

服部は、言いたいことを察して空を仰いだ。

「まるでオレらをおびき寄せようとしとるみたいやつちゅうことか」

和葉の表情をうかがってから、話を続けた。

「裏を返せば……オレらにもそうやって考えることは容易にできるわけやな。自分らにわかるような挑発奴らに価値があるかどうか……」

「もう！まどろっこしいなあ！じゃあ、なんでわざわざ、人の行き来の多いテレビ局をえらんだんよ。」

服部は数秒考えてから、結論をまとめた。

「メリットは心理的な面と物理的な面の2つ。和葉、テレビ局に必要な物はなんや？」

「うーん。やっぱり地デジやるか」

服部が呆れた顔をするので、慌てて候補をあげつらねた。

「ええと、まずテレビに、芸能人、ディレクター、カメラ……」

「ハァー、和葉。今自分のいうた物で引つ掛かるもんあらへんのか？監視カメラや！至る所に設置されたカメラで、自然にテレビ局全体を見張れる絶好の場所だ。」

和葉がムツとして反論した。

「だって、その組織つちゅうのは、盗聴なんて何回もした経験あるやろ？今ごろ自然になんて……」

服部は、この意見は沈黙で受け流した。組織の内部事情には短時間

では説明しきれないものがある。あの有名な女優とアナウンサー、シャロンとみずなしレナが組織の内部にいるなんて、一時間足らずの説明で信じられるわけないだろう。要するに、テレビ局に顔のきく二人なら、知り合いだといって組織の仲間を潜入させやすい。そして…

「あともう一つ！テレビ局の壁は防音で、中で誰かが叫ぼうが、銃声になろうが音は聞こえない、やろ？」

服部は、これで話は終わりとばかりに、和葉のそばを離れた。彼が言わなかった、場所選択の心理的メリットは彼にも脅しをかけるものだったのだ。「おまえらが必死で探し続けていたものが今は、近くにある。失敗を恐れて逃げ出すのか？そこまで腰抜けどもの集まりだったのだな」

正直、身震いがした。無言のまま、人の心にこれほどまで圧力をかけられるものなのか。奴らは人間じゃない……悪魔のような魂だった。何もかもめちゃくちやにさせてたまるかい！

服部は、軽く目を閉じると、まぶたの裏にはびこる組織の仲間の残像を追い払い、しゃんとして目を開いた。こんな会話でも、手がかりになることがあった。まずは、監視カメラに見つからず建物に侵入するすべを探るのだ。それすら、解法が完成しつつあった。

考えてもしゃあないやろ？

そして、コナンの眼鏡を持って前方に見つけた、蘭の後ろ姿を追いつけた。

「毛利の姉ちゃん！工藤がキッドかはしらんけど、あいつらもテレビ局にむかつとるんや！ほれ、見てみ？」

蘭は一瞬不思議そうに首を傾げのだが、レンズを見るなり目を輝かせた。

「これ、発信機？」

「せや！こんで、追跡できる」

蘭が嬉しそうな顔を見るうち、だんだん成功するような気がした。
工藤、無茶すんなよ。まっとする者があるんやから。

服部は、眼鏡を蘭に渡してその場に背を向けた。

一歩、また一歩、危険へ（後書き）

永らく投稿しなくて、本当にすみません！

宿題が大変で大変で（涙

それはそうと、この小説もとうとうクライマックスです。ここまで読んでくださり、ありがとうございます。前の章で解決してない謎は、順を追って明らかにするのでもう少し待ってください！汗

夏休みも残りわずかですが、なるべく涼しく過ごしたいと思っています。
（笑）

レジスタンスのご到着

米花町三丁目の最北端、ちょうどハイド町との境目に問題のテレビ局はあった。高層ビルの連なりから外れた場所にあるその建物の周囲は、だいたい同じ高さのマンションや店が並んでいる。左隣はアパート、右隣はコーヒーショップといった具合だ。歩いて10分。たいてい時間はかからないはずだったのに。服部が腕時計を見ると20分もかけてやっと建物の外観がみえるところまで来ていた。

やれやれ。吹っ切れたつもりが、無意識のうちに敬遠したくなる気持ちしがはたらいたらしい。後ろからついてきたのに、注意しなかった和葉たちにもやはり恐怖感はずきまどっているようだ。

「自分らなんちゅう顔しとんのや。行く前から葬式に出席するような空気じゃ後がもたんで？」

緊張を解こうと、大阪人お得意の明るさで話し掛けた。ちらつと蘭をみると、目が合う。その刹那、服部は失言をいったことを思い知ることになった。

「新一は、大丈夫なのかな。私、新一がいなくなったらどうしたらいいか……想像もできないのよ」

どうやら葬式という言葉に反応してしまった様子なのだ。

「いや、それはもう！全然、大丈夫やで姉ちゃん！その〴〵冗談やって」

服部は、先ほど嘘を見破られたばかりなのを思い出して、狼狽を隠すつもりで先へ歩きだした。後ろから和葉の声が飛んできて、申し訳ない思いでいっぱいだ。

「平次！頭おかしくなっただんとちゃう？寒々しい冗談やめてや！」

平次は、まわりの状況を顧みなかったことを後悔した。みんな、一人残らずぴりぴりしているのだ。自分とはかく、正体不明の敵に立ち向かおうとしている彼女らならなおのこと。まるで頼みの綱となる細い糸が、両側からプレッシャーをうけてピンとはっているのをはらはらして眺めてる気分。

「蘭ちゃん、今から援助しにいくんやで大丈夫やに」「そうよ。彼は優秀な探偵なんでしょ？そんなにやわじゃないはずよ」

服部はそんな会話を背後に、神経質に安全確認をせずにはいらなかった。テレビ局手前の角で右折し、何気なく壁にもたれて、携帯を開いた。起動したのはカメラの撮影画面。携帯のカメラ機能には、内側にカメラがついていて、顔写真をとれるものがある。

彼は携帯の角度を変えて、曲がり角から顔を出さずにとりの人影を確認した。見えても腕と、携帯画面の反射ぐらいだろう。幸いポルシェの姿も狡猾で黒いシルエットも見当たらない。安堵するなりそつと身を退いて、蘭に謝罪すると、先を急ぐ必要があることを伝えた。蘭もうなずき素直に、目の前の鉄筋コンクリートを見据えていた。この壁は、反組織派には強硬な山城に見えた。覚悟が決まったのだろうか？鈍感な彼にとっては、なんとも理解の難しい、読み取りにくい表情だった。

やつとので、例の建物に到着した。蘭に付き添う園子を先頭に、そろそろ入り口へ近づいていく。

「待った！入るのは入り口からやない、監視カメラの見張りをかいくぐる事ができる、抜け道を通るんや」

服部は、ついてこいと目配せして、隣のマンションの階段に足をかけていた。

「平次？隣からは侵入でけへんって知ってるやろ？窓を出入りするのは無理やで」

和葉はそういつて十数センチしかない、普通は路地と呼ばれる隙間

から壁を見上げるが、やはりこの建物も例外ではなかった。しかし彼女は、じつと見るうち、意味を理解し笑顔になっていた。

「わかった！ほんなら、すごいこ！急がば回れてやつやね？」

すると急に、小走りで平次に追い付くと蘭たちを手招きするのだ。仕方なく園子、玲香、蘭も非常階段を上がって三階まで移動した。あれ？何か忘れてる。

今朝の案を頭の中で反復していた平次は、ふつと質問した。

「毛利の姉ちゃん、そういえばコナンの眼鏡、最後に渡したのあんたやったよな。あれ、どこにやったんや？」

すると、蘭はしばらくきょとんとして、ほほ笑みながら、微妙に含みのある声でこう答えた。

「もう、場所はわかったんだから必要ないでしょ？荷物になるといけないし、置いてきちゃったよ」

「ええっ！どこにや？探偵団の場所は分かってても、工藤の行動とか……」
「服部くん、ちよつと疲れてるよ。新一は大丈夫なんでしょ？」

服部は、言葉を失った。なんかおかしい。数分前に言ってたことは正反対だ。しかも何故、置いてきた？場所を言いたくないみたいだ……

そんな彼を尻目に、蘭は彼を追い越し、和葉と話しにいった。こんな時工藤がいてくれたら、一発で理由がわかるんやろな……

そうこうするうちに目的地——屋上に足を踏み入れていた。隣はテレビ局である。屋上に監視カメラを設置するような、資金の無駄遣いはしないに決まっている。そして、そのビル同士の間隔は十数センチ。さすがにフェンスがあったが、またげば楽に踏み越えられる幅なのだ。

「窓がダメなら天井を乗り移ればいいのね！体力も使わないし、レディーのことも考えてくれなんて！」

「はあ！？」

園子らしいセリフだ。無視して、フェンスをつかむとよつ、と反対側に着地する。

「間隔は狭くても落ちたら大怪我やからな。慎重にくるんやぞ」

順番に渡ってくる女子を手助けして、最後に園子が軽い音を立てて飛び移ることに成功した。

ここが最終的に決着のつく敵地。命懸けの頭脳戦の幕開けである。

レジスタンスのご到着（後書き）

NEXT HINT（笑）

この蘭の笑いが新一の計画に結び付いてきます！

まだヒントが少ないですが、後の章で気になるところがあれば推理してみてください。

銀色の瞳

三階建ての屋上に立ち、下を見ると自分達がいたとおりの反対方向にポルシェ356Aの車体が確認できた。車内に人影はない。

どこへ行っているかは考えないようにして、蘭たちに向き直った。この中で、男子も探偵なのも自分だけとあって、服部の役目は責任重大だった。今まで工藤と捜査したときと違うのは、新一が生きてるという事実が明るみになって、蘭たちの存在までばれたことだ。新聞のインタビューには、自分は探偵だから、となるべく彼女らを協力させないで、探索の目を遠ざけた。でも、ほとんど寝ずに新一が消えた理由を、考えていた玲香を止めるのは不可能だったし、デパートですれ違ったのならそんな努力も水の泡。

「ここからは何が仕掛けてあるか、わからん。いわゆる組織の奴らが蜘蛛の巣を張り巡らしてるところにいくんや。用心せえや」

再び忠告すると、屋上から降りる出口のノブに手をかけた。階段を降りるたびコツコツと音が響き、その音すら奴らに届くのではないかと懸念したくなるような静寂だった。

最下段に続くここは、三階のタレント専用飲食店。

「ここに用はないな」

「なあ平次。計画に水をさすみたいで悪いんやけどさ、隠れてこそそ移動しても、悪い人が見つかるんやろか」
さらに園子も、口を挟んだ。

「それならいつそ、カメラに写って相手が現われてくれるのを待ったほうが……」

「んな危険なこと……」

次の言葉に困った所で、玲香が助け船を出した。

「迷っててもしょうがないから、とりあえずカメラの映像を監視できる部屋にいかない??そこならカメラの死角もわかるし、こっちから探せるし」

「……せやな」

行き先が決まり、静寂の階段を降りる。どっきりの企画でも無いかぎり階段にカメラはないはずだ。廊下に出てからどうするか。

二階のフロアは、上よりぎやかだった。引っきりなしに扉が開いて取材スタッフが出入りしていた。この人込みに紛れていけば、ごまかせるかもしれない……服部は、全員に指示を出して、タイミングをはかった。

「日紫佑帆さん！佑帆さん！2日前の怪盗キッドのインタビューですが、何か進展はありましたか!？」

突如一階から声が聞こえてきて、あのニュースキャスターが通り過ぎた。彼女は、いい加減な報道で責任問題を問われてるくせに、ユ―モアセンスが視聴者に受けて未だにマスコミ業界に残っていた。しめた！服部は和葉の手を引くと、追い掛ける報道陣の凄まじい勢いにのって上手く二階に入り込んだ。

音響室……楽屋……物置――映像保管室ならびに映像編集室!？

そう、テレビ局では、カメラの情報は映像という名目で保存できるのだ。なんとなしに、壁に寄って、ノブを回した。よし、鍵はかかってない。最後に日紫が新一が泥棒の仲間になったというハツタリを言うのが耳に入った。

――そうつと中に入る。室内には名前の通り、聞き覚えのある番組名の張られたDVDがずらつと並んでいた。ここじゃなかったか……

しかし、目指していた部屋は近くにあった。入ってきた位置からして左にあたる方向にもう一つのドアがあったのだ。半開きになっている。早速開けようとした園子を蘭が止めた。

「ねえ、カメラを仕掛けたなら実際に監視する人が必要じゃない……ということとは、中にいる人こそ」

「組織の仲間なのね！」

二人は顔を見合わせると、少し離れて耳を澄ました。

「え？玄関で見かけた？バカね、カメラには映ってなかったわよ。その子は別人。わかった？尋問するのも時間の無駄よ、放っておきなさい」

園子が服部を振り返って、首を傾げた。理由を聞かれても、俺にだって意味不明や。首をふりかえすと、肩をすくめられた。

部屋の人物は無線を切ったようだ。わずかな音でも聞き漏らすまいと、間を詰める。そいつの視線は映像に戻ったのか、カメラの音量が大きくなった。

「そこにいるのは、クールキッドかしら？」

突然冷たい声が、飛んできた。

「フフフ、違ったみたいね」

服部は、電気ショックを受けたときのように飛び退いた。ベルモットの銀の瞳が、隙間からのぞいていた。

銀色の瞳（後書き）

ヴェルモットの瞳って何色なんだろうね……

私は勝手に銀だと思っていますが、灰色にも見えますし…

また感想、評価お願いします
ゝ

無言

扉が開いてしまった。

開けたのは他でもない、ベルモットである。グレイの瞳に、プラチナブロンドのロングヘアー、それから黒ずくめの女だった。

「さあて、どうやってここまで来たか、教えてもらおうかしら？」

ベルモットは、懷から拳銃を取り出し服部の額につけた。怖気づく蘭たち。にらみ返して、答えを考えた。別に入ってきた場所くらいいつでも、支障はないだろう。それはあくまで、この建物の構造であり、入ってしまった今は知られようが関係ない。だが、答える前にベルモットが質問を重ねた。

「まあ、どこか死角を通ってきたのかしら。ところでこの映像保管室、私がいた隣の部屋から監視できるの、予想してなかったよね。大方、監視カメラの映像を映す部屋に、カメラは置かないと思ったんでしょね」

服部が、小さく舌打ちした。和葉がハラハラしながら、両者を見つめる。だって大切な幼なじみだ。自分等だって気付かなかったんだし・・・

ベルモットは、拳銃を服部に向けたまま、テレビに近づいてさらに追い打ちをかけた。

「ほら、この画面が今あなたたちのいる部屋の映像。このボタンで起動したり、角度を変えたりできるのよ」

そういつて、服部に視線を戻して、はずみで軽く机に手をついた。偶然例のスイッチに手が触れたらしい。ビツ、と機械音がなって、映像が消えた。ベルモットは素知らぬ顔で、踵を返して歩いてきた。もしかして、気付いてない！？いやいや、うちらだって音でわかるんやで？

和葉は、画面に目を奪われて固まっていた。それだけで、事態を知らせてるようなものだった。

「さてと、わざわざ危険地帯に踏み行ってきたみたいだけど、目的は子供達？」

ベルモットは質問した。しかし平次は、問いには反応せず黙っていた。

すると彼女は芝居がかった仕草で、ため息をついて、尊大な口調で言い放った。

「今のことが気になってるんでしょう？私は、敵を追い詰めたことで気分が高揚し、誤ってカメラの電源を切った不祥事にも気付けなかった、のよ」

平次はぽかんとした表情を浮かべた。ベルモットの言った意味が信じられなかった。

「ジンへの言い訳はこれで十分ね？最もあの方のお気に入りである私を、彼が責められる訳ないもの」

「……俺達を庇うのか？」

「言ったでしょう。私は、間違えてスイッチを押したの。誰も助けてないわ。まあ、カメラも消えてしまったことだし、少しは作戦の内容を話したくなった？」

「先にそんな芝居をした理由を話せや！」

平次は精一杯睨んだが、彼女の口からは、例の聞きなれた常套文句が出てきたのみだった。

「The Secret Makes A Woman Woman」

服部は困って、和葉を振り返った。和葉の視線は今度は拳銃に当てられていた。もしベルモットがなにか企んでいるとしても、そうではなくとも、拳銃を突き付けられているこの状況。明らかに不利だ。平次は思い切って話を切り出した。

「俺は、あんたらを倒すためには、不意打ち食らわした方が効率的にええと思ったんや。……そんで、ミスって捕まったフリして油断した隙に、戦おうと作戦を練った。その捕える役回りはある人に頼むことに決めて、探しとった。卑怯やとは思ってたけど、拳銃を使う方がよっぽどアンフェアや、ちやうか!？」

ベルモットは挑み掛かるようにぶつけられた言葉を、やり過ごしてたたみかけた。

「ある人って言うのは、キール、CIAの諜報員のことね。万が一工藤新一と鉢合わせしても、彼女が新しい人質を取るはずのない事実と、あなたたちの余裕の態度で事情は伝わる」

服部は、眼を見開いた。

「知つとつたんか!?じゃあ……」

「ふふっ、キールは赤井と連絡を取って上手く逃げたわ。組織の洞

察力も甘く見られたもんね。あなたたちの計画、どっちにしろ失敗じゃない」

服部は唇をかみしめながらも、新一から聞いていたキールが無事だったことに安堵した。

ベルモットはそつと銃口を下げた。服部が上目遣いに、新たな裏切り者の表情を伺った。

「あんた、協力……」

言い終わる前に、ベルモットは隣の部屋に入ってカメラの電源をつけた。

そして安全装置のかかった銃を、蘭に向けてこういうのだ。

「子供達とあなたの命が惜しければ、おとなしく着いてくることね」

被害者、の驚愕の面持ちは、はたからは恐怖の入り交じった敗北の表情に映った。

無言（後書き）

ベルモットの言わなかった理由は、時間があれば私の小説の「決死の戦い」の善悪逆転を読んでください。

宣伝じゃないので、当然読まなくても話がわかるようにします！でも2回同じことを書くのは、以前読んで頂いた方の迷惑に思ってたからです。（汗）

一作目を放り出して新しい小説を書いた自分が悪いです（笑）

謎のこだますテレビ局

新一は走っていた。手に細い笛を持っている。時間はあと何分だ？ そう多くないことは確かだ。腕時計は、例のバスジャック事件の影響で止まっている。この作戦に、ビルに侵入するまでの計画や過程など必要なかった。そういうわけで今、正面玄関についたのだ。臆することなく、自動ドアのカーペットを踏む。まあ通常、入り口付近には監視カメラがついている。ここはテレビ局だしな。FBIのメンバーが俺を発見したら、意味不明だと首を振ることだろう。そう、俺は、大きく計画を外れたことをしてる。仲間を騙してしまつたような罪悪感はあるものの、計画の内容を細かく指示されてはいし、大まかな目的しか伝えられてない。別に、約束を破ってないさ。それでも、あのマジシャンが望んだ方法ではないことは、明らかだった。……やっぱりあった。新一はカメラに向かって眉を吊り上げてみせると、ポケットの眼鏡をちらつかせた。好奇心でいっぱい小学生二人が、ちょうど十分前に記者の祐歩が通りかかったと騒いでいる。これが終わったらでたための記事を改めさせてやるんだ……忙しいテレビ局内では、ひっきりなしに扉が開閉していた。

広場の中央には、カメラを構えた男性の像が立っていた。テレビ界舞台裏では有名なのだろうか……新一はその像の前に設置されているベンチに足を組んで座った。そして、その場所はやはり監視カメラの正面なのである。ごぼう早く反応がないかと焦る新一だったが、仕方なくベンチに座ればいやでも目に入る像の人物の説明書きを読んで気を紛らわしていた。五芒星のマークが右上に小さく書かれたカメラを持った人物の名前は木島秀志。相当変わった性格だったらしく——それともひねくれているというべきか——仕事でも絶対完璧な人は雇わない。なんでも、自分の才能があるのに生かしきれない人ばかりを雇うらしい。初めから完璧な人などいない。自分

がそうだというんならほかのところでもやっていけるだろう！うちに来なくてもいい！と追い出すのだそうだ。ところが、それが功を奏して——というのもおかしい話——仕事の中で才能を見出し、活力の湧いた社員のお蔭で芸能の業績が急激にアップして結局は彼のためにもなっているというからこういうのもありなんだろう。「そして、このテレビ局にも寄付していただき、世界の情報伝達に大いに貢献——」と締めくくってあった。

さて、いつまでもベンチに悠々と座っているわけにもいくまい。目深に帽子をかぶった中年女性が、俺の隣に座った。俺は座席一つ分隙間を開けてそいつを観察した。まだ敵かどうかはわからない。帽子を深くかぶってるからと言って、知らない奴なら顔を隠さなくてもいいし、知ってる奴なら変装してくるはずだ。誰かを待っているように、時計を見たり地下のテレビ収録が行われている場所へ通じる扉をちらちら見たりしている。案外ディレクターかもしれない。すこしして左手の背の高い男性がやってきて彼女に向かって手を振ると、慌てた立ち上がった。なんだ……見当はずれじゃねえか……

「もう、また行方不明になったかと思いましたよ——」その女性はどこかで聞いたことがあるようなセリフを叫んで去っていった。

「いや、それが地下の階段が撮影で立ち入り禁止だったから——その——回り道して別の場所から出なきゃいけなかったんだよ……ははは」

父さんもよく締め切り前に逃亡したな、やっぱりテレビ局の人らしい……苦笑いを浮かべて新一も席を立ち女性が凝視していた地下の扉を引いてみた。

「開くじゃねえか……」

気のせいじゃなかったらしい。入ってきたときに開いていた、たくさんさんのドアのなかに、誰も人が出てこないまましまったものがあっ

た。その時は、誰かが入った後だと思ったけれど。テレビ局の人間にうそをついて通らせないようにする理由なんて限られてる。ここに組織がいることも考えれば、うその使い道は人質監禁しかないだろう。快斗、ごめんな。

新一は、持っていた笛をポケットにしまうと一人で階段を降りて行った。

謎のこだますテレビ局（後書き）

お久しぶりです！

ここで皆さんに聞きたいことがあります。

パソコンを変えたせいかもしれませんが、新しい小説を投稿しても
新着小説に含まれないんです……

何故だかわかる人は教えてください

幻想

その扉は案外重かった。俺は、家の近くの市民ホールの扉を思い出した。ここはテレビ局……ということは防音か。誰かが叫び声をあげても絶対に気づかれない場所なわけだ。部屋はテレビ局の機材もなくがらんとしていて、人の気配はなかった。腕時計の針は、午後一時二十五分を指している。

新一は、小笛を取り出して口をつけ、息を入れた。音はならない。半開きの扉の陰から部屋の中にかけて、かすかに何かがはためく音がした。そのことから、新一は快斗がすでに、ここに、到着していることを知った。

新一は、戦いに行く前の兵士が、これから訪れるであろう過酷な試練を冷静に見据えるように、足を組み、黙って壁にもたれかけていた。

先ほど入ってきた扉から、今度は別の物音がした。新一の体が、毒の副作用によって縮められて二年、ジンと新一が仮の姿でも変装でもなく、向き合っていた。ジンは憎々しげな表情を浮かべて、対峙した。

「久しぶりだな、工藤新一。予想はつくだろうが、ここに来た以上、おまえは俺の手の内にある。しかし堂々と入ってきたな……それは度胸か？それとも、ふっ、諦めか。なんにしても、オレの策に刃向う奴には容赦しない。子供であろうともな」

ジンの目が危険なものを含み、長方形の室内の奥を見やった。ガタン、とブレーカごと電源が落ちあたりが暗闇に沈む。電子音が聞こえ、ジンの視線の先にある番組のVTRを映し出すパネルが光を放った。

同じく暗い、小部屋に、人影が見えた。監視カメラがじつと少年探偵団を捉えた画面を、送っているのだと分かった。ここでも新一は怯まなかった。監視役の大柄なウォッカが両手を縛られた灰原に屈みこむように目線を合わせた。

「シェリー、お友達だぜ」

彼はぞつとする笑みを浮かべて、こちらを顎で指し示す動作をした。新一ははっと、ななめの角を見上げて、そこにも監視カメラを確認した。灰原はレンズを隔てて、厳しい表情で新一を見返していた。ウォッカがニヒルに笑う。

「ジンの兄貴、シェリーが怒っていますぜ。なんせ、その高校生探偵のお陰で、お先真つ暗、そいつが薬の効能を全て話してしまえば、シェリーも用無し。例の研究をつづけに組織に戻ってくることも出来なくなる。なあ、シェリーお前はそういうやつだろう?」

「私は、シェリーじゃないわ、もう」

歩美、元太、光彦は状況が呑み込めないまま、組織に圧倒されて動けない。灰原は、唇をかみしめたが、それでも希望を求めるように新一の表情を見つめていた。

「否定するのか? ん?」

灰原が以前と違い、闇から抜け出そうとしていることが理解できないジンは、からかうように笑った。新一には、灰原が自分の気持ちの上ではもう、シェリーではないといったのだと分かった。

「ジンの兄貴、その探偵から早く情報を聞き出しちゃいましょうぜ。埒があかねえ」

少し考えるような沈黙があった後、ジンがピストルを構えて銃口を

新一に向けた。灰原の瞳が微妙に揺れ動く。その変化をジンは見逃さなかった。

「ウォッカ、シェリーは情のない女だと思っていたが……何を血迷ったか。自ら作った薬の研究対象に情が移ったか」

淡々と無機質な声が、機械を通じて灰原に届いた。

「研究対象?? ああ、そういえばそうだったわね。『情』なんていう言葉の意味、あなたには一生わからないでしょうよ」

彼女はミステリアスな表情で、首を振った。ジンは引き金に指をかけた。

「やめて!」

「どうやら、ご本人から話が聞けそうだ」

冷静に状況を分析してきた新一も、さすがに怒りがこみ上げ、嫌悪感が駆け巡るのを感じた。嬉々として、画面を食い入るように見つめる冷酷なジンを見ていられなくなった。灰原が、苦しそうにしている息をついた。

「まずは拘留された部屋から……どうやって脱出したかね、私は……」

新一は、そつと時計が三十五分を回るのを視認すると、部屋に入ってくるときに聞こえた合図の音を思い出し、ジンの気がそれている間に小笛をくわえた。息を入れても、やはり音はならない。しかし今度は変化があった。なにかがはためく音——羽音が部屋の至る所から聞こえてきた瞬間、新一は後ずさって一気に白い羽毛の渦の中に消えた。快斗は、あらゆる換気扇などから仲間を忍ばせていた。

音のならない笛は、鳩笛の一種だった。

ジンは殺気立ち、弾が七発込められたピストルを乱射した。

「ジンは鋭いから、すべての弾を使い切ることはないと思うが、なるべくたくさん、撃たせておけ。知ってつか？おれの鳩は賢いんだぜ？」

新一は白い渦の中で右往左往して、居場所を悟られないようにしながら、大砲の様に響く音の回数を数えた。羽が顔をたたくのが、力強く思えた。鳩は幸せの象徴。こんな時でなければ、滅多にない幻想的な風景である。銃声がやんだ。霧が晴れるように、鳩が次々と新一の肩や足元に舞い降りた。

「……六発だな」

新一が、つぶやく。VTR画面が掻き消えた。快斗が、音響室に到達したらしい。脳裏に灰原とウォッカがそれぞれに驚いた表情をसरるのが、残像として残り、焦点が狙いを定めたジンに合った。

一瞬の差で弾は新一の左肩をかすめて、すべて尽きた。

引き金

肩には傷がつき、鳩が何羽か一斉に飛び立ったが、新一の表情は勝ち誇っていた。

「ガキとシェリーを逃がしたのか」

新一は気障に肩をすくめた。

タイミングを計ったかのように画面に探偵団の姿が映し出された。

しかし、ジンはますます疑いを強めただけだった。

彼はトランシーバーに向かってキャンティに命令した。

「上のガキの様子を見てこい、今すぐだ」

そして新一に向き直り、目を光らせて言い捨てた。

「こんなことで騙されると思うか、あれは停電だった……とか言わないだろうな。まあいい、我々が人質に取っているのはガキだけだと思うな」

「誰がいるって言うんだ……」

質問には答えず、ジンは再びトランシーバーに向かって話しヴェルモットを呼び寄せた。やけに時間が経つのが遅い気がする。

五分ほど経つと、扉の取つてが下に傾き、軋んだ。そこには、ヴェルモットとさらに人質に取られた蘭たちがいたのだった。まったく、おめーらは…

新一は目眩がするのをこらえて、彼らと向き合っていた。

「APTX4869のことを教えてくるき気なっただか」

この状況で話すのかよ……気がすすまねえけど時間稼ぎにはなる。
新一はジンではなく蘭の目を見据え、しぶしぶ話しはじめた。

話の途中でキャンティが入ってきて、部屋の中のを警戒させた
他は、何にも邪魔されることなく、話は続けられた。

終わりに近づくに連れて、蘭の表情が曇っていくのに耐えながら、
なおそちらを向いていた。話し終わり、静かに息をつくときャンティ
イがつかつかとジンに歩み寄り、予想どおり、部屋に探偵団はいな
かったことと電源が切れた後に映ったのは、記録してあった三十分
前の映像を再生したものであることを伝えた。

「薬の秘密を知ってることだけが希望だったのにな、おまえにもう
用はない。キールおまえの拳銃をかせ」

ジンが冷たく言い放つと、キールはブーツの踵に仕込んでおいたも
のを取り出して渡した。

「あばよ、名探偵」

蘭が飛び出していこうとするのが見えた瞬間、ジンがこっちに銃を
向けて引き金を引いた…

蘭Side

蘭が、音響室でヴェルモットと話したすぐ後、ジンから連絡が入っ
た。すぐ行かないと怪しまれることは間違いなかった。ジンの病的

なまでの疑り深さを、ヴェルモットは十分に承知していた。とりあえず、任務が成功したと報告をしたのだから、そういう演出をしようとここに向かったはずなのにその後すぐにこんなことになるなんて…

新一の告白を聞いた今残っているの気持ちは、驚愕と一度に二人の人を失った悲しみばかり。蘭は状況も忘れてヴェルモットを振り払い、駆け出したが、ジンは不自然なことではないとみなしたらしく、興味を失った表情でヴェルモットを顧みた。

服部たちは、蘭が新一を揺すぶる姿を見ていられなくなり、目を逸らした。ジンがヴェルモットに何か言うのが聞こえても、まとまった意味を持った言葉として伝わってこない。なにも理解できないよ

……

キャンティが突然なにか騒いで、ジンとヴェルモットに伝えていた。恐ろしい声で、キャンティに指示を出し、二人が出ていった。私達の監視でも任せられたのね……考えるのは止めた。

引き金（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164k/>

怪盗キッドVS手錠VS工藤新一

2012年1月8日22時58分発行